2017
第9号

国士舘史研究年報

楓原

国士舘創立100周年記念

学校法人 国士舘

2017
第9号

国士舘史研究年報

楓原

国士舘創立100周年記念

学校法人国士舘
Kokushikan

特集　国士舘創立一〇〇周年記念

国士舘一〇〇年のあゆみ

100 years history of Kokushikan since1917

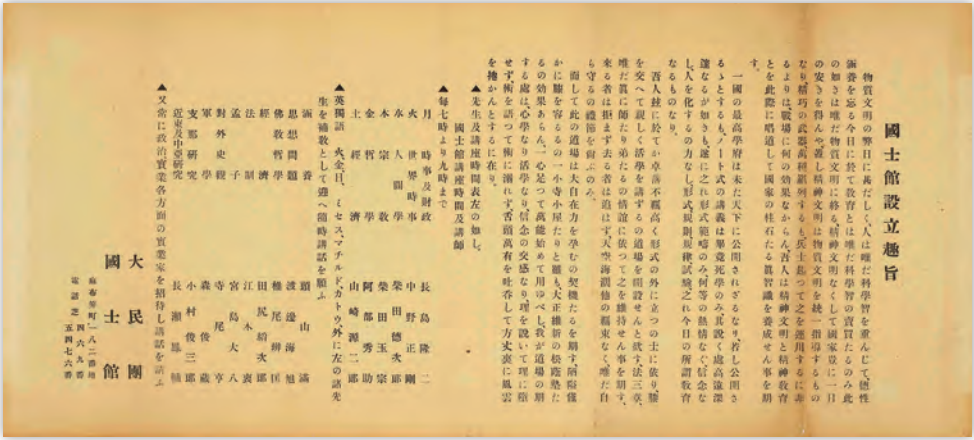
青年時代の柴田德次郎

1917 国士舘の創立

一九一三（大正二）年、柴田德次郎らが結成した社会教化啓蒙団体「青年大民団」は、一九一七年、「活学を講ず」を宣言して、東京市麻布区笄町（現港区南青山）の事務所内に夜学の私塾「国士館」を創立した。

1917年　青年大民団団員（於青年大民団事務所）

1918年８月　国士舘巡回夏期講演会（於大阪市公会堂）



國士館設立趣旨

物質文明の繁昌に眩惑し人は唯だ科學智を盡んとして個性価値を忘る今日に於て教育とは唯だ科學智の賣買たるのみ此の如きは唯だ物質文明に終始して精神文明なくして國家豈に一日の安きを得んや蓋し精神文明は物質文明を統一指導するものなり精巧の武器高程能列するも兵士起つて之を運用するに非るよりは戰場に何の効果なからん吾人は精神文明と精神教育とを此際に唱道して國家の柱石たる眞智識を養成せん事を期す。

一國の最高學府は未だ天下に公開されざるなり若し公開さるゝとするも、ノート式の講義は單意死學のみ其說く處高論深遠なるが如きも遂に之を形式範疇のみ何等の熱情なく信念なし人を化するの力なし形式規則規律試驗之れ今日の所謂教育なるものなり。

吾人茲に於て如何に高く形式の外に立つの士に依り驅を交へて親しく活學を講ずるの道場を開設せんと欲す法三章、唯だ眞に師たり弟たるの情誼に依つて之を維持せ事を期す。來る者は拒まず去る者は追はず天空海濶他の羈束なく唯だ自ら守るの禮節を貴ぶのみ。

面して此の道場は大自在力を孕むの契機たるを期す屑屑か眼を寄るるの一小寺小屋たりとなかれ大正維新の秘蹤塾たるの効果あらん、一心足つて萬能始めて用ゆべし我が道場の期する處は、心學なり活學なり信念の交感なり理を說いて理に徹せず術を語つて術に溺れず否頭高有を吐呑して方寸裏に風雲を捲かんとするに在り。

▲先生及講座時間表左の如し。

國士館講座時間及講師

▲毎七時より九時まで

月　時事及財政　長島隆二
　　世界時事　中野正剛
水　人間學　柴田德次郎
　　宗教　柴田玉宗
木　哲學　阿部秀助
金　經濟　山崎源二郎
土

▲英獨語　夫金月、ミセスマチルドカトウの外に左の諸先生を補教として遇へ隨時講話を願ふ

演説　山岡萬之助
思想問題　渡邊海旭
佛教哲學　尾崎辨榮
經濟　田中穂積
法學　民部大吉
　　江木翼
　　宮島資夫
孟子　大八木敦
對外史　尾崎行雄
軍事學　寺尾亨
農政　森本厚吉
支那研究　村上俊三
小説　長瀬鳳輔
東洋史研究

▲又常に政治實業各方面の實業家を招待し講話を請ふ

大民團
國士館

麻布笄町二八二番地
電話芝五四七六番
麻布笄町二八二番地
電話芝五四七六番

1917年　国士舘設立趣旨

1919

世田谷移転と大講堂

一九一九（大正八）年、国士舘は、世田谷の松陰神社畔に校地を得て、財団法人を設立し、教育の基盤を整えた。国士舘の運営支援のために発足した「国士舘維持委員会」には、頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富蘇峰など各界の要人が名を連ねた。

1919年11月　国士舘落成式・開舘式

1920年頃　大講堂での阿部秀助講義

柴田德次郎筆
「誠意・勤労・見識・気魄」（右より）

1925年６月　国士舘完成長老会（於渋沢栄一邸）
（前列左より頭山満、野田卯太郎、渋沢栄一、徳富蘇峰
後列左より花田半助、渡辺海旭、柴田德次郎）

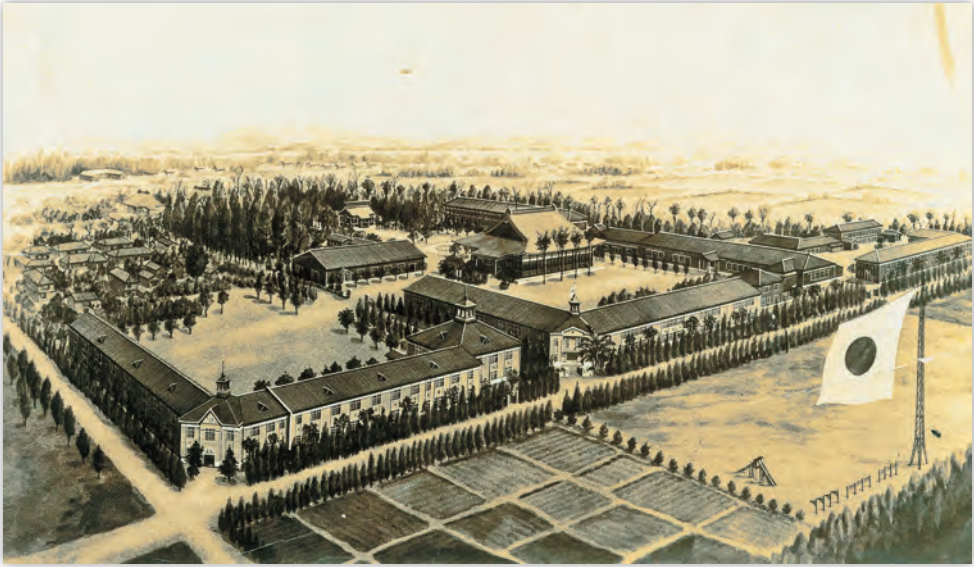
1925

中等教育・高等教育機関の設置

国士舘は、一九二五（大正一四）年に中学校、一九二六年に商業学校、一九二九年に専門学校を相次いで設置し、法令に基づく諸学校を整えて特色ある教育を展開した。特に、専門学校では、剣道・柔道の武道と国語・漢文の教科を柱として、厳格な寮生活による心身の鍛錬と人間形成が図られ、文武両道の校風を高めた。

1932年　中学校校舎前の生徒

1942年頃　剣道の稽古



1931年頃　国士舘鳥瞰図

1941

校風の発揚と戦争

一九三〇年代以降、諸学校生徒の活動は活発となり校風の発揚が見られた。一方で、戦時色が濃くなり戦局の悪化とともに、教育の場においても勤労動員や学徒出陣などによって勉学の機会が失われていった。一九四五（昭和二〇）年五月、米軍の空襲によって、国士舘は校舎のほとんどを焼失した。

1940年10月　大運動会

1942年　軍事教練の査閲

1943年　出征の日の丸寄せ書

1939年頃　国士神社前での朝礼
（左は模造松下村塾「景松塾」）

1944年　出征生徒の送別

1946

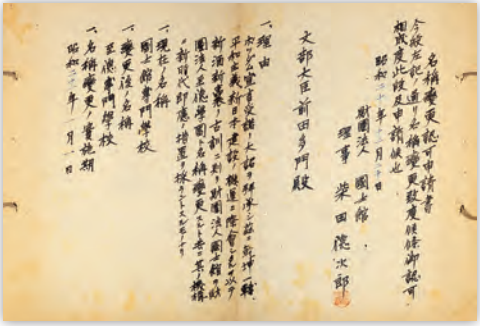
戦後の復興と再建

第二次世界大戦の敗戦後、GHQ／SCAP（連合国軍最高司令官総司令部）の占領政策によって、国士舘は、武道教育の禁止や「至徳学園」への校名変更を余儀なくされ、苦難の時期を迎えた。一九五二（昭和二七）年五月、緒方竹虎らによる「国士舘再建趣意書」を発表し、八月には「国士舘大学維持員会」が発足して、国士舘の再建を支えた。

1947年８月　焼け野原となった国士舘付近
（GHQ 撮影／国土地理院所蔵）

1946年頃　至徳中学校の英語授業

1948年頃　壇上の校長鮎沢巌



1945年12月20日　校名変更申請書

1952年５月１日　国士舘再建の会議

1946年　復学した学生

1958 国士舘大学の創設

一九五三（昭和二八）年、国士舘大学維持員会の支援を受けて、「国士舘」の校名に復すとともに、国士舘短期大学を創設した。次いで一九五八年には、宿願の国士舘大学を創設し、体育学部を設置した。

1954年11月　短期大学校舎落成式

國士舘大學　体育學部開學式　大校舎落成

海軍記念日を選びて
嚴肅な式典を擧ぐ

感激の式辞

學長　柴田德次郎

1958年５月27日　体育学部開学式を伝えた広報紙

1963年５月　日本体操祭での学生演技

1960年３月15日　体育学部第１期卒業生

1961

総合学園への飛躍

一九六〇年代、国士舘は大学の拡充を図り、次々に新たな学部を設置した。一九六一（昭和三六）年に政経学部、一九六三年に工学部を設置し、一九六五年には政経学部二部と大学院を創設、一九六六年に法学部と文学部を設置して、中・高・大・大学院を擁する総合学園に発展した。

1961年５月27日　政経学部開学式

1966年　政経学部田村幸策ゼミ

1966年頃　工学部の授業（化学実験）

1968年　政経学部二部（夜間）の社会人学生

盛大に政経学部開学 新校舎落成式

真理の聖火 闇路照す

1961年６月27日　『国士舘大学新聞』第１号

1967年　総合学園となった世田谷校地

1973年５月　文学部第１回初等運動会

1968年11月　法学部第１回模擬裁判

1966年10月　第１回中・高合同運動会

1965年４月　大学院第１期入学式

1966

教育環境の整備と特色ある教育

学生・生徒数の急増に伴って、世田谷校地では校舎や寮の整備を進めた。また一九六六（昭和四一）年には、鶴川校地（現町田キャンパス）を開設するなど、校地の拡充を図った。総長柴田徳次郎のもとで、国士舘は「実践倫理」などの特色ある教育を展開した。

1961年頃　舘長訓話

1963年頃　世田谷校舎正門と学生

1965年　女子寮の学生

1966年11月　創立49周年記念式典

1970年　鶴川校地

1973

創立者の逝去と新たな学園への模索

一九七三（昭和四八）年に創立者柴田徳次郎が逝去した後、「近代化委員会」が発足して学園組織や人事制度、学内の諸慣行などの改革が行われ、式典での分列行進や学生警備の廃止、服装の自由化などが図られたが、その後も改革への模索が続いた。

1977年11月　柴田徳次郎銅像除幕式

1973年頃　服装自由化後の学生

1975年５月16日　電子計算機センター開設式典

1980年６月　第１回就職セミナー

1983年４月　柴田会舘竣工

1984

学園の改革と組織の整備

急速な規模拡大と諸事業の展開により歪みが生じた国士舘は、学内外から学園運営体制の刷新が強く求められ、一九八四（昭和五九）年より新体制へ移行した。学園は「国士舘諸規定整備委員会」を発足させ、関連規程を全面的に整備した後、「将来計画委員会」のもとで今後の事業計画を策定し、飛躍への基盤を整えた。

1992年　多摩キャンパス開設と体育学部移転

1992年　完成した教室・管理棟（多摩キャンパス）

1992年　鶴川メイプルホール

1985年12月13日　第１回学長選挙

1992年　学生募集広告「maple」

1992年２月　入学試験

1994

中・長期計画と教育の拡充

一九九四（平成六）年に中期事業計画を打ち出した国士舘は、一九九七年の創立80周年へ向けて、教育・研究、組織、施設・設備の充実を図った。一九九四年には中学・高等学校校舎を整備し、翌年には国士舘大学福祉専門学校を太宰府市に設置するなど、時代の変化に対応して、教育・研究の充実を図った。

1994年　中学校・高等学校校舎

1994年４月　男女共学となった高校

1996年頃　福祉専門学校の介護実習

1994年　福祉専門学校校舎（太宰府校地）

1998

21世紀への対応と諸改革

国士舘は、一九九八（平成一〇）年に発足した「将来構想審議会」を中心に、新たな時代に対応するため全学を挙げて諸改革を行った。二〇〇二（平成一四）年には、短期大学を発展解消して21世紀アジア学部を設置するなど、教育組織の再編を図った。

1998年　中央図書館

1998年　体育・武道館

21世紀アジア学部の授業
（華道、日本の伝統音楽）

2002年　30号館（21世紀アジア学部棟）

2007

教育組織の再編と進展

国際化・少子高齢化など多様な社会的ニーズに対応するため、二〇〇七（平成一九）年に工学部を改組して理工学部を、二〇一一年には経営学部を設置し、また各学部では学科増設や再編を図った。大学院には、各研究科を相次いで新設して一〇研究科へと拡充し、大きな飛躍を遂げた。

2006年　体育学部スポーツ医科学科の救急処置実習

2017年　法学部法律学科の民事訴訟法（模擬法廷室）

2003年　ハイテク・リサーチ・センターパンフレット

開設パンフレット

2015年　全新入生への防災基礎教育

2017

創立一〇〇周年と未来へ

二〇一七（平成二九）年の創立一〇〇周年へ向けて、二〇〇八年に梅ヶ丘校舎、二〇一三年にメイプルセンチュリーホール、二〇一六年にメイプルセンチュリーセンター多摩など、各キャンパスを整備して教育の進展を図った。国士舘は、次の時代を見据えて「人と社会を支える力」を一層堅持し、さらなる歩みを続けている。

2008年　34号館（梅ヶ丘校舎）

2013年　メイプルセンチュリーホール

2016年　メイプルセンチュリーセンター多摩

2017年11月　国士舘100年祭での大提灯

2017年11月４日　創立100周年記念式典

国士舘創立一〇〇周年を迎えて

国士舘史資料室長　佐々　博雄

二〇一七（平成二九）年一一月四日、国士舘は創立一〇〇周年を迎えた。

ホテルニューオータニで行われた同日の記念式典は、彬子女王殿下のご臨席のもと、多くのご来賓、卒業生、教職員、学生が参加して盛大に執り行われた。一〇月二七日から記念式典に至る約二週間は、学園全体で「国士舘一〇〇年祭」として、各行事が催された。

国士舘史資料室では、国士舘一〇〇年祭における歴史展示や、記念式典にて配布するブックレット『国士舘１００年のあゆみ』の編集、収蔵資料の提供など、記念行事の全体を支え、多くの作業に努めた。その中の一つに、国士舘のシンボルである大講堂を文化財として公的な評価を得て後世に残す作業があった。図らずも、一〇月二七日の一〇〇年祭オープニングセレモニー当日の『官報』に、「国士舘大講堂」が国の登録有形文化財として登録されたことが公に発表された。

『楓原』第九号は、創立一〇〇周年記念号として本学の沿革概要を口絵に特集した。さらに「国士舘大講堂」の国登録有形文化財の記念として、大講堂が有する建築的特性について、実際に実地調査を担当された株式会社建文田中昭之氏・木川正也氏の分析を掲載することにした。論文には、平崎真右氏の「国士舘の設立とその時代―私塾、大正、活学の系譜―」を、また評伝として、宇田快氏の「「泳道」―初めて津軽海峡を泳いで渡った男・中島正一譚―」を掲載した。「国士舘を支えた人々」には、戦前・戦後の国士舘に深く関わった緒方竹虎を、また戦中の『大民新聞』の主筆であった坂口二郎の二人をとりあげた。

国士舘史資料室は、現在『国士舘百年史　通史編』の編纂に、特に専門委員の先生方の協力を仰ぎながら全力をあげて取り組んでおり、益々のご協力、ご支援をお願いする次第である。

二〇一八年三月吉日

国士舘史研究年報　二〇一七　楓原　第九号

国士舘創立一〇〇周年記念

目　次

特集

国士舘一〇〇年のあゆみ

巻頭言

国士舘創立一〇〇周年を迎えて　……佐々　博雄　19

論文と資料紹介

論文

建築調査からみえる国士舘大講堂の建築的特性　……田中昭之・木川正也　23
国士舘の設立とその時代―私塾、大正、活学の系譜―　……平崎　真右　75
国士舘史関係資料の翻刻ならびに補註　第九巻　……国士舘史資料室　101

国士舘大学工学部機械工学科・電気工学科設置認可申請書［抄］
設置要項　103　将来の計画を記載した書類　113

評伝

「泳道」―初めて津軽海峡を泳いで渡った男・中島正一譚―……宇田　快　117

国士舘を支えた人々

緒方　竹虎……菊池　義輝　133
坂口　二郎……浪江　健雄　141

平成29年度事業報告……国士舘史資料室　149

1　国士舘百年史編纂委員会ならびに専門委員会
(1)　国士舘百年史編纂委員会　(2)　国士舘百年史編纂委員会　専門委員会
2　国士舘史資料室の活動
1　調査・収集
(1)　主たる資料調査　(2)　オーラル調査　(3)　主な寄贈資料

2　整理・保存
(1)　資料目録作成状況　(2)　資料保存
3　利用・公開
(1)　収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）　(2)　ホームページ
(3)　教育普及活動
4　室の構成
(1)　職員　(2)　施設の概要
5　活動日誌

関係法規

国士舘百年史編纂委員会要綱／国士舘史資料室規程 …… 171

論文と資料紹介――論文

建築調査からみえる国士舘大講堂の建築的特性

田中昭之・木川正也

「国士舘大講堂」（以下、「大講堂」）は、文化審議会文化財分科会の審議・議決による同審議会の文部科学大臣への答申に基づいて、二〇一七（平成二九）年一〇月二七日、「国登録有形文化財（建造物）」に登録された。

本稿では、登録の申請に先立ち、二〇一六年七月に行った大講堂の調査に基づき、大講堂の建築的特性と改修・改変の歴史について紹介したい。

一　大講堂の概要

大講堂の建築年代を直接示す棟札は確認されていないが、雑誌『大民』（第四巻第八号・第五巻第三号、青年大民団、一九一九年八月・同年一二月）には、一九一九（大正八）年七月二七日に上棟式、同年一一月九日に落成式ならびに開舘式が挙行されたことが記録されている。なお、設計者、施工者についての明確な記録はない

表1　国士舘大講堂　建物概要（現在）

建築年代	構造	外部仕上	内部仕上	規模
大正8（1919）年上棟	木造平屋建て	腰下：洗出しモルタル、一部竪板張り 腰上：漆喰塗 屋根：銅板平葺き	［中央部］ 天井：折上格天井、一部目透し板張り 壁：漆喰塗 床：畳（縁付） ［廊下部］ 天井：竿縁天井 壁：漆喰塗 床：畳（縁付）、一部寄木貼り	建築面積285・34㎡（86・20坪） 延床面積268・81㎡（81・21坪）

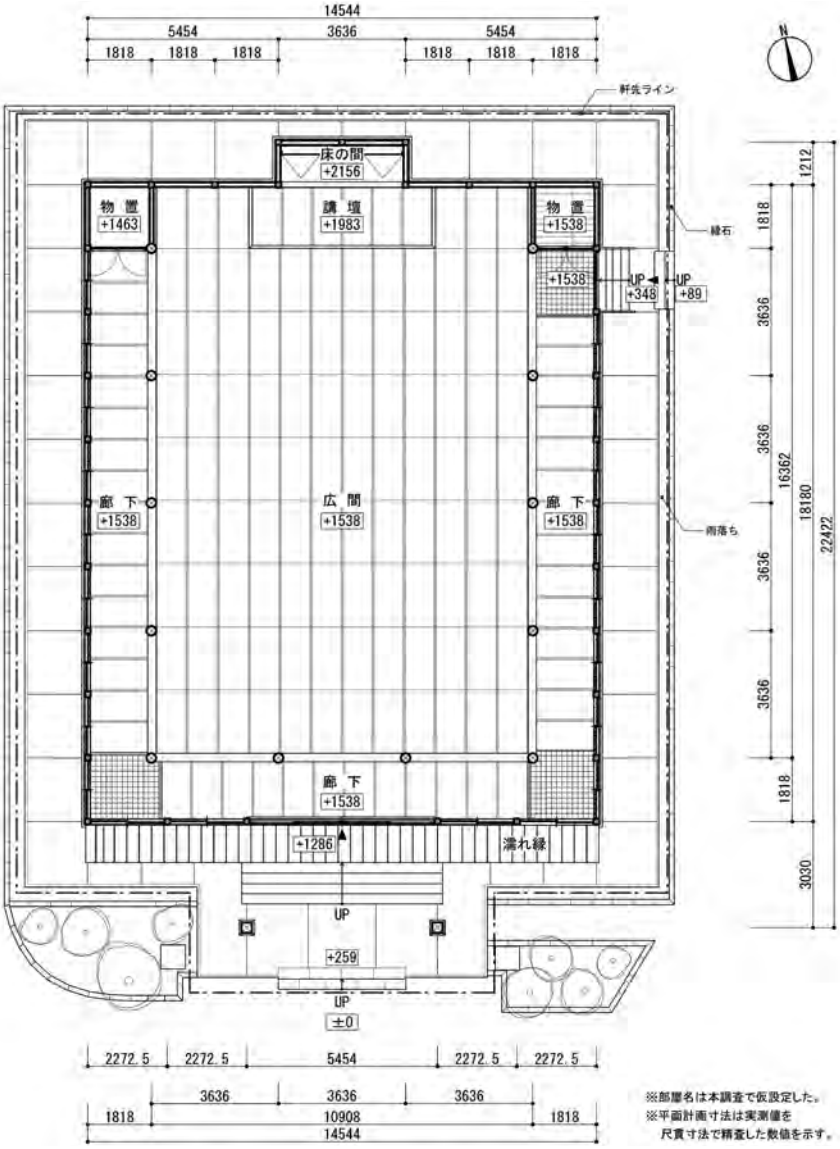


図１　2016 年　国士舘大講堂平面図

が、当時の設計図の署名、ならびに上棟式の写真にみえる職人の法被に「渡邉店」との記載が確認できる。なお、現時点「渡邉店」についてその詳細は不明である。

二　調査

二〇一六（平成二八）年度に実施した調査は、大講堂の建築時から現在までの用途や機能、および建築時の構法や建築後に行われた改変を明らかにし、その建築的特性を分析した。

本調査は大きく二つの方向からアプローチした。一つ目は現存する大講堂から直接的に情報を抽出する現地調査、二つ目は国士舘史資料室に保管されている図面、写真等の資料調査（大学関係者からの聞取り含む）を実施した。

1　建築調査

(1)　建築図面実測等調査

現状を把握するための既存図面（配置図、平面図）との照合、および建築的特性を把握するために必要な図面の作成（断面図や伏図、実測による野帳[1]図面などの作成）。

(2)　仕様・構法調査

大講堂の建築的特性を把握するため、仕様（使用材料や仕上げなど）、および構法（建築時やその後の改変後のものなど）のスケッチ、記録。

(3)　痕跡調査

建築部材に残る痕跡（現存しない部材があたっていた仕口（しぐち）[2]などの跡）のスケッチ、記録。

(4)　調査記録写真の撮影

2　資料調査

主に国士舘史資料室が保管している古図面・古写真、修理記録などの資料の写しを借用して内容の分析を行った。また、国土地理院が保有する古い航空写真なども並行して調査した。

3　調査日程等

(1)　日程

現地調査：二〇一六年七月七日～同月八日
資料調査：二〇一六年七月二八日

(2)　調査員

田中昭之、木川正也、牧野徹、伊藤香織、川原聡史、片山かな子（以上、株式会社建文）

三　現状からみる建築的特性

1　立地・配置

大講堂の建つ国士舘大学世田谷キャンパスは、世田谷区世田谷四丁目に位置する。周辺には北側に小田急線梅ヶ丘駅、東側に吉田松陰を祀る松陰神社がある。南側は世田谷区役所と接し、その先には東急世田谷線が走る。西側は勝国寺に接し、しばらく行くと井伊家の菩提寺で井伊直弼の墓所が所在する豪徳寺がある。

大講堂は、南側正門より北進した真正面、世田谷キャンパスのほぼ中央に南面して配される。その東には五号館（一九五八年竣工）、北には一〇号館（一九六六年竣工）、西には七号館（一九六三年竣工）と八号館（一九六四年竣工）があり、周り三方を校舎に囲まれる。

講堂の南前には、植栽サークルに囲まれた創立者・柴田徳次郎の銅像が建つ。キャンパス内の通路は、この銅像と大講堂を中心起点として東西南北に通っており、大講堂の周りは学生達が行き交う場となっている。これは、国士舘が移転した当初計画（一九一九年一一月に建てられた大講堂、本部棟、寄宿舎、道場の四棟）の軸線が基本となり、その後も唯一残ってきた大講堂を核として世田谷キャンパスが整備されてきたためである。

2　用途・間取り・意匠等

大講堂は、建設当初教室として使用されるほか、様々な式典や講演会場として利用されていた。関東大震災の際は被災者を広く受け入れたという記録も残っている。[3] 現在は、大学のオープンキャンパス等の行事やサークル活動に使用されている。

大講堂は基壇[4]上に建つ木造平屋建ての真壁造[5]りで、梁間八間、桁行一〇間、南正面に間口三間の向拝[6]がつき、切目[7]板張りの濡れ縁[8]が正面に付く。屋根は妻入り[9]の反りのある入母屋[10]造りとし、向拝部分を葺き下ろす。現在の屋根葺き材は銅板平葺きで、向拝の軒先に銅製の軒樋[11]を渡す。外壁は腰[12]下を洗い出しモルタル、腰上を漆喰仕上げとし、側柱の柱頭部に舟肘木[13]を据える。上屋筋[14]の丸柱は九寸（直径二七二㎜）とし、側柱は五・五寸（一六五㎜）角、向拝柱は九・七寸（二九三㎜）角とする。間取りは、中央を一〇八畳（五四坪）敷きの広間とし、その南東西三方に幅一間（一八一八㎜）の畳敷き廊下を廻す。廊下は天井高さ一一・八尺（三五六九㎜）の竿縁天井[15]とする。広間は天井高さ一六・二尺（四九一三㎜）の折上格天井[16]として広間の格式を高めている。広間正面

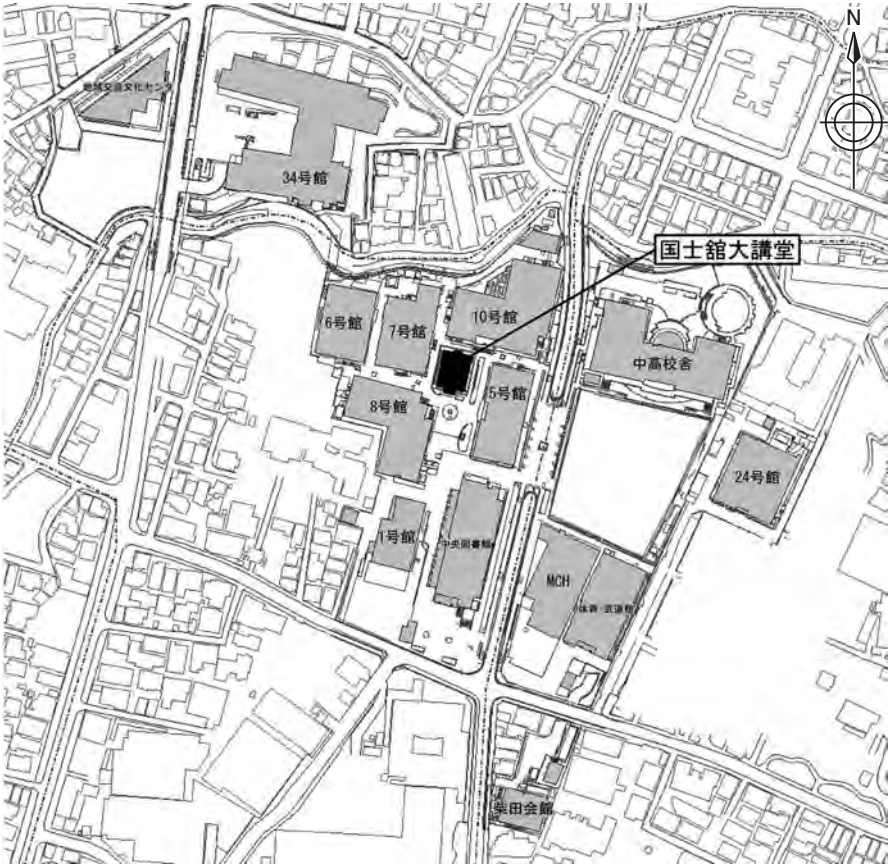


図２　世田谷キャンパス内の国士舘大講堂の位置（2017 年現）

奥には幅三間、奥行一間、高さ一・五尺（四五五㎜）の畳敷きの講壇を設ける。その奥には、さらに五・七寸（一七三㎜）上げた幅二間、奥行四尺（一二一二㎜）の床の間を設える。両脇廊下の北奥は、左右とも物置とする。

外観は一見すると入母屋造り、妻入り、流れ向拝付きの神社仏閣の様相を呈しており、「国士舘上棟式記事」（『大民』第四巻第八号、青年大民団、一九一九年八月）の「軽薄なるペンキ塗、西洋館の競って建造せらるゝ現代を超越し、［中略］鎌倉時代の講学所に観る如く、或は僧院の堂宇に似て、［中略］純乎たる日本式を発揮せるは、日本魂の為め大気焔を吐けるの概あり」の記述通り、国士舘の教育理念を日本の伝統的建築によって象徴的に表現している。

3　構法

(1)　計画寸法

平面計画寸法は、各柱間寸法を実測した結果、一間（六尺）は一八一八㎜、二間（一二尺）は三六三六㎜の近似値を示した。一尺が三〇三㎜の尺貫法により計画されたことが分かる。

断面計画寸法は、正面出入口内法（うちのり）[17]七・九六尺（二四一三㎜）、広間、廊下境内法八・五三尺（二五八六㎜）、土台上端から敷桁（しきげた）上端[18]までが一九・九尺（六〇五三㎜）、敷桁上端から棟木（むなぎ）上端[19]までが一六・〇六尺（四八六八㎜）であった。

枝割り（しわ）[20]（垂木割り（たるきわ））についてみると、一枝寸法（垂木[21]が配される間隔）の実測値は一・五尺（四五五㎜）である。正面の向拝および出入口の柱間は一二枝（一・五尺／枝×一二枝＝一八尺）、その他柱間は五枝で正面出入口両脇がそれぞれ二間であることから、梁間合計三二枝が割り付けられる【写真1】。背面および側面の柱間は四枝で、背面は八間で合計三二枝、側面一〇間で四〇枝が割り付けられている【写真2－1・2】。垂木は、実測値巾二・一四寸（六五㎜）×成（せい）[22]二・六四寸（八〇㎜）で、その巾は一枝（一・五尺）の七分の一割（一・五尺×一／七＝二・一四寸）であった。側柱は五・三五寸（約一六二㎜）角で、垂木巾で除するとその二・五本分（二・一四寸×二・五＝五・三五寸）、向拝柱は九・六三寸（約二九二㎜）角で垂木巾の四・五本分（二・一四寸×四・五＝九・六三寸）となる。なお、内部の丸柱は、九寸（直径約二七五㎜）で垂木巾の四・二本分となっている。柱頭につく舟肘木は、高所のためその寸法を実測できなかったが、目視によるとその巾（長さ）は側廻りのもの

写真 1　正面の向拝および出入口の柱間

写真 2-2　背面の柱間

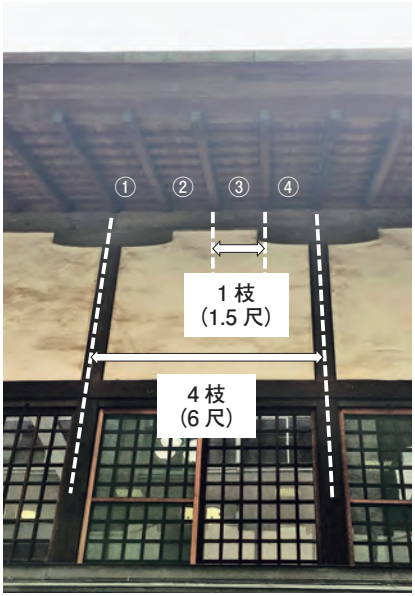


写真 2-1　側面の柱間

は二枝と垂木巾一本分、向拝のものは三枝と垂木巾一本分で、それぞれ垂木巾で除すると、その一五本分と二二本分となる。

以上より、外部廻りの主要部材の寸法は、垂木巾を基準にその比例関係によって部材寸法を決めていた可能性が高いと推定される。

(2) 工法および技法

①基壇

大講堂は、周辺地盤（校内通路）面より一段上げた基壇上に建つ。基壇は、現状の地盤面より八・五寸（二六〇㎜）程度上がり、基壇側面は割肌[23]の石張りで、基壇上面の犬走りはモルタル櫛引[24]き仕上げ（目地有）とする。正面向拝部分は切石を二段敷き並べた階段を設ける【写真3】。

基壇外周の現状地盤（校内通路）との境は大講堂の屋根軒先付近となり、砂利石を敷き詰めた雨落ちとしている【写真4】。

②基礎

外周および広間、廊下境の上屋部分の柱下は切石の独立基礎（礎石）を設置する。側柱下の礎石は一尺（三〇〇㎜）角程度、内部柱下の礎石は一・五尺（四五五㎜）角程度である。礎石下のコンクリート製の基礎の有無については現状、目視では確認できない。外周から布[25]基礎状にみえる柱下礎石間の切石は、厚さ五寸（一五〇㎜）、長さ二・五尺（七六〇㎜）の薄い切石を、意匠上、礎石外面に合わせて敷き並べたもので、構造上の布基礎として土台を受けているわけではない【写真5・6】。いずれの石も外周部の上面は面取りを施して水切れに配慮している。正面向拝柱下と濡れ縁の束下は、テーパー[27]のついた切石礎石とし、内部の円柱下は割肌の礎石を用いる。床組の束石[28]はコンクリート製のものへ更新されており、旧材は残っていない。

③軸組

軸組は土台、足固め[29]、柱、貫[30]、桁[31]、梁[32]にて構成する伝統軸組工法である。

ア　土台

土台は建物外周にのみ廻り、内部の柱は礎石へ石場建て[33]とする【写真7・8】。土台（広葉樹）は、一七五×一五〇㎜程度で、アンカーボルトによる緊結が確認される【写真9】。しかし、アンカーボルトと基礎との緊結方法は現状、目視では確認できない。また、カスガイ状のコの字型の鉄板金物を土台と柱に打ち込み、さらに釘留めしてその二材を緊結する。この金物は柱が土台から抜けることを防ぐものである【写真10】。

写真４　大講堂背面側

写真３　大講堂正面側

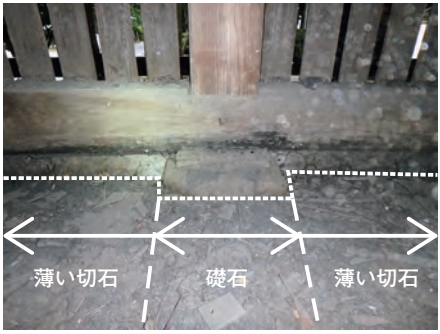


写真６　側柱下の礎石（内部）

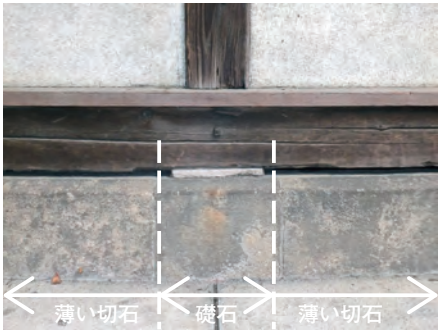


写真５　側柱下の礎石（外部）

写真８　内部柱（石場建て）

写真７　南側土台（板子格子付）

現代の木造建築の構造の考え方と同じく、基礎と土台の緊結、土台と柱の抜け防止に配慮していたことが窺えるが、これらの構造的配慮が建築時のものか、関東大震災（一九二三年）後のものか現時点において確定はできない。

イ　床組

床組は足固め、大引[34]、根太掛け[35]、根太[36]で構成される。

足固めは廊下と広間境の内部丸柱間に設置される。大引は、広間は桁行方向に三尺（九〇九㎜）間隔で、廊下内は中央の長手[37]方向に渡され、側柱、丸柱に桁行方向にとり付けられた根太掛けとともに根太を受ける【写真11】。広間、廊下ともに根太は一・五尺（四五五㎜）間隔で配される。大引、足固めは三尺（九〇九㎜）間隔で立つ床束[38]に支えられる【写真12】。床組は大きく改修されており、当初のものと思われる部材は、五寸（一五〇㎜）角の足固めと、三・三寸（一〇〇㎜）角の面皮付きの大引と直径三寸（九〇㎜）の丸太束[39]である。大引上に渡される一〇八×三〇㎜の根太とその上の合板荒床[40]（畳下の床板・厚さ一五㎜）は、全て後補材へ更新されたものである。また、当初の大引の間には、三・三寸（一〇〇㎜）角に製材された後補大引とそれを支える後補床束が補強のために設けられている【写真13】。

ウ　軸部

軸部は大きく広間の身舎空間[41]と廊下の廂空間[42]に分けられ、さらに南正面に向拝が付く。身舎空間を支える内部丸柱（入側柱、杉）は直径約九寸（二七二㎜）で、切石礎石（独立基礎）上に石場建てで立つ。柱頭については、梁間方向は陸梁[43]、桁行方向は敷桁を受ける[44]が、柱長さが足りないため、柱頭と桁の間に調整用飼木[45]を挟んで桁を受ける。陸梁は敷桁に掛かるため、下面で六寸（一八〇㎜）の高低差が生じる。そのため飼木は桁行、梁間でそれぞれ成九・六寸、三・六寸×巾六・六寸×長さ二尺（二九〇、一一〇×二〇〇×六〇〇㎜）と高さが異なるものが用いられている。飼木は敷桁と二本のボルトで固定される。なぜ、柱の長さが足りなかったのか現時点では不明であるが、柱の全長が一九尺（約五・七ｍ）もあることから、当時の規格材料長さや運搬上の制限による可能性も考えられる【写真14】。

廂空間の外部に立つ側柱（杉）は五・三五寸（約一六二㎜）角で、面取り巾は柱巾の約一六分の一（約一〇㎜）である。土台上に立ち、柱頭に舟肘木を据えて丸桁[46]を受ける。正面出入口の間口三間には差鴨居[47]が掛り、その上に中備[48]えとして舟肘木とそれを受ける束を二本備える。側柱と土台の仕口は目視で確認できないが、

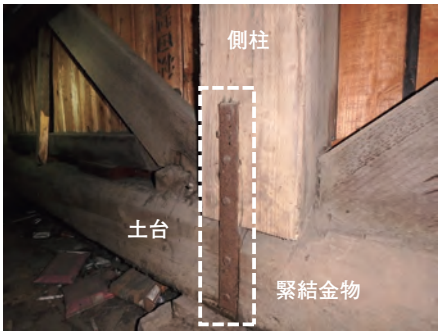


写真 10　側柱・土台緊結金物

写真 9　土台アンカーボルト

写真 12　廊下と広間境の足固め

写真 11　廊下床下

写真 14　身舎の軸部（中央丸柱柱頭部）

写真 13　広間床下

土台に込み栓[49]が打たれていることから、土台へは平枘差[50]し込み栓打ちと推定される。

向拝柱（杉）は九寸七分（二九三㎜）角で、面取り巾は側柱と同じく柱巾の約一六分の一（約一八㎜）である。向拝柱は切石礎石（独立基礎）上に石場建てで立ち、側柱同様柱頭に舟肘木を据えて丸桁を受ける。丸桁下には虹梁[51]が掛かり、その中央に中備えとして舟肘木とそれを受ける束を備える。側柱と向拝柱を繋ぐ虹梁はない。向拝の虹梁は一・三尺×五・六寸（三九四×一七〇㎜）の角材である。向拝柱の柱脚には銅板金物が巻かれ、その上部は鯖[52]の尾とする。

柱は背割り[53]が施される。丸柱（入側柱）、側柱ともに建具が建て込まれる面を背割りし、埋木[54]を施す。向拝柱および丸柱の正面出入口の二本は主出入口の反対面、その他は北面（講壇側）とし、埋木はない。いずれの柱も正面から背割りが見えないよう配慮していることが窺える。なお、側柱の窓下、および丸柱の開口部上の下がり壁には、四・五寸×〇・一五寸（一三五×四八㎜）の片筋[55]違い（杉）が確認される。

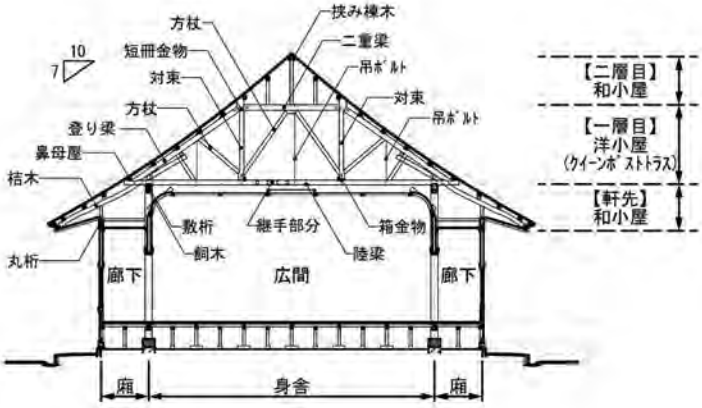
貫（杉）については、広間外周の丸柱に通る三・六寸×〇・五寸（一一〇×一五㎜）の飛貫[56]が、小屋裏[57]の敷桁下で確認できる。その他は壁内のため、現状、目視では確認できない。なお、古写真を見ると側柱の飛貫は、元々は化粧材として外部に見えていたことが分かる。

軸部の部材は修理された跡がなく、ほぼ全てが建築時のものと判断できる。

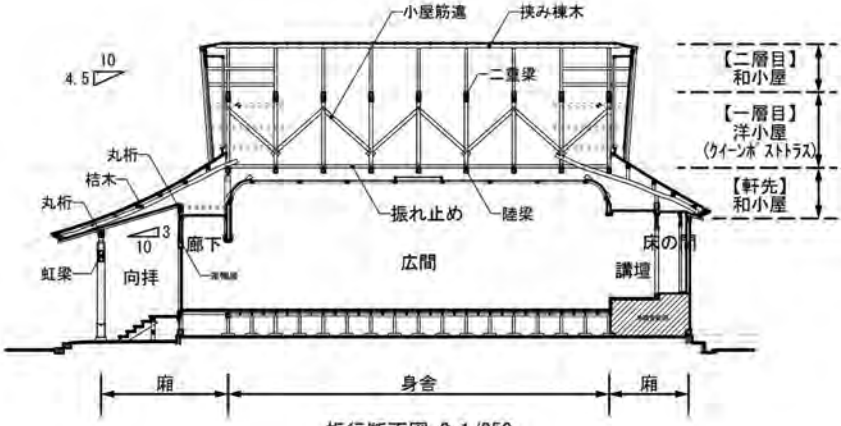
④小屋組[58]

小屋組の構成は、広間（身舎空間）に掛かる一層目（下層）と二層目（上層）、廊下（廂空間）に掛かる軒先といった三層へ大きく分けられる。一層目は広間上の桁行方向丸柱上の敷桁に掛かる陸梁、対束[59]、方杖[60]等で構成されるクイーンポストトラス[61]（対束トラス）状の洋小屋組[62]、二層目は洋小屋組の上にのる束、母屋[63]、挟み棟木で構成される棟廻りの和小屋組[64]、軒先は桔木[65]、束、母屋で構成される和小屋組である【図3・写真15】。

一層目は陸梁を梁間方向に渡し、その上に登り梁[66]、対束、方杖、二重梁[67]を組み、鼻母屋[68]、母屋を受ける。通常のトラスの場合は、鼻母屋、敷桁は陸梁を挟み込む形で上下に配されるが、大講堂は陸梁を敷桁より張り出し（キャンティレバー[69]）、鼻母屋を敷桁より外側へ二・五寸（七五七㎜）持ち出している。登り梁、二重梁と陸梁は直径〇・六六寸（二〇㎜）のボルトで吊り、登り梁と陸梁の仕口はボルトで緊結する【写真16・17】。また、対束と陸梁仕口は箱金物（コの字型に曲げ加工した鉄帯金



梁間断面図 S=1/250



桁行断面図 S=1/250

図３　大講堂断面図

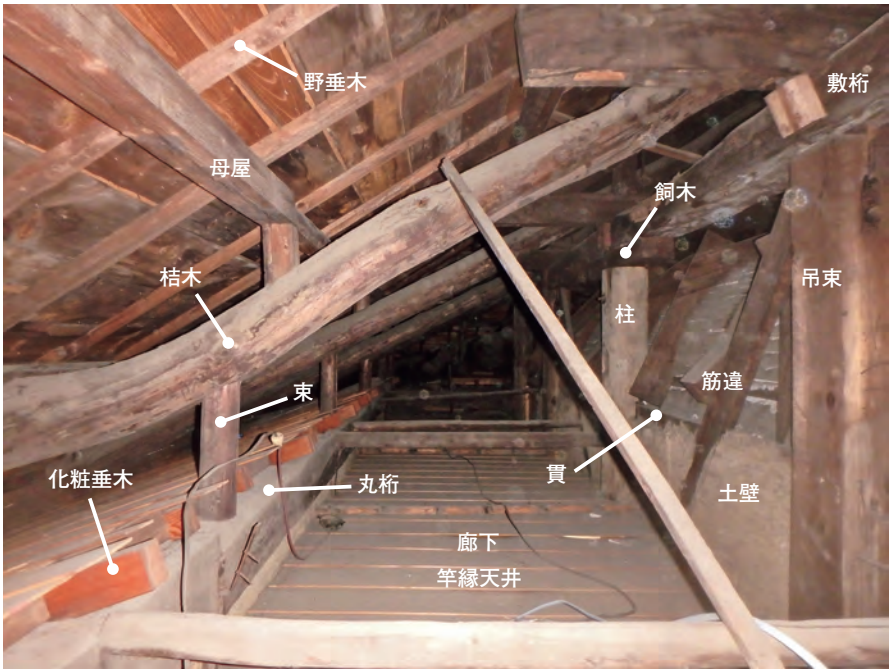


写真 15　廊下上部小屋裏

物）、登り梁と二重梁は対束を介して短冊金物（鉄帯金物）で繋ぐ【写真18】。陸梁は、中央付近に継手を設けており、継手部分は陸梁を両側から六寸×三寸（一八〇×九〇㎜）の板で挟み、直径〇・四寸（一二㎜）のボルト（上下各四カ所、計八本）で締める【写真19】。継手位置は通りごとに棟通りを境に交互に配する。桁行方向は、対束下部の陸梁仕口付近に設置した五寸×〇・一五寸（一〇五×四五㎜）の振れ止めと、各トラス[70]間の対束に斜めに渡す四・五寸×〇・一五寸（一三五×四五㎜）の小屋筋違いで繋ぐ。振れ止め、小屋筋違いは対束とボルトで締め、その挿入位置は各トラス間で対束の内側、外側と交互に配する【写真20】。なお、母屋には一般的なトラス構造同様、転び留め[71]が設けられる。

二層目は、クイーンポストトラス上の二重梁上に束を立て母屋を受けるが、棟木はトラス構造で用いられる挟み棟木とする【写真21】。

軒先は、側柱上の丸桁に束を立てて桔木を掛け、さらに桔木上に束立てして母屋を受ける。桔木先端は軒廻りの化粧垂木を化粧ボルトで吊る。茅負（かやおい）[72]と桔木の仕口は、現状では確認できない。桔木の他端（上端）は、一層目クイーンポストトラスの登り梁

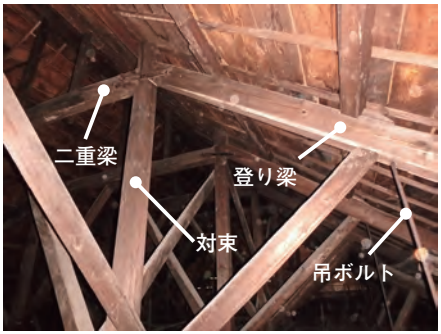


写真 17　登り梁

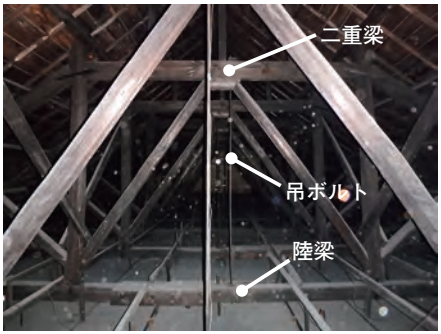


写真 16　一層目：トラス

写真 19　陸梁の継手部分

写真 18　対束と陸梁を繋ぐ箱金物

写真 21　二層目：和小屋組

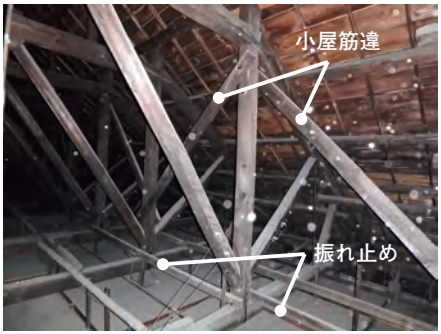


写真 20　小屋筋違・振れ止め

下に通した丸太で押さえる。つまり、丸桁上の束を支点、軒先先端を作用点、丸太で押さえた上端を力点とするテコの原理で軒先を吊り上げる。

洋小屋組は、一般的に間口三〇尺（九m）以上の場合に用いられた小屋組構造で、大講堂では内部に柱を立てない広間の大空間（間口六間＝三六尺＝一〇・九m）を確保するために用いたと考えられる。軒先と棟廻りを和小屋組とした理由は、日本建築の外観意匠の特徴である深い軒の出と屋根反りをもたせるためと推定される。また、鼻母屋を敷桁より外側へ持ち出した理由は、軒の深さおよび棟の高さを確保し、かつ和風外観意匠として必要な屋根勾配を確保するためと推定される。例えば、鼻母屋を敷桁と同位置にすると軒先の屋根勾配が緩くなり、かつ屋根反りが大きくなりすぎてしまうなどの問題が生じ、それを解消するためには軒の深さを浅くするか、棟の高さを下げる必要がある。

以上より、大講堂の小屋組は、必要に応じて適材適所で和洋の両技法を巧みに折衷させ、必要とされた機能（空間）、意匠を具現化させたことが分かる。なお、小屋組材は改変の手が加えられておらず、ほぼ全ての部材は建築時のものと推定される。

⑤屋根

軒廻りを化粧軒[73]納まりとする入母屋造り、流れ[74]向拝付き銅板葺き屋根とし、反りと軒反りが付く。

ア　軒廻り

軒廻りは、三寸勾配の木小舞付き[75]化粧垂木[76]天井とする。側柱上の舟肘木に丸桁が渡り、その上に一軒の化粧垂木が掛かる。丸桁および舟肘木の出隅[77]は井桁[78]に組む。化粧垂木は〇・二七寸×〇・二二寸（八〇×六五㎜）、一枝（垂木設置間隔）一・五尺（四五五㎜）で垂木巾七割（四五五／六五㎜）の疎ら割[79]とする。化粧垂木は小屋裏の桔木から化粧ボルトで吊られ、小口銅板を巻く。

軒先は茅負の上に二重裏甲[80]とする。木小舞は〇・八寸×〇・九寸（二四×二七㎜）で、六・五寸（一九七㎜）間隔で割り付ける。化粧野地板[81]は流れ方向[82]に張り、見え掛り巾[83]は約八寸（二四〇㎜）である。隅木[84]は小口銅板巻きとする。なお、本調査では高所のため、隅木部材寸法、軒反り（一軒の割り出し）寸法は確認できなかった。

イ　屋根

屋根は、引渡し[85]七寸勾配の入母屋造り反り屋根とし、向拝の流れ屋根は引渡し四・五寸勾配とする。大屋根[86]と流れ屋根の取り合う箇所は縋る[87]破風で見切る。

野垂木[88]（杉）は〇・九寸×〇・一五寸（二七×四五㎜）

で、約一・五尺（四五五㎜）間隔で配する。野地板は現状二重に張られており、下層は厚さ〇・四寸（一二㎜）×巾七・六寸（二三〇㎜）の杉板を横張りとし、その上に新たな野地板を張る。上層野地板の仕様は目視では確認できない。現状の銅板葺きは、一九八一～一九八二（昭和五六～五七）年頃に葺き替えられたことが分かっており（四・1・(3)参照）、上層の新しい野地板はその際に葺かれたものと推定される。

入母屋妻壁は狐格子[89]とする。懸魚[90]、破風[91]、前包[92]は、現状では銅板巻きとしているが、これは屋根葺き替え時に巻かれたものと推定される（四・1・(3)参照）。

⑥仕上げ

ア　外部

外壁は腰上を白漆喰仕上げ、腰下をモルタル仕上げとする。正面腰下の濡れ縁上は額縁付き竪板張りとし、濡れ縁下は板子格子[93]とする。土台上には木製水切り[94]を廻すが、正面濡れ縁下には廻さない。腰上の漆喰壁には、古写真より飛貫表しとしていたことが分かっている。柱と壁のチリ[95]がほとんどなく、壁チリ際より現在の漆喰仕上げの下に新建材のボード下地が見えることから、土壁の上に後補で施工したと推定される。腰下は古写真より正面同様の額縁付き竪板張りであったことが分かっており、モルタル仕上げは後補のものである【写真22・23】。

正面の額縁付き竪板と濡れ縁下の板子格子の一部は、周囲の柱、長押等[96]の部材とその経年劣化状況が異なることから、以前の形式を踏襲して後補材で補修したと推定される。

イ　床

広間は緑色縁付きの畳敷きで、講壇を含め一〇八畳敷きである。講壇は高麗紋縁付きの六畳敷きで、広間より床を一・四六尺（四四五㎜）上げる。さらにその奥は、床を五・七寸（一七三㎜）上げて、奥行き四尺（一二一二㎜）、巾二間（三六三六㎜）の薄縁床[97]の床の間を設える。講壇は下部に地覆[98]を廻して畳と見切り、束立てして三方框[99]を廻して一段上げる。その小壁は竪板張りで、床框は黒漆塗りである【写真24】。

廊下は緑色縁付きの畳敷きとし、出隅と北東物置前は寄木フローリング張りとする。その仕上げ境は木製見切り材を入れる。

広間と廊下は段差がなく、丸柱（入側柱）の通りに無目敷居[100]を入れて見切る。広間側は畳が敷き込めるよう無目敷居を丸柱面に合わせるが、廊下側は丸柱面より無目敷居が内側（面内）に入るため、畳を丸柱に合わせて円形に欠き込む。廊下側のこのような納まりより、元々の

写真 23　　現況　東面外壁

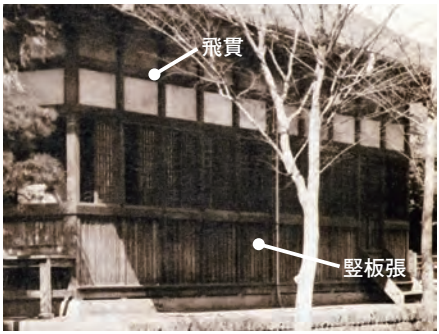


写真 22　1928 年頃　東面外壁
（『第 2 回中学校卒業アルバム』1929 年 3 月）

写真 25　現況　下り壁

写真 24　1942 年頃　大講堂内部（畳の縁がない）
（『第 16 回中学校卒業アルバム』1943 年 3 月）

仕上げは畳敷きではなく板敷きであった可能性が高い。また、正面出入口および北東の常用出入口の敷居は、廊下より畳の厚さ（約五五㎜）だけ下がっており、それぞれの引き込み戸、引き違い戸の開閉時に畳と擦れないよう木製見切り材を入れて調整している。

北東物置は、縁甲板張り[101]（松）で、廊下床高さとほぼ同じ高さで床を張る。床には東寄り二尺の位置で木製見切り材を入れて見切る。部材の経年劣化状況をみると、その東側二尺巾に張られる縁甲板は後補のもので、西四尺の縁甲板、および見切り材は古いものであるが、建築時のものか不明である。北西物置は後補合板張りで、廊下床高さより畳厚さ分（約五五㎜）下がる。

ウ　壁

広間は白漆喰仕上げ、廊下および物置は窓腰下を竪板張り、腰上および内法[102]上を白漆喰仕上げとする。内法上の白漆喰仕上げには天井廻り縁下[103]と柱際の三方に額縁が廻り、額縁には松煙[104]を塗る【写真25】。腰下

の竪板は杉板、巾木[105]および笠木[106]は松である。なお、白漆喰仕上げ下地は、小屋裏から確認したところ小舞[107]下地の土壁である。

北東物置は腰下を竪板張り、腰上を白漆喰仕上げとする。東西面の白漆喰壁には広間と廊下同様、松煙塗りの額縁が廻るが北面にはない。東面（窓側）と西面の広間開口側との内法の高さが異なるが、腰笠木上から内法（鴨居）下面は四方額縁で、長押上は広間と廊下同様、長押上の横額縁がない三方額縁である。なお、経年劣化状況から腰竪板張りの笠木、竪板、巾木、漆喰壁額縁は古いものと推定される。

北西物置は、東西面は腰下を竪板張り、腰上を後補合板張とするが、北面は腰竪板張りがなく、全面後補合板張とする。北東物置同様、廊下窓側と広間側の内法の高さが異なり、北面にも鴨居、長押が付くがさらに低い高さにある。後補合板壁には、東面は内法下に上横額縁のない三方額縁、西面は鴨居下横額縁と天井廻り縁下横額縁が残る。経年劣化状況から、竪板張り、額縁は古いものと推定される。

エ　天井

広間は一重折上げ格天井で、講壇側の一間は化粧目透し[108]板張り天井とし、いずれも二重廻り縁[109]とする。格天井平部の格間[110]は梁間五間、桁行七間とし、中央の間はさらに一段上げて側面を換気用の格子とする。格天井板は後補合板張りの白色塗装であるが、折上げの支輪（亀の尾）と格縁[113]の大きさと面取りが異なり、格縁は改修したものと推定される（四・3・(1)参照）。格天井板ならびに格縁以外は建築時のものと推定される。講壇上の化粧目透し板張りは桧柾目[114]の突板[115]（化粧合板）で、こちらも後補の改修によるものである。講壇奥の床の間天井は講壇と同じである。

廊下は二重廻り縁、竿縁天井で、竿縁二本を長手方向に渡し、廊下隅は隅竿[116]を入れて矩折れに廻す。廻り縁、竿縁ともに杉材である。天井板は杉板を羽重ね[117]で張る。経年劣化状況から天井板は後補のもので、その他は建築時のものと推定される。

北東物置は二重廻り縁、後補合板張りである。廊下境の天袋[118]の無目鴨居[119]（二重廻り縁兼用）は経年劣化状況から後補のものと推定され、廊下の二重廻り縁に突き付け[120]で取り付けている。廊下の二重廻り縁は天袋内部まで伸びており、もともと物置奥の壁まで廊下と一連の竿縁天井であったことが分かる。

北西物置は、内法下は根太天井[121]、天袋上は二重廻り縁

竿縁天井である。根太天井は外壁側の長押を利用して、他面は後補根太掛けを設けて、根太、合板を張る。この根太天井の部材は廊下境の中敷居、長押を含め、全て後補のものである。竿縁天井は廊下境に二重廻り縁はなく、天袋の無目鴨居を当り欠きをして廊下の竿縁が伸びていることから、もともと物置奥の壁までが廊下と一連のものであったことが分かる。この範囲の竿縁天井は、天井板も含め建築時のものと推定される。

⑦柱間装置

ア　建具（全て木製）

正面出入口の引き分け格子ガラス付き框戸[122]は、四枚建てで外側両脇の二枚が嵌め殺し[123]、内側中央の二枚を引き分けて開口する。差鴨居[124]は、外側両脇は嵌め殺し用に建具巾だけ溝を彫り、内側の一溝は両端まで通っていることから、もともとこの開閉形式であったことが分かる【写真26】。なお、本建具は戸車付きで、敷居一溝に建具滑り用の帯鉄[125]が設置される。

廊下の北東隅にある常用出入口は、引き違い腰付き格子[126]ガラス戸で、このガラス戸は廊下の

写真 26　現況　正面出入り口の框戸

写真 27　現況　廊下のガラス窓

写真 28　現況　北東物置の戸

引き違い格子ガラス窓と意匠、高さを合わせて腰を設ける。廊下の引き違い格子ガラス窓は二本溝で、網戸を片側外部にケンドン形式[127]で建て込むため、内側のみが片引きで開く。網戸はサラン網[128]で後補に設置したものである【写真27】。

物置の両開き木連（きづ）れ格子戸[129]は、内法下と天袋に建て込むが、経年劣化状況から全て後補の改修によるものと推定される【写真28】。

イ　敷居・鴨居

建具廻りの敷居・鴨居のほか、広間廊下境に無目敷居と無目鴨居（松）、講壇上の下がり壁に無目鴨居、床の間に床框（とこがまち）[130]と落し掛け[131]が設置される。北東物置の天袋の無目鴨居（天井二重廻り縁兼用）、北西物置の廊下境の無目敷居、中鴨居（なかがもい）[132]、天袋の鴨居は部材劣化状況から明らかに後補のものである。その他の部材は古いものであると推定される。なお、広間廊下境の無目敷居は丸柱型に当たり欠きをして、突き付けで洋釘留めする。無目鴨居に未使用の釘穴跡が確認されることから、一度取り外して再度付け直したことが分かる。

ウ　長押

外部は、濡れ縁の付く南正面は地長押（じなげし）[133]、腰長押（こしなげし）[134]、内法長押（うちのり）が付く。東面および西面は腰長押、内法長押、北面は内法長押が付くが、講壇奥にある床の間の張り出しには廻らない。松材で、継ぎ手は柱芯で目違い継ぎ[136]とするが、北面北西寄り（物置裏）のものは明らかに新しい部材で、さらに斜め継ぎとしている。

内部は、広間は内法長押が廻り、講壇、床の間で枕（まくら）捌（さば）き[137]留めとする。廊下は広間と廊下で内法高さが異なるため、段違いで内法長押が廻る。正面出入口はその両脇の柱の面内で長押が留まり、雛留め[138]ではなく切り放しのままとする。外部同様、松材で、継ぎ手は柱芯で目違い継ぎとする。

内外部ともに釘隠し[139]はない。

⑧木階・濡れ縁

南正面の向拝を潜った先に木階（もくかい）、濡れ縁が付く。木階は四段で、ささら桁[140]に段板をのせ、蹴込（けこ）み板[141]が付く。段板はささら桁へ釘留めの上、化粧丸埋木で釘を隠す。部材は全て松材を用いているが、周囲部材との経年劣化状況と比較すると後補補修のものと推定される。

濡れ縁は、正面間口全体に付く。切石礎石に石場立てで束を立て、各束に上楔（うえんさび）打ちの繋ぎ貫を通し、束上部には縁葛（えんかずら）[142]、側柱側は板掛けを渡して切目縁板を受ける。縁板は縁葛、板掛けへ上面から洋釘打ちで留める。束、貫は杉、縁葛、切目縁板は松材を用いる。西端の縁

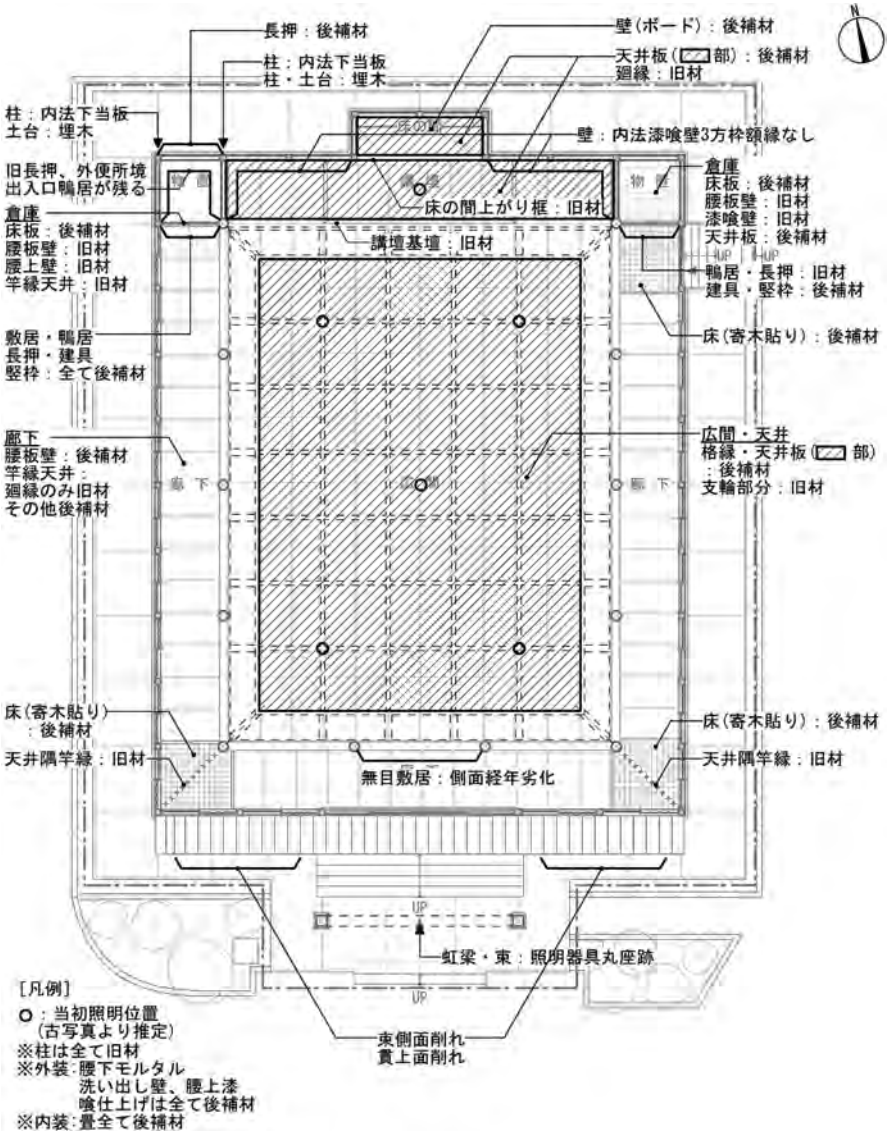


図４　大講堂の改修・改変の痕跡

葛、繋ぎ貫は、経年劣化状況より後補補修材で更新されていることが分かる。また、繋ぎ貫は下楔打ちとする。この箇所の上の地長押も後補補修材で取り換えられ、西端隅の柱は濡れ縁下で矧木(はぎき)[143]、さらにその下の土台は六〇〇㎜程度の長さで継ぎ補修している。その劣化原因は不明であるが、この範囲の破損が著しかったことが窺える。その他の濡れ縁部材は、部材の経年劣化状況より建築時のものと思われる。

四　改修・改変の痕跡

1　屋根

(1)　天然スレート葺き屋根

「国士舘講堂設計図」(『大民』第四巻第五号、青年大民団、一九一九年五月)の立面図【図5】に描かれる屋根は、下り棟[144]、隅棟(すみむね)[145]と縦線が描かれており、これは瓦葺き屋根を表現したものと解釈できる。しかし、「財団法人国士舘設立許可申請書」(一九一九年一〇月六日申請)、「登記簿謄本」(一九四七年一月三日受付)には「木造スレート葺平屋　講堂壱棟　建坪九拾七勺坪」とあり、大講堂はスレート葺き[146]であるとの記載がある。野地板が葺かれた状態で行われた大講堂の上棟

図5　「国士舘講堂設計図」(『大民』第4巻第5号〈青年大民団、1919年5月〉)

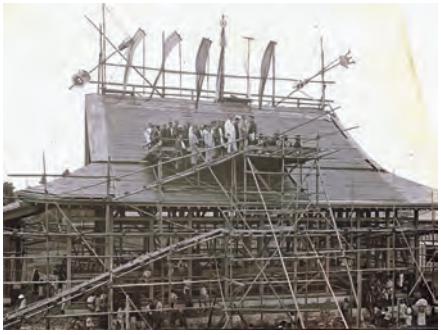


写真30　同右　(側面)

写真29　1919年7月27日　大講堂上棟式(正面)

式（一九一九年七月二七日）の写真【写真29・30】を見ると、入母屋妻面（つまめん）狐格子下の前包と野地板の隙間は薄く瓦を差し込む余地はないため、この時点ですでに瓦葺きではなくスレート葺きを想定していたことが分かる。一九一九（大正八）年一一月九日の落成式および開舘式の写真【写真31】には、竣工後の大講堂、本部棟、道場が写る。本部棟および道場の屋根は縦横線が写り瓦葺きと推定されるが、大講堂は下り棟、隅棟がなく、軒先がシャープで、かつ屋根面が平滑なため明らかに瓦葺きではない。スレート葺きであったことは、今回の調査で大講堂の小屋裏へ入った際、小屋梁上に天然スレートおよび防水紙の破片が数点落ちていたことからも窺い知ることができる【写真32】。

以上より、大講堂は設計時、瓦葺き屋根で計画されたが、工事に当たって計画変更され、天然スレート葺き屋根で竣工したと推定される。

(2) 金属板葺き屋根

一九五七（昭和三二）年の写真【写真33】には、まだ天然スレート葺き屋根の大講堂が写る。

一九五九年に撮影された世田谷校地全景の航空写真【写真34】には、白色の屋根が写る。天然素材の場合、日光が直射した場合でも屋根の全面が輝く白色で写らないことから、金属板葺き屋根と推定される。

(3) 銅板葺き屋根

一九八一（昭和五六）年頃の写真には銀色の金属板葺き屋根が写るが、一九八二年頃の写真には銅色に輝く銅板葺き屋根が写る【写真35・36】。二つの写真は、大講堂前の桜が開花し、梅の木に新緑の葉が芽吹いていることから春先に撮影されたものと推定される。また、一九八一年一二月二四日撮影の写真には大講堂の周りに工事用の足場が設置されており、この時点において銅板への葺き替え工事が竣工間近であったことが分かる【写真37・38】。また、工事内容についての詳細な記載はないが、大学で保管する一九八一年度の出納帳の三月三一日付の箇所に「大講堂屋根ふき替え修繕」との記載がある。

以上から、現在の銅板葺き屋根への改修工事は、一九八一～一九八二年にかけて実施されたことが分かる。なお、大講堂が写るその他写真を比較すると、屋根廻りの工事に関連して下記の改修、修理工事が実施されたと推定できる。

・破風、懸魚は、以前は木地表しであったが、銅板が新たに巻かれた。

・垂木、隅木、縋る破風の木口（こくち）[147]に銅板が巻かれた。

写真 31　1919 年 11 月 9 日　国士舘落成式・開舘式（左：大講堂、奥：道場、右：本部棟）

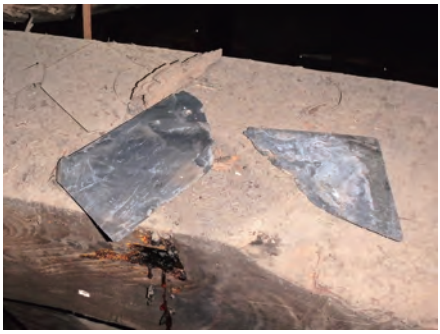


写真 32　小屋裏で見つけた天然スレート破片

写真 34　1959 年　世田谷校地全景写真（拡大）

写真 33　1957 年 3 月　短期大学第 3 期卒業式

写真 36　1982 年頃　銅板葺き屋根
（『体育学部第 24 回卒業アルバム』1983 年 3 月）

写真 35　1981 年頃　銀色の金属板葺き屋根
（『体育学部第 23 回卒業アルバム』1982 年 3 月）

写真 38　1982 年 1 月 27 日撮影（工事用足場がない）

写真 37　1981 年 12 月 24 日撮影

※垂木には以前、木口銅板はなく、樋を受ける鶴首金物（つるくびかなもの）[148]が木口差しであった。現状の樋受け金物は茅負に設置している。

・樋は銅製の新補材へ取り替えられた。

・向拝柱の柱脚に、銅板金物が新たに巻かれた。

2　外装

建築されて間もない頃【写真39・40】の外装は、前述の「国士舘講堂設計図」にも描かれている通り、腰下は竪板張り、腰上は飛貫を表した漆喰仕上げである。

一九七七（昭和五二）年の写真【写真41・42】では、まだ内法上の飛貫を表した漆喰仕上げと腰下の竪板張りを見ることができる。一九八二年の銅板屋根改修工事竣工後には、内法上の飛貫はなくなり、全面白漆喰仕上げへ改変される【写真43・44】。なお、その壁下地は土壁の上へボード下地を張り、仕上げている。また、正面（南面）窓下の腰竪板張りは、以前の意匠を踏襲して新材へ取り替え

写真 40　1939 年頃　大講堂（西側）
（『第 8 回専門学校卒業アルバム』1940 年 3 月）

写真 39　1928 年頃　大講堂（南東側）
（『第 2 回中学校卒業アルバム』1929 年 3 月）

写真 42　1977 年 4 月 11 日　大講堂（東側）

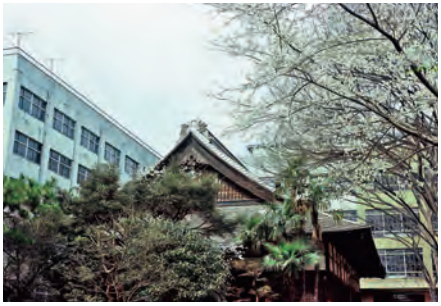


写真 41　1977 年 3 月 29 日　大講堂（南東側）

写真 44　1982 年 4 月 1 日　大講堂（西側）

写真 43　1982 年 4 月 1 日　大講堂（東南側）

ているが、その他の面はモルタル塗りに改変される。東面腰貫[149]、および入母屋妻面の狐格子と軒先の茅負、裏甲[150]、縋る破風は、周辺部材との経年劣化状況が異なり、改修後、木地色になっていることから、新補材へ取り替えたか、旧材に洗いをかけた可能性が高いと推定される。その他、正面濡れ縁の繋ぎ貫が新材へ取り替えられている。

3　天井

(1)　折上げ格天井

広間の折上げ格天井の支輪と格縁について、仕様（規格、面取り等）と部材の経年劣化状況が異なることから、天井は改修されたと推定される。また、折上げ支輪の天井漆喰は木摺り下地で、格天井は合板ボード下地の上に白塗装仕上げとしていることから、支輪は旧材、格縁は後補材と推定される。

一九六〇（昭和三五）年頃の古写真【写真45】をみると、平部格天井の不陸[151]が激しい。翌一九六一年頃の写真【写真46】をみると、不陸が是正され、格縁が一回り細くなっていることが分かる。以上より、広間格天井は一九六〇～一九六一年頃の間に改変したと推定される。

(2)　化粧合板目透かし天井

広間講壇上、および床の間の化粧合板目透かし天井は、現況、桧の突板を用いており、後補改変と判断される。その時期は不明である。なお、二重廻り縁は、部材の経年劣化状況より建築時のものと推定される。

(3)　竿縁天井

廊下竿縁天井は、部材の経年劣化状況より、二重廻り縁と竿縁は建築時のもので、天井板は後補改修と推定される。

現状、北東、北西の物置には天袋が付き、廊下と間仕切っているが、東西物置ともに廊下の二重廻り縁が物置内部まで伸びていることから、建築時は廊下と一連の竿縁天井であったことが分かる【写真47・48】。なお、建築当時と推定される部材は、北東物置は二重廻り縁のみで、北西物置は二重廻り縁、竿縁、天井板全てである。

広間の講壇側を臨む一九四二（昭和一七）年頃の古写真をみると、その両脇廊下の先が写っている【写真49・50・51】。北東物置は、内法下に建具を建て込むが上の天袋部分に建具はなく解放されており、奥北東隅の柱が見える。改修年代は不明であるが、一九六三年五月の古写真【写真52】にも同様のものが確認される。北西物置は現状位置に建具はなく、側柱側の長押とともに、さら

写真 46　1961 年頃　大講堂天井
（『体育学部第３期卒業アルバム』1962 年３月）

写真 45　1960 年頃　大講堂天井
（『体育学部第２期卒業アルバム』1961 年３月）

写真 48　現状　北東物置の天井

写真 47　現状　北西物置の天井

写真 50　1942 年頃　北東物置側（写真 49 拡大）

写真 49　1942 年頃　大講堂内部
（『第 16 回中学校卒業アルバム』1943 年３月）

写真 51　1942 年頃　北西物置側（写真 49 拡大）

写真 52　1963 年 5 月 27 日　北東物置

に奥一間の位置の一段低い高さで、鴨居、建具が建て込まれる。これは現存しない外便所入口と推定され、建築当時は廊下がそこまで伸びていたことが分かる。改修時期は不明であるが、外便所の解体以降の可能性が高い。後述するが、外便所の解体時期は一九六四～一九六六年頃と推定される。

4　床

(1)　広間・廊下

広間と廊下は、現在、常時同一の畳を敷いているが、古写真を見ると、講演場、武道場、茶道場など、その用途に合わせて縁付き、縁なし畳を使い分けていたことが分かる。

現状の畳を剥がすと、入側丸柱、および無目敷居の広間側の畳と接する部材面は経年劣化が進行していないため、建築当時より畳敷きであったと推定される【写真53】。同部材の廊下側を見ると、経年劣化状況が畳に接する面と畳上の丸柱表面と同じである【写真54】。廊下の巾木（現状は畳寄）も同様の経年劣化の状況であることから、廊下側は畳下まで露出していたと推定される【写真55】。なお、外部出入口の敷居は、現状、廊下畳床から畳の厚さ分低い位置に付いている。

一九二八（昭和三）年頃、一九三六年頃の古写真【写真56・57】より、廊下に縁甲板が張られていることが分かる。足元をよく見ると縁甲板の出隅は角張り（隅を斜めに留める）とし、広間境の無目敷居は縁甲板より畳厚さ分、一段上がる。廊下の巾木は現状と同様の高さである。一九六七年頃の古写真【写真58】を見ると、廊下に見切り材が付いているが、床の縁甲板張りは残っている。現状の床への改修時期は、一九六八年以降と推定される。

(2)　北東物置

床は縁甲板張りで、廊下畳と同じ高さである。経年劣

写真 54　現状　広間境廊下側の無目敷居

写真 53　現状　無目敷居（広間側）

写真 56　1928 年頃　廊下（南正面出入口付近）
（『第 2 回中学校卒業アルバム』1929 年 3 月）

写真 55　現状　廊下巾木

写真 58　1967 年頃　廊下（南正面出入口付近）
（『体育学部第 9 回卒業アルバム』1968 年 3 月）

写真 57　1936 年頃　廊下（南正面出入口付近）
（『第 5 回専門学校卒業アルバム』1937 年 3 月）

化状況を勘案すると、床板は比較的古いものである。内部の三方に廻る腰竪板張りは経年劣化状況から建築時のものと推定されるが、床からの巾木の出が少ない【写真59】。建築当時は廊下の縁甲板張り床と同じ高さで床板が張られていた可能性もある。現状の縁甲板張りが建築時のものであるかどうかは定かでない。

(3) 北西物置

床は後補合板張で、床の高さは廊下畳床より畳厚さ分低い。内部両脇の腰竪板張り壁は経年劣化状況から建築時のものと推定され、床からの巾木の出も古写真と同様であることから、床の高さは建築当時から変わっていないと推定される【写真60】。この箇所は現存しない外便所へ繋がる廊下であり、建築時は廊下の縁甲板床張りが伸びていたと推定される。

5 内壁

(1) 広間

広間の内壁は大きく改修している痕跡等はないが、壁際に周る松煙塗りの額縁が講壇脇の内法の壁下等で現存しない。一九四二（昭和一七）年頃の古写真【写真61】を見るとその範囲および講壇段際に周る額縁が確認される。その額縁が写る古写真は一九六三年頃のもの【写真62】が最後であり、その後は写真が不鮮明であることから確認できない。改修時期の確定はできないが、一九六四年以降と推定される。

講壇奥の床の間は、現状折れ戸形式のパネル壁が建て込まれ、その奥は後補クロス貼り壁となっている。奥の壁の手前にパネル壁を設置しており、明らかに後補のものであるが、改修時期は不明である【写真63・64】。

(2) 廊下・物置

廊下と物置は、腰下は竪板張り、腰上は白漆喰仕上げの上、壁際に松煙塗りの額縁を廻す。漆喰壁および額縁は建築当時のものが残っている。腰壁は、部材の経年劣化状況から物置内部の一式は建築当時のもの、また廊下の板壁は後補材と推定される。北西の物置の腰壁は廊下から延びているものであり、ここに建具枠が後付けされている。このため北西の物置は、建築当時は廊下であったと推定される。

6 建具（柱間装置）

(1) 外部建具

外部建具は、一九八一（昭和五六）～一九八二年にかけての銅板屋根への改修の際、正面の主出入口、北東の常用出入口のものが建築当時の建具意匠を踏襲して新規

写真 60　現状　北西物置

写真 59　現状　北東物置

写真 62　1963 年頃　講壇脇の額縁あり
（『体育学部第５回卒業アルバム』1964 年３月）

写真 61　1942 年頃　講壇脇の額縁あり
（『第 16 回中学校卒業アルバム』1943 年３月）

写真 64　現状　床の間（パネル壁あり）

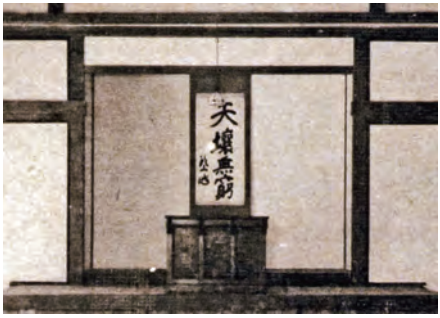


写真 63　1942 年頃　床の間（パネル壁なし）
（写真 61 に同じ）

製作され、取り替えられたことが古写真より分かる（写真43、参照）。

窓は、古写真、部材の経年劣化状況から建築当時のものと推定される。現在、窓に付いている網戸は、部材経年劣化の状況から明らかに後補材と分かる。建築当初から網戸が設置されていたかは不明である。

柱間装置（敷居、鴨居等）は、部材の経年劣化状況から建築当時のものと推定される。

(2) 物置建具

物置建具は部材の経年劣化状況から明らかに後補材である。一九四二（昭和一七）年頃、一九六一年、一九六三年の古写真【写真50・52・65】に、北東物置に折れ戸形式の板戸が写る。内法下の柱間装置（無目鴨居、敷居）は、部材の経年劣化状況から建築当時のものと推定されるが、入側丸柱東面に埋木が施されることから、以前はここに建具枠が取り付いていた可能性がある。また、無目敷居、鴨居に痕跡がないことから、三連折れ板戸の可能性も考えられる。なお、天袋の柱間装置は全て後補のものである。

北西物置は、建築当初は外便所へ繋がる廊下であった。このため物置開口部の設えは全て後補改修であり、建築当時はその箇所に柱間装置はない。その北奥壁については、他の内法より低い位置に鴨居、長押が残っている。一九四二年頃の古写真【写真51】に板戸もしくは板壁が写っており、その開閉形式は不明であるが、外便所の出入口と推定される。

写真65　1961年　折れ戸が設えられた北東物置

7 外便所

(1) 資料調査

「国士舘講堂設計図」（一九一九年）の平面図【図6】では、西側廊下の北端に繋ぎ廊下（奥行き一間）が付き、さらにその先に外便所（図面からの概略寸法で一・

五×二・五間程度）が描かれている。一九二五年頃の「国士舘全図」[152]【図7】にも設計図と同様の位置に突き出した建物が見られる。しかし、繋ぎ廊下から先の建物が設計図では大講堂側に矩折れており、「国士舘全図」では大講堂と反対側に突き出る形で矩折れるという違いが見られる。

一九三二年頃撮影の外便所の古写真【写真66】を見ると、「国士舘全図」と同様、大講堂と反対側に突き出ている。写真より寸法を推測すると、繋ぎ廊下の長さは一・五間、外便所梁間一・二五間程度で桁行は不明である。外壁は繋ぎ廊下、外便所ともに全面下見板（したみいた）[153]張りである。屋根は反射しているため分かりにくいが、勾配は緩く、軒先が薄いことから天然スレート葺き、あるいは金属葺きの屋根の可能性が高い。外便所は寄棟造（よせむね）[154]りで、繋ぎ廊下の屋根は外便所の屋根より一段低くした切妻造り[155]と推定される。また便所西面上部には換気口を開け、その下に板庇（いたびさし）の出窓を張り出す。出窓には竪格子が付き、さらに床付近には竪格子付きの地窓（じまど）[156]を設ける。繋ぎ廊下には、三本引違いガラス窓の出窓が付く。一九三二年頃の古写真【写真66】をよく見ると繋ぎ廊下の床下は壁がなく、開放しているように見える。また内部は、一九四二年頃の古写真【写真51】を見ると、西廊

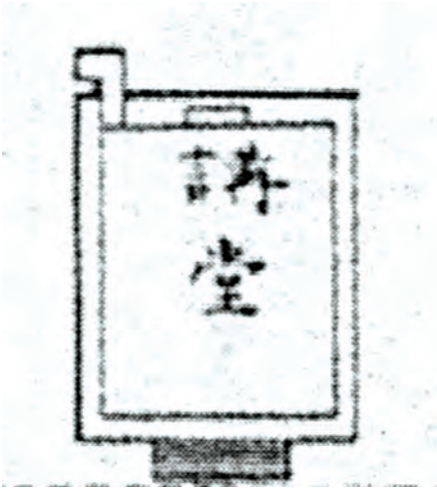


図7　1925年頃　「国士舘全図」に描かれた大講堂

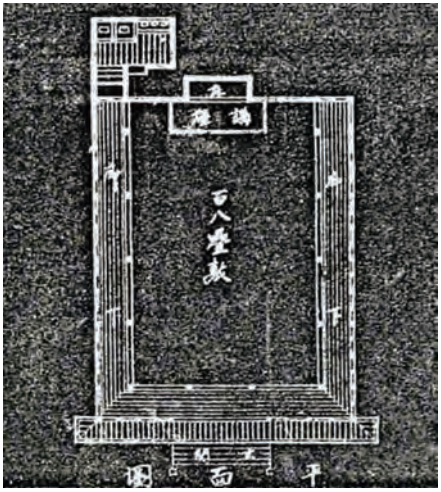


図6　1919年　「国士舘講堂設計図」平面図（『大民』第4巻第5号〈青年大民団、1919年5月〉）

写真 67　1962 年 9 月 26 日　外便所（左側）

写真 66　1932 年頃　外便所（中央奥）

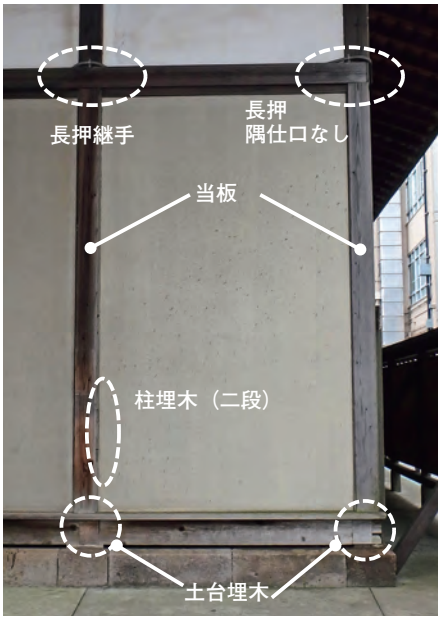


写真 69　現状　北西側物置（外部）

写真 68　現状　北西側物置（内部）

下突き当りに木製建具（板戸）か板壁が写り、外便所の出入口境の間仕切りと推定される。

「財団法人国士舘設立許可申請書」（一九一九年一〇月六日、東京都立公文書館所蔵）、「登記簿謄本」（一九四七年一月三日受付）に「木造スレート葺平屋　講堂壱棟　建坪九拾七勺坪」との記載がある。現存する大講堂の面積は八六・三一坪（本調査実測面積、向拝含む）、「国士舘講堂設計図」に描かれた外便所の推定面積は

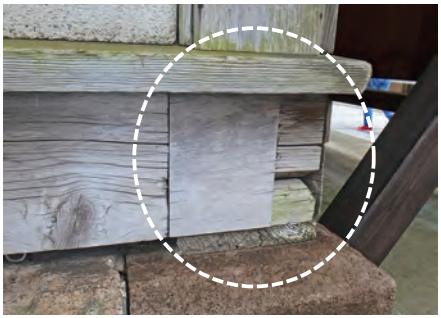


写真 71　現状　土台埋木（隅）

写真 70　現状　土台埋木

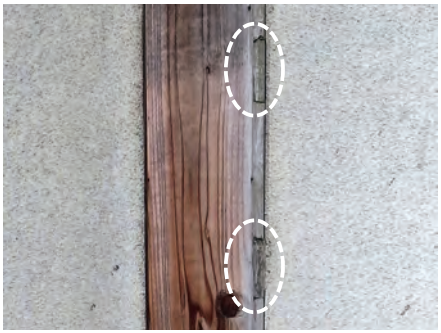


写真 73　現状　柱埋木

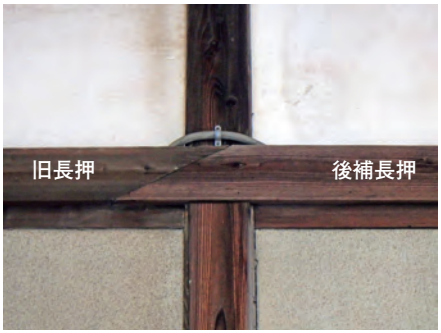


写真 72　現状　長押継手

四・七五坪であり、総面積は九一・〇六坪程度となることから、申請書や謄本に記載された面積とほぼ一致する。

(2) 痕跡調査

北西物置の北奥の突き当り壁は腰下竪板壁がなく、経年劣化状況より古い時代のものと推定される鴨居、長押が残ることから、出入口があったことが分かる【写真68】。その外部をみると、多数の痕跡が確認できる。土台は柱が建つ通りに埋木されていることから、北側へ伸びていたと推定される。その土台上の柱は、内法下全面に当板（あていた）が打ち付けられる。当板は、通常、部材の痕跡を隠すために打たれることから、北へ延びていた壁の痕跡を隠すためのものと推定される。上部を見ると、この範囲の長押が継がれており、その継手（つぎて）、仕口は他と異なっている。他の長押の継目は縦であるが、この箇所は斜めであり、また、他の出隅は留めとするが、ここは木口を切り放して仕口がないことから、明らかに後補のものと判断できる。推測の域を出ないが、長押の斜めの継ぎ目は、かつての繋ぎ廊下屋根の勾配跡の可能性も考えられ

る。さらに、柱下部には埋木が二段あり、これは床板、階段の跡と推定される【写真69・70・71・72・73】。

五　復原考察

大講堂は、内・外装仕上げの改修が数度行われ、北西に突き出していた外便所が解体されたほかは大きな間取りの改変がほとんどなく、主要構造材は建築当時のままである。

表2は、各部位の改修並びに変遷を整理したものである。大講堂の変遷は、大きく四期に分けることができる。

Ⅰ期：建築時（天然スレート葺き屋根）一九一九（大正八）年以降

Ⅱ期：金属板葺き屋根への改修　一九五八（昭和三三）年頃以降

Ⅲ期：外便所解体　一九六四（昭和三九）～一九六六（昭和四一）年以降

Ⅳ期：銅板葺き屋根等の改修　一九八二（昭和五七）年頃以降

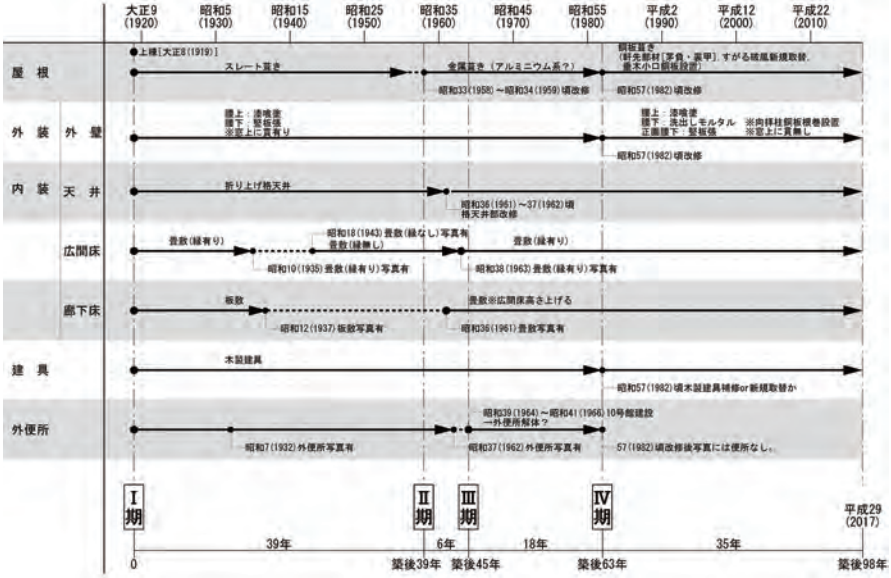


表２　国士舘大講堂改修履歴

1　Ⅰ期：建築時（天然スレート葺き屋根）　一九一九（大正八）年以降

建物は基壇上に建つ木造平屋建ての真壁造りで、主規模は現状同様、梁間八間、桁行一〇間、南正面に間口三間の向拝が付く。屋根は妻入りの反りのある入母屋造り屋根で、向拝部分を葺き下ろす。屋根葺き材は天然スレート葺きで、軒先に銅製の軒樋を廻す。外装は腰下を竪板張り、腰上を飛貫表しの漆喰仕上げとし、側柱の柱頭部に舟肘木を据える。

入口は正面向拝と北東の常用口の二カ所である。正面向拝へは、基壇まで石段三段、さらに木階四段を上り、建物梁間の間口巾一杯に付く切れ目板張りの濡れ縁へ上がり大講堂内の廊下へ入る。常用口は木階四段を上がり、内部の廊下へ入る。

間取りは、中央を一〇八畳（五四坪）敷きの広間とし、その南東西三方に幅一間の縁甲板張りの廊下を廻す。廊下は腰下を竪板張り、腰上は松煙塗装を施した額縁が廻る漆喰仕上げとする。広間は、廊下の腰上同様、松煙塗装を施した額縁が廻る漆喰仕上げである。天井は、廊下は竿縁天井、広間は折上格天井として天井を廊下より上げ、広間としての格式を高める。広間正面奥には幅三間、奥行一間、高さ一・五尺の畳敷きの講壇を設け、その奥にはさらに五・七寸上げて幅二間、奥行四尺の床の間を設える。講壇上の天井は無目落し掛け[138]を梁間に渡して広間の折り上げ天井を受け、一段下がった位置で鏡板天井目透かし張り[139]とする。床の間の天井も鏡板天井目透かし張りである。

廊下の北東奥は、内法上の天袋部分が開放され、内法下は折れ戸を建て込んだ物置である。上の開放部は廊下の竿縁天井がそのまま伸びる。物置内部は、廊下同様腰下を竪板張り、腰上を松煙塗装額縁が廻る漆喰仕上げとし、内部に作り付けの木製棚を設ける。

反対側の北西には、外便所（現存せず）が繋ぎ廊下を介して西側へ突き出した形で取り付く。その規模は確定できないが、図面、古写真等の資料より、繋ぎ廊下は巾一間、長さ一・五間、外便所は梁間一・二五間、桁行二間程度と推測される。現在物置となっている箇所は、建築当初は縁甲板張りの廊下で、突き当たりの繋ぎ廊下境に建具を建て込み便所と間仕切る。繋ぎ廊下、便所の内部仕様は不明であるが、古写真から外便所は主屋より屋根が低いこと、既存柱の床付近に残る痕跡から、繋ぎ廊下から先は木階等で数段下がっていると推定される。屋根は、外便所は寄棟造り、繋ぎ廊下は外便所屋根より一段低くした切妻造りで、天然スレート葺き、あるいは金属

葺き屋根と推定される。外装は下見板張りで、繋ぎ廊下、外便所ともに西面に出窓が付き、外便所の出窓が付いた部分は手洗いと推定される【図8】。

大講堂は建築当初、教室として使用されるほか、様々な式典や講演会場として利用された。一九二三年九月一日の関東大震災の際は、大講堂を含む国士舘の構内は大きな被害を受けなかったため、施設を開放して都心からの避難民を広く受け入れた。また、一九四五年五月二五日、国士舘周辺はB二九爆撃機の空襲を受け、校舎のほとんどを焼失したが、大講堂ほか四棟（柔道場、剣道場、正気寮、時習寮）が戦災を免れた。大講堂は、関東大震災、第二次世界大戦、そして激動の戦後を経た一九五八年頃まで、築後三九年の間、建築時の姿が維持された。

なお、戦中・戦後の古写真を比較してみると銅製の屋根樋が取り外された様子が見受けられ、戦時中に供出した可能性が考えられる。

2　Ⅱ期：金属板葺き屋根への改修　一九五八（昭和三三）年頃以降

Ⅰ期と間取りや規模は大きく変わらないが、屋根が銀色の金属葺きに改修された。一九五八年は国士舘大学が創設され、体育学部が設置された年であり、国士舘にとって節目の年であった。構内の整備に合わせ、屋根の改修も行われたと推定される。なお、同年、大講堂の東に五号館、一九六三年には大講堂の西に七号館が完成する。この頃の古写真には、まだ外便所が写っている。

古写真を見ると、この頃の広間折り上げ格天井は築後四〇年を経て不陸が著しかったことが分かる。このため、一九六一年頃に改修されて現在に至っていると推定される。大講堂はこの頃、柔道などの道場としても利用されており、このため元々の廊下縁甲板張り床の上に畳が敷かれた。

3　Ⅲ期：外便所解体　一九六四（昭和三九）～一九六六（昭和四一）年以降

一九六四年三月、大講堂南東の八号館が完成し、一九六六年一月には大講堂北の一〇号館が完成する。この一〇号館の建設に際し、外便所が解体されたと推定される。解体に伴い、廊下北西端の繋ぎ廊下境が物置へ改修された可能性が考えられる。

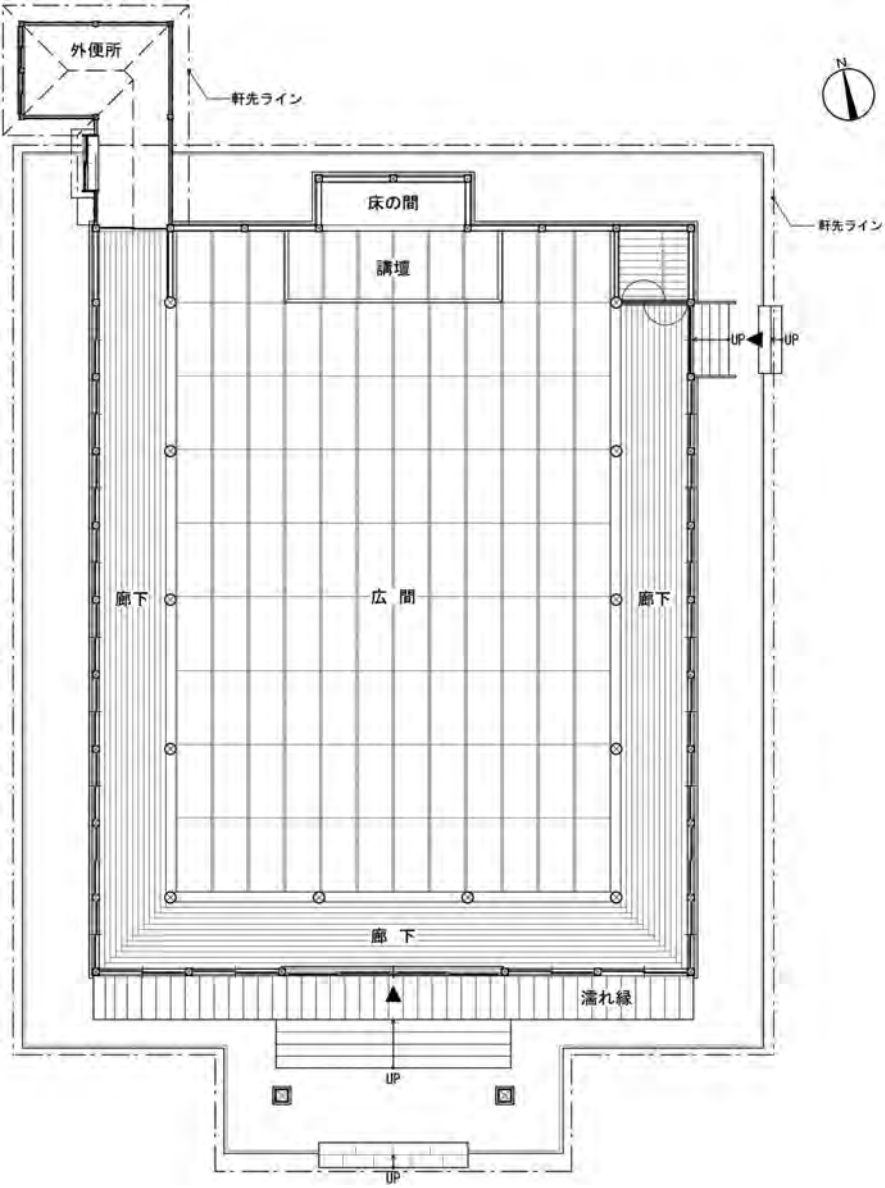


図８　建築当初の大講堂の復原平面図

4　Ⅳ期：銅板葺き屋根等の改修　一九八二（昭和五七）年頃以降

一九八一～一九八二年にかけて、銅板葺き屋根への改修を含む比較的大掛かりな改修が実施された。現在、我々が目にする大講堂の姿は、この改修後のものである。

屋根は銀色の金属板葺きから銅板葺きへと改修し、その際、野地板、軒先廻りの茅負いや裏甲、破風、縋る破風等が取り替えられた可能性が高い。また、垂木軒先、破風、懸魚、向拝柱柱脚に銅板が巻かれた。銅製屋根樋も同時に刷新されている。

外装は、正面の濡れ縁上の腰竪板張りが後補材へ取り替えられ、東西面の腰竪板張りは、モルタル塗り仕上げへ改修された。内法上の飛貫表し漆喰仕上げは、その上にボード下地を張って漆喰仕上げとし、これまでの飛貫表しの意匠ではなくなる。

建具については、正面の主出入口と常用口の建具の意匠は以前のものを踏襲し、後補材へ取り替えられた。

床については、断定はできないが後補部材の経年劣化の状況から、同時期に改修された可能性が高い。床組は補強のため、旧材を活かして劣化部を補修、取り替えた上で、補助的に後補材が挿入されている。床束石も同時期にコンクリート製のものへ取り替えられた。廊下の縁甲板並びに広間の捨て板（荒床）は構造用合板へ張替えられ、畳が敷かれた。この改修の際、工事に絡む廊下の腰竪板張り壁と、広間の内法下の松煙塗り額縁が廻る漆喰仕上げは後補材へ刷新され、内法下の松煙塗り額縁は撤去されている。

また、廊下竿縁天井の天井板、講壇および床の間上の化粧合板目透かし張り天井の後補材への改修についても、部材経年劣化状況から、この時期の可能性が高い。

おわりに

大講堂は、一九一九（大正八）年、国士舘が現在の港区南青山から世田谷に移転してきた直後に建築された、国士舘の教育理念を象徴する「純乎たる日本式」（「国士舘上棟式記事」『大民』第四巻第八号、青年大民団、一九一九年八月）の外観をもつ建物である。一〇八畳の無柱の広間という大空間と日本風の寺院建築（本堂風）の意匠（建築様式）を具現化するため、小屋組構造の一部に洋風技術のクイーンポストトラス構造を採用している。また、屋根は天然スレート葺きを用いており、当時の最先端技術、材料を取り入れ、和洋の両技法を巧みに

折衷させて新たな日本近代建築へと昇華したものであるといえよう。

その用途は、建築時より教室として使用されるほか、様々な式典や講演会場として利用され、関東大震災の際は、被災者を広く受け入れたという記録も残っている。戦時中の空襲の際には、当時の教職員の必死の消火活動により焼失を免れた。その際、大怪我を負った教職員や生徒がいたとの記録も残っている。

大講堂は、その後も国士舘大学世田谷キャンパスの中心的、象徴的な存在で、武道場、茶道場として、また大学のオープンキャンパス等の行事やサークル活動に使用されてきた。その内部はシンプルな大空間を保有しているため、様々な用途で使用することが可能であり、その懐の深さを表している。

当初付属していた外便所が解体され、また屋根、内・外装など数度、改変の手が加えられているが、主屋の間取り、規模、構造、意匠形式は往時の姿をよく留めている。二〇一七年一〇月二七日には、国登録有形文化財（建造物）に登録された。講堂という分類における登録文化財としては都内で最古となり、また、和風意匠の講堂は全国的に類例が少なく貴重である。今後も、国士舘の建学の精神を象徴する建造物として、保存と活用を両立した「生きた文化財」であり続けることを願う。

補足となるが、現地調査の際、どうしても理解できない痕跡が見られた。濡れ縁の束側面と貫上面が削れているのである【写真74・75】。昼休み時間に昼食をとり、大講堂へ戻ってきたところ、国士舘の学生が数人、濡れ縁に腰掛け、談笑している姿が見られた。腰掛けた状態で、ちょうど束と貫の位置に足が当

写真 74　現状　濡れ縁　束・貫の削れ

写真 75　同右　（拡大）

たっていたのである。ここから、この痕跡は改修等によるものではなく、学生たちが次の授業の合間などに濡れ縁へ腰掛け、授業について、あるいは人生を語らう際に足が当たり、削れたことによる経年痕跡であると判明した。各時代の若者が大講堂に集い、語らい、ここを中心に学内外の活動をしていたことを思うと、感慨深いものがあった。

謝辞

調査並びに本稿の執筆について、世田谷区文化財保護審議会委員・堀内正昭氏（昭和女子大学教授・工学博士）、同・重枝豊氏（日本大学教授・工学博士）、世田谷区文化財係の多大なご協力を得ることができました。ここに感謝申し上げます。また、国士舘史資料室・熊本好宏氏には、全面的なご協力ご助力のほか、当社牧野徹氏ほか所員の調査・整理・図版製作等の協力があり、投稿できたことを感謝の意とともにここに記します。

註

(1)野帳：建物の寸法などを測って書き入れたもの。
(2)仕口：二つ以上の部材をある角度で接合する工法。
(3)「中学校設置認可申請書」（一九二五年三月三〇日）。『国士舘百年史　史料編上』学校法人国士舘、二〇一五年、三三四頁所収。
(4)基壇：寺院建築の導入とともに日本に伝えられた基礎工作法。土盛りの上に建物を建て、周りは石で外装される。
(5)真壁：和風木造建築における伝統的構法。壁を柱と柱の間に納め、柱が外面に現れる壁。
(6)向拝：社殿や仏堂の正面に差し出された構造物。参詣人の礼拝のためのもの。
(7)切目：切った面、線、小口などの総称。
(8)濡れ縁：家屋の外側に設けられる雨ざらしの縁側。
(9)妻入り：大棟（おおむね）（屋根の最頂部の棟）と平行な方向に入口のあること。
(10)入母屋造り：入母屋屋根を持つ建物の形式。入母屋屋根とは、大棟から地面に向かう山形の二つの傾斜面を持ち（切妻造り）、その四方に庇屋根を付けた形式。
(11)軒樋：屋根の雨水を軒先で受ける樋。
(12)腰：建物の壁面の仕上げや構造が上部と下部で異なっている場合に、その下部の壁面のこと。
(13)舟肘木：柱の上にあって軒を支える部材の一種。
(14)上屋：屋根を支える主要な構造部を指す。本屋の外

壁に接して設けられた屋根やその下にある空間を指す下屋（げや）に対していう。

(15)竿縁天井：竿縁をもつ天井。竿縁は天井の下板を支えるため、または化粧として、それと直角に配された細い材の総称。

(16)折上格天井：回り縁から湾曲した部材である支輪で折り上げられた格天井。格天井は、断面が二～二・五寸角の材（格縁（ごうぶち））を縦横に組み合わせ裏板を張った天井。

(17)内法：敷居の上端から鴨居の下端までの長さ。敷居は引戸などを建て込む溝のある下枠であり、鴨居はその上枠のこと。

(18)敷桁：壁の上部にあって柱を連結しておく桁。桁は柱間に架ける水平部材。

(19)棟木：小屋組（屋根を支える骨組）の頂部に水平方向に取り付ける横木。

(20)支割り：垂木（屋根の下地を支えるため、棟から軒先に渡す長い木材）の幅と成（せい）（上端から下端までの垂直距離）の和を一枝とし、柱間などの心々距離（中心から中心までの距離）を決めるもの。

(21)垂木：屋根の下地を支えるため、棟から軒先に渡す長い木材。

(22)成：上端から下端までの垂直距離。

(23)割肌：石などを割ったままの表面状態。

(24)櫛引き：左官仕上げの一種。櫛鏝（くしごて）で縞状の模様を付けた仕上げ。

(25)布基礎：杭などを使用せず直接地盤に基礎を作る直接基礎の一種類。

(26)束：短い垂直材の総称。

(27)テーパー：細長い構造物の径・幅・厚みなどが、先細りになっていること。

(28)束石：木造建築の一階床組で床束（床下の束）を立てるために据える径二〇～二五cm程度の丸い石。

(29)足固め：複数の柱の足元を相互につないで建物を固めること、またはそのための部材。

(30)貫：柱を貫いて相互につなぐ横木。壁の下地材の取付け固定と壁を補強するためのもの。

(31)桁：側柱の上にのる水平材で垂木を受ける部材。

(32)梁：柱頭あるいは柱上部の側面で主として枘（ほぞ）差し（木造建物の仕口の一で枘と枘穴で接合するもの）にしてある水平材。屋根の骨組みを支える。

(33)石場建て：礎石の上に直接柱を立てるため、柱の下端を礎石の凹凸に合わせる工法。

(34)大引：根太（床板を支える部材）を支える一〇cm内

外の角材の横木。

(35)根太掛け：根太の端部を受ける横材。

(36)根太：床板を支える部材。

(37)長手：材の寸法の長い側。

(38)床束：床を支える床下の束。

(39)丸太束：丸太の短い垂直材。

(40)荒床：仕上げ床面の下張りとして張る板床であり、和風建築では畳の下に張る床のこと。

(41)身舎空間：建物本体の主要な空間に付加された空間。

(42)庇空間：建物本体の主要な空間。

(43)陸梁：建物の屋根を支える小屋組の一種である「洋小屋組」（水平材・垂直材・斜材を三角形に組み合わせて作る）の最も下にある梁。

(44)敷桁：壁の上部にあって柱を連結しておく桁。

(45)飼木：二つの部材の間に挟んで両材の位置を正しく保つために使用する木材。

(46)丸桁：社寺建築において垂木を受ける横架材。

(47)差鴨居：鴨居のうち、特に成が七寸以上二尺ほどまでのもの。建築物を支える柱や梁などを固めたり長い柱間をとるために使用される。

(48)中備え：斗拱（ときょう）（柱の上で軒を支える装置）の間にあって各種の桁を受ける支持材の総称。

(49)込み栓：二つの木材の接合部分を固定するために打ち込む栓。

(50)平枘：木造建物の仕口に使われる枘の一。幅に比べると厚さの薄いもの。柱と土台、柱と軒桁などに使われる。

(51)虹梁：社寺建築に用いられる化粧を兼ねた梁。

(52)鯖の尾：魚の鰭（ひれ）状に切り込んだ形。

(53)背割り：木材の芯持ち材にあらかじめ鋸目（のこめ）を入れ、他の部分に乾燥に伴う割れの生ずることを防止する方法。

(54)埋木：木材の疵（きず）や節などの欠陥部分を鑿（のみ）で穴堀りして木片を充填すること、またはその木片。

(55)片筋違い：筋違いは柱や梁などで囲まれた四角形の枠組みに対角線状に入れた補強部材のこと。風や地震などによって四角形が菱形に変形するのを防ぐ。片筋違いは、たすき状（X状）ではなく片側方向だけに筋違いを取り付けたもの。

(56)飛貫：壁の下地材の取付け固定と壁の補強のために取り付けられる貫（建物の柱を貫いて、柱を相互につなぐ横木）の一種。

(57)小屋裏：建物で屋根裏にある空間。下方は天井によって区画され、小屋組を隠している。

(58)小屋組：屋根を支える骨組のことで、屋根自身の重さや風圧、雪の重みなどを柱や壁に伝える役割を果たす。
(59)対束：建物の屋根を支える小屋組の一種である洋小屋組（水平材・垂直材・斜材を三角形に組み合わせて作る）の最も下の梁において左右対称に対立するように設けられた束（短い垂直材）。二重梁（上下二重に架け渡した二番目の梁）を受けるためのもの。
(60)方杖：洋小屋組において、トラス（三角形状の骨組）に用いられる短い斜めの部材。
(61)クイーンポストトラス：屋根を山形とし、トラス（三角形状の骨組）の組み方において、左右一対で使用される対束（短い垂直材）をもつもの。
(62)洋小屋組：建物の屋根を支える骨組である小屋組の一種。水平材・垂直材・斜材を三角形に組み合わせて作る。
(63)母屋：母屋桁の略。屋根を支える骨組において、屋根の最頂部の棟、あるいは軒下で垂木を受ける軒桁に平行して垂木または裏板（屋根裏の板）を支える部材。
(64)和小屋組：日本古来の屋根小屋組。小屋組は建物の屋根を支える骨組のこと。桁の上に小屋梁を架け渡し、これに束を立てて組む。洋小屋に比べて斜材がほとんどないため水平力に弱く、また大きな梁を作るには不適当だが、構法が簡単であり丸太のように多少の不整形の材も使用できるので経済的である。
(65)桔木：梃子の原理を利用して、長く突き出ている軒先を支えるための部材。
(66)登り梁：木造の建物の屋根を支える骨組において、傾斜して架けられた梁。
(67)二重梁：小屋梁と棟との間にある梁。
(68)鼻母屋：母屋のうち最も軒に近い位置にあるもの。母屋は屋根を支える骨組において、棟あるいは軒桁に平行して垂木または裏板（屋根裏の板）を支える部材。
(69)キャンティレバー：一端が固定支持され、他の端が自由な梁。
(70)トラス：部材が三角形を単位とした構造骨組の一種。
(71)転び留め：母屋が転ばないように留めておく材。
(72)茅負：垂木の端部に載る横木。軒先の曲線を調節するのに重要な役割を果たしている。

(73)化粧軒：下から見上げた場合、垂木や野地板（屋根を葺く下地板）などが目に見えるようになっている軒。
(74)流れ：屋根の水はけのために傾斜面を作ること。
(75)木小舞：垂木上に渡した桟。
(76)化粧垂木：軒下や室内から見えるような所に現われている垂木の総称。
(77)出隅：二つの面が出会って出来る稜線。外側の角のこと。
(78)井桁：「井」の字形のものの総称。
(79)疎ら割：垂木や格子の骨組となる部材などを粗く割り付けること。
(80)二重裏甲：裏甲が二重になっていること。裏甲は茅負（垂木の端部に載る横木）の上に載る化粧の幅広の厚板。
(81)野地板：屋根葺き材の下地板。
(82)流れ方向：屋根の傾斜のついている先の方向。
(83)見え掛り：目にみえる部分および見える側をいう。
(84)隅木：屋根の最頂部の水平な棟（大棟）から四隅の軒先に向かって斜めに流れる隅棟（屋根面が互いに接した部分にできる、隅に向かって傾斜した棟）を支えている一種の棟木。
(85)引渡し：反りや起（むく）りのある屋根などで、頂上部の棟から軒先までを直線で結んだ時の傾斜のこと。
(86)大屋根：建物の主要部分をおおう大きな屋根。
(87)縋る破風：本屋根の軒先からさらに付け出された片流れの破風。神社・仏閣などの屋根で、礼拝のため設けられた正面に張り出した部分（向拝）の側面に多く見られる。「縋る」は「しがみつく」の意味。破風は部材の先端部を隠すために取り付ける板（破風板）や部位を指す。
(88)野垂木：見えない部分にある垂木。
(89)狐格子：上部は二方に、下部は四方に傾斜する屋根をもつ入母屋造りの妻（屋根の最頂部である棟と直角になる両側面）をふさぐ格子。寺院などに多い。
(90)懸魚：建物の妻側（屋根の最頂部である棟と直角になる両側面）において、棟木や桁の先端を隠すための取り付ける装飾用の板。
(91)破風：部材の先端部を隠すために取り付ける板（破風板）や部位を指す。
(92)前包：入母屋造りの場合、妻をふさぐ狐格子の下端と屋根とが接する部分にある水平材。
(93)板子格子：町屋の二階に見られる格子の一種。幅

二・五寸、厚さ四～五分の厚板を窓の内側から縦に釘付けにしたもの。

(94)水切り：雨水が下面を伝わって壁面に達し、浸水や汚れの原因となるのを防ぐために付ける小さい溝、あるいはL字形の部分。

(95)チリ：柱を露出する壁である真壁において、柱外面と壁面との距離。

(96)長押：柱を両面から挟み付けて大釘で打ち留めて固定した横材の総称。

(97)薄縁床：本畳の代りに板畳を敷き込んだ床の間。

(98)地覆：構造物の最下部を固める横木。柱の最下端の内側に水平に入れてある。

(99)框：床に段差がある時、高い方の床の末端に取り付けられる化粧の横木。

(100)無目敷居：戸などの建具を入れ込む溝の刻まれていない敷居。

(101)縁甲板張り：床板張りの一種。実矧ぎ（一方の板に凸形の突起〈実〉を、他方の板に凹形の溝〈小穴〉を彫って継ぎ合わせる板の接合法）などにした縁甲板を接ぎ合わせ、床板を支える部材である根太に取り付ける。

(102)内法：敷居の上端から鴨居の下端のこと。

(103)廻り縁：天井と壁の接する部分に廻す見切り縁。

(104)松煙：松を燃やして作った煤。

(105)巾木：壁の最下部で床に接する箇所に設けた横材。

(106)笠木：塀、手すり、壁の腰の部分に平らに板を張る腰羽目などの上部材。

(107)小舞：屋根や壁の下地で竹や貫（水平材）を縦横に組んだものの総称。

(108)目透し：二つの部材の接合部の隙間をあけること。

(109)二重廻り縁：廻り縁が二段になったもの。

(110)格間：格天井などにおいて、縦横に組んだ角材によって形成される正方形の空間。

(111)支輪板：天井を一段高くするため使用される湾曲した部材である支輪の裏側に張ってある板。

(112)木摺り下地：塗り壁の下地に用いる小幅板。

(113)格縁：格天井などにおいて、角材を縦横に組んで形成された区画の格組み。

(114)柾目：年輪が材面に対してほぼ直角をなしているような縦断面の木目のもの。

(115)突板：木材を刃物で薄く殺いだ板。

(116)矩折れ：直角に曲がっていること。

(117)羽重ね：外壁や天井などで板を連続的に重ね合わせていく方法、またはそのようにして張った部分。

(118)天袋：天井面に接して造られる扉または戸付きの戸棚。
(119)無目鴨居：戸などの建具を入れ込む溝の刻まれていない鴨居。
(120)突き付け：加工を施さず、単に材を突き合わせて釘や接着剤などで接合すること。
(121)根太天井：根太は床板を受ける横架材のこと。根太天井は、二階の床組を一階の天井として現わしたもの。
(122)框戸：戸の四周を固める部材である框の中に板材を挟み込んだ建具。
(123)嵌め殺し：窓や障子など嵌めたままで開閉ができない状態、またはその状態を作ること。
(124)差鴨居：引戸などを建て込む溝付きの上枠である鴨居のうち、特に成が七寸以上二尺ほどまでのもの。建築物を支える柱や梁などを固めたり長い柱間をとるために使用される。
(125)帯鉄：細長く薄い鉄板。
(126)腰付き：腰板が張られていること。腰板は板戸などの下の方を板張りにする板。
(127)ケンドン形式：上を鴨居にはめ込み、下を敷居の溝にはめ落として建て込むこと。
(128)サラン網：サランは塩化物由来の合成樹脂で防虫網などに用いられる。
(129)木連れ格子戸：格子の裏に板を張った戸。
(130)床框：床の間の前端に設けられる化粧框（横木）。
(131)落し掛け：床の間や書院窓の上部にある小壁下に架け渡してある横木。
(132)中鴨居：鴨居と敷居の中間に取り付ける鴨居のこと。
(133)地長押：柱の最下部をつなぐ長押。長押は、柱を両面から挟み付けて大釘で打ち留めて固定した横材の総称。
(134)腰長押：窓下など腰の部分に回された長押。
(135)内法長押：内法にある長押。
(136)目違い継ぎ：凹凸を設けて木材を接合する方法や接合部のこと。
(137)枕捌き：長押を床柱の裏壁の位置まで回すこと。
(138)雛留め：長押を床柱の表面の途中で見切る場合、その木口を隠すために使われる仕口。
(139)釘隠し：長押を打ち留めている大釘の頭を隠すための化粧金具。
(140)ささら桁：階段上に切り込んだ刻み目の上に階段の踏み板をのせて支えるもの。

(141)蹴込み板：階段の踏み板と踏み板の間の垂直な部分の板。
(142)縁葛：縁側に張る板を支えるために、縁側下の縁束の頭部を連結する横木。
(143)矧木：矧ぎ足した材、もしくは矧ぎ足すこと。
(144)下り棟：屋根の流れに沿って軒先に向かう棟の総称。棟は二つの傾斜した屋根面が交わる部分。
(145)隅棟：屋根面が互いに接した部分にできる、隅に向かって傾斜した棟。
(146)スレート：粘土が堆積してできた薄く割れやすい頁岩、および頁岩や泥岩が圧力で固まった粘板岩の薄板。
(147)木口：部材の端面、木材の切り口のこと。
(148)鶴首金物：軒樋を垂木などに固定する金物。
(149)腰貫：建物の腰の部分（窓の下辺り）の位置に設けられた貫。貫は柱を貫いて相互につなぐ横木であり、壁下地材の取付け固定と壁の補強のためのもの。
(150)裏甲：茅負の上に載る化粧の幅広の厚板。
(151)不陸：水平でないこと、面が平らでないこと。
(152)「中学校設置ノ件」（『設置廃止（位置変更、改称）に関する許認可文書・中学校・東京都（大正12年－昭和21年）』、国立公文書館所蔵）所収。
(153)下見板：板の長さ方向を水平にして張った板壁、または張ること。
(154)寄棟造り：大棟（屋根の最頂部の水平な棟）の両端から、四方に隅棟（屋根面が接した部分にできる傾斜した棟）が降りる建物の形式。
(155)切妻造り：切妻屋根を持つ建物。切妻屋根は、屋根の最頂部である大棟から両側に流れをもつもの。
(156)地窓：床面に接した位置にある窓。
(157)当板：部材に添えて取り付ける板。
(158)無目落し掛け：溝の彫られていない落し掛け。落し掛けは、床の間や書院窓の上部にある小壁下に架け渡してある横木。
(159)鏡板天井：細長い小材や角材などによる縁がなく、一枚の鏡板（平らで大きな板）を張り上げた天井。

刊行物紹介

『国士舘百年史　史料編』

学校法人国士舘では、国士舘創立一〇〇周年記念事業の一環として『国士舘百年史』の編纂を進めて参りました。そのうち、『国士舘百年史　史料編』上・下の二冊を二〇一五年三月に刊行いたしました。

上は、国士舘の創立から終戦までの時代を、下は、戦後から現在に至る時代における国士舘の歴史に関する史料を厳選して収載した史料集です。各巻ともに史料講読の指標となる解題を付して、読者の便をはかっています。

● 目次構成

史料編　上

第一部　国士舘の創立と発展

国士舘の創立／中等教育機関の創設／高等教育機関の拡充と戦時下の学園／大民団と国士舘／校舎配置図

史料編　下

第二部　戦後の再建から総合学園化

復興への取り組み／国士舘大学の創設／総合大学化と教育環境の整備／中学校・高等学校の設置と発展

第三部　学園改革から創立一〇〇周年へ

学園改革と教育の発展／創立一〇〇周年に向けて

● 仕様　A5判（上縦組・下横組）／上製本

入手希望の方は左記までお問い合わせください。創立一〇〇周年記念事業募金へのご理解・ご協力を賜れば幸いです。

〒一五四―八五一五　東京都世田谷区世田谷四―二八―一
柴田会舘二階
学校法人国士舘　国士舘史資料室
TEL　〇三―三四一八―二六九一
FAX　〇三―三四一八―二六九四
E-mail　archives@kokushikan.ac.jp

論文と資料紹介――論文

国士舘の設立とその時代
―私塾、大正、活学の系譜―

平崎　真右（しんすけ）

はじめに

私塾「国士舘」は一九一七（大正六）年一一月四日に設立されたが、この時代、一連の文部省令下の学校機関ではなく、あくまでも私塾[1]を出発としており、（後には文部省令下の正規の学校となるにせよ）現代まで継続する学校は珍しい。史資料類のまとまった類例としていますぐに思いつくものは、一九二一年に開校された「自由学園」や、「玉川学園（玉川塾）」（一九二九年）が挙げられるだろうか。[2]後者の玉川学園は創立者の小原國芳（一八八七～一九七七年）が「最後の私塾創設者」とも呼ばれることから、戦前までの私塾教育における一応の下限とみなせるが、私塾「国士舘」（以下、私塾を指す場合は、史料からの引用を除いて「国士舘」とのみ表記）の設立とその後の動向もまた、近代学校史あるいは教育史研究の上からみて最後期に位置する私塾開設の事例と言えるであろう。

学校史、教育史の上からみたときには、私塾にとって大正期は明治期以来より続く困難な時代であったとも言える。そのようななかで立ち上げられた国士舘の動向は、当時の時代相と突き合わせてみるとき、その経営や運営のあり方について興味深い一面がみられる。議論を若干先取りしてしまえば、同時代における「新教育」と呼ばれる教育思想や動向はもとより、「新しき村」（一九一八年）や「自由大学」（一九二一年）、「羅須地人協会」（一九二六年）といった、必ずしも正規の学校機関としてではないものの、地方・地域における新しい共

同体の設立や人間教育を目指した活動と国士舘とは、時代の文脈を共有する側面が認められる。それらに等しく影響が見え隠れする時代のキー・コンセプトは、「大正デモクラシー」や「大正自由教育」、「大正生命主義」といった大正期に特徴的な用語で語られる思潮が挙げられよう。先に触れた自由学園や玉川学園などについては、これまで自他ともにこの時代相の下に位置づけられてきたわけだが、国士舘の成り立ちや展開についても、このパースペクティブに絡めて検討していく余地があるのではないだろうか。その点を追究していくことは、同時に大正期における私塾経営の一面を考えることにも通じてゆくはずである。

本稿は以上の見通しのもと、国士舘の設立趣旨や運営方針などを検討することで、国士舘と時代状況の交差する地点の前景化を試みる。さらに、国士舘の設立理念として掲げられる「活学」をあわせみることで、それが明治中期頃よりみられる言説とリンクするコンセプトでもあったことを指摘する。それによって国士舘の近代学校史、教育史における位置づけについて再検討していく視点を多少なりとも提案できればと考えている。まずは迂遠なようではあるが、明治期以降の私塾の位置づけや展開について概観することから始めてみたい。

一　近代教育制度と私塾

1　「学制」から「学校令」にかけて

明治期の本格的な学校制度は一八七二（明治五）年の「学制」を嚆矢とするが、以後の一連の制度は「明治一九年体制（「学校令」―引用者註）への収斂過程[3]」であると言われる。ここでは「学校令」までを対象に、近代の教育制度と私塾の関係についてみていく。

明治以前には全国で多くの私塾的な教育機関（寺子屋もふくむ）が開設・運営されていたが、学制が発布されて以降もなお多くの私塾が存在していた。この私塾の形式には、いくつかの種類が認められる。近世期からの寺子屋や私塾が引き続き運営されているもの、明治に入り新しく開設されたものの違いのほか、教授内容についても、読み書き（筆道、筆学など）を重視するものから国学や儒学といった高度な学問、英語やそれに付随するキリスト教などの洋学を教えるものまで、多様な状況を確認することができる。[4]先の学制は中央集権的な学校制度の設立を意図した近代教育の黎明を告げるものだが、私塾に関する規定は学制発布前にも既に認められる。[5]一八七〇年一二月二四日、明治政府は「太政官布告」に

より私塾の開業と入塾を許可制にすることを通達した。

第九百八十六
諸技芸師家私塾相開候向キ、生徒入塾之節、身元取糺シ、地方官添書無之者、入塾差許候儀不相成候事。
但、塾生増減明細書記シ、月末地方官へ可届出候事。

第九百八十七
諸技芸師家私塾相開候者、其地方官之許可ヲ可受候事。[6]

この布告は私塾を官の統制下に入れるはじめての措置であったが、一八七一年に創設された文部省はこれを受け継ぎ、翌年三月の「文部省布達第六号」では以下のように府県に命じている。

従前私塾ニ於テ生徒教育之儀ハ、官ヨリ指構不致候処、元来人民教育之道ニ於テハ、公私ニ因リ其差別無之筈ニ付、私塾教師ト雖モ官之許可ヲ不得、叨リニ教育不相成訳ニ候條、自今私塾ヲ開候者ハ、前以其姓名、年齢、従前之履歴、学課、塾則、教育之方法、開講之場所等委細ニ開列シ、当省エ伺出、免許ヲ受候上開塾可致、就テハ東京府下ニ於テ、是迄私塾設置候者、右塾則等早々取調、来十七日ヨリ二十日迄之際、府庁添翰ヲ以当省へ可伺出、其他府県ニ於テハ其官庁ヨリ適宜之期限ヲ立テ、塾則之類為差出、検査之上開否之見込ヲモ相添、当省エ可伺出候事。
但、府県学之外、皆私学トス、唯一家或ハ二家迄之子弟ヲ教候者ハ家塾ニ属シ候間、私学ノ数ニ算入セス。[7]

ここでは私塾を開く者は前もって氏名、年齢、履歴、学課、塾則、教育の方法、開講の場所などを文部省に届けて許可を得なければならず、その他の府県も同様であるという。これは「廃藩置県を実施し、全国の学校をすべて文部省のもとに統括しようとする政府の方針によるもの」[8]と指摘される政策だが、この許可制はつづく学制においても踏襲されていく。例えば学制の第四三章では「私学私塾及家塾ヲ開カント欲スル者ハ、其属籍、住所、事歴及学校ノ位置、教則等ヲ詳記シ、学区取締ニ出シ、地方官ヲ経テ督学局ニ出スヘシ」[9]と述べる。[10]さらに注目される規定として、第三〇章では、

当今中学ノ書器未タ備ラス、此際在来ノ書ニヨリテ之ヲ教ルモノ、或ハ学業ノ順序ヲ踏マスシテ洋語ヲ教ヘ又ハ医術ヲ教ルモノ、通シテ変則中学ト称スヘシ。但、私宅ニ於テ教ルモノハ之ヲ家塾トス[11]

と、学制に定める教科や施設を備えた正規の中学（正則中学）に対して、それに満たないものは変則中学とするが[12]、届け出制とされた多くの私塾はこの変則中学として括られていくことがこれまでに指摘されている[13]。

さて、学制においては私学・私塾について一定の意義が認められ、寛容な態度がとられていたと言えるが、一八七九年九月に公布された「教育令」、翌年一二月の「改正教育令」になると状況が大きく変わる。教育令の第二条において、「学校ハ小学校・中学校・大学校・師範学校・専門学校・其他各種ノ学校トス[14]」と定められ、翌年の改正教育令第二条においても、「学校ハ小学校・中学校・大学校・師範学校・専門学校・農学校・商業学校・職工学校・其他各種ノ学校トス[15]」と、正規の学校としての小・中・大学校や師範学校・専門学校などが掲げられた以外に「其他各種ノ学校」が規定された。「各種学校」と呼ばれるものがここで登場するわけだが、これにともなって学制に規定された変則中学や私塾・家塾などの規定は削除された。ここで私塾は各種学校に組み込まれる。この各種学校について、一八八三年の『文部省年報　第八』は項目を立てて次のように述べる。

従来各地方ニ設置セル学校或ハ家塾ノ類ニシテ、其学規及ヒ教授科目等ノ全ク小学中学若クハ専門学校ノ資格ニ適合セサルモノ［中略］仮ニ之ヲ小学若クハ中学ノ部類ニ編入セシモノナリ、然レトモ今ヤ学校ノ分類種別一ニ皆教育令ノ本旨ニ遵依シテ、学科不備ノ学校ハ其程度ノ如何ニ拘ハラス悉ク之ヲ純然完備ノ学校ト甄別セスンハアル可カラス［後略］[16]

（傍線部引用者）

学校（私塾）や家塾は小学・中学校の部類に入るものだが、教育令が公布されたことでそれらは「学科不備ノ学校」であるため、「純然完備ノ学校」つまり正規の学校と区別されることが明言されている。このように、各種学校は制度化された学校の進学コースから疎外されていくこととなる。さらに私塾（各種学校）に対する圧迫政策とみられるものが、一八八一年七月に布告された「文部省達第二八号」の「中学校教則綱領」と、一八八四年一月に布告された「文部省達第二号」の「中

学校通則」と呼ばれる通達である。たとえば前者では初等中学だけで四年間の課程とし、修身や和漢文その他を計一九科目教授することなどを定め、また後者ではその第四条には「中学校ハ教員中少クトモ三人ハ中学師範科ノ卒業証書又ハ大学科の卒業証書ヲ有スル者ヲ以テ、之ニ充ツヘキモノトス」[17]、続いて第五条には「中学校ハ修身其他諸科ノ教授上必須ノ図書及博物、物理、化学等ノ器械標本類ヲ備フヘキモノトス」[18]などと規定され、正規の中学校となるためのハードルは高められた[19]。

以上を下地としつつ、一八八六年には「帝国大学令」、「中学校令」、「師範学校令」、「小学校令」などからなる「学校令」が公布された。まずは三月に帝国大学令が、四月には小学校令と中学校令が出される。小学校令は小学校の義務教育化を定めたもので、中学校令では中学校が尋常・高等の二段階をとり、「尋常中学校―高等中学校―帝国大学」の進学制度が整えられた。これによって「各種学校は正規の教育制度から明確に切り離され」[20]たと言える。さらに各種学校は、一八九〇年一〇月に改正された小学校令（第二次小学校令）のなかでは、

私立ノ小学校・幼稚園・図書館・盲唖学校・其他小学校ニ類スル各種学校等ノ設立ハ、其設立者ニ於テ府県知事ノ許可ヲ受ケ、其廃止ハ之ヲ府県知事ニ上申スヘシ（第四一条）[21]

と規定されたが、法令上は各種学校に関する文言はこの「小学校ニ類スル各種学校」が唯一のものであり、戦後の「学校教育法」（一九四七年）で明確な法的根拠を与えられるまで、各種学校となった私塾は小学校令において規定されるものであった[22]。

2　国家主義と私塾

ここまで見てきたように私塾は各種学校として括られ、その位置づけは年を経るごとに不安定であったと言えるが、官公立の学校の設置が整うまでは実質的な中等教育を担う機関として比較的に多くが存続しており、それらのなかには現在まで継続する学校も多々みられる。それら私塾（各種学校）のなかには宗教教育によるものも存在する。例えば、明治に入り解禁となったキリスト教および宣教師による私塾は一八七〇（明治三）年のフェリス女学校をはじめ、立教学院、女子学院、青山学院など、短期間のうちに多くが私塾として立ち上げられるが、一八八六年の学校令で一通りの制度的な枠組みが設けられて以降、宗教教育に対しても統制の矛先が向け

られる。一八九〇年は「明治憲法」の施行と「教育勅語」が公布された年だが、その翌年には第一高等中学校で内村鑑三（一八六一～一九三〇年）の「不敬事件」が起きる。さらに一八九三年には東京帝国大学教授の井上哲次郎（一八五六～一九四四年）が『教育ト宗教ノ衝突』を著してキリスト教が日本の国体に背反すると述べるなど、この時期には国家主義の台頭と宗教（特にキリスト教）との軋轢が強まりをみせる。このような動向を前段としつつ、一八九九年八月三日には、文部大臣樺山資紀（一八三七～一九二二年）によって以下の訓令が発せられた。

一般ノ教育ヲシテ宗教ノ外ニ特立セシムルハ学政上最必要トス、依テ官立公立学校及学科課程ニ関シ法令ノ規定アル学校ニ於テハ、課程外タリトモ宗教上ノ教育ヲ施シ、又ハ宗教上ノ儀式ヲ行フコトヲ許ササルヘシ[23]

これがいわゆる「訓令一二号」だが、この訓令は同日に公布された「私立学校令」と抱き合わせであることは論をまたない。ここに改めて教育と宗教の衝突が生起するわけだが、この時多くの宗教系の学校は、正規の学校となり宗教教育を廃止するか、各種学校として非正規の学校のまま宗教教育を持続するかの選択を迫られることとなった[24]。さらに一九〇三年三月には「専門学校令」が公布され、ここに初めて専門学校が制度化されるに至る。

それまで各種学校として非正規の位置づけで教育活動に従事してきた私塾も、ここまで概観してきた正規の教育制度が整えられていくなかでは廃止されたものが多いが[25]、高度な教授内容を持つ私塾のなかには、いずれ専門学校令にもとづく専門学校として文部省令下の正規の学校に改組していく事例も現れる[26]。現在の国士舘大学も、その直接的な淵源はここに由来している（国士舘専門学校の認可は一九二九年）。

二　国士舘と「大正」という時代

1　「大正新教育」と国士舘

前節では明治期以降に私塾が置かれた位置づけについてみてきたが、明治政府による教育制度が整うにつれて、私塾（各種学校）の経営が困難の度を増していく様が見てとれた。その困難さは、資金面については措くにせよ、正規の学校としての恩典（上級学校への進学資

格、徴兵猶予など）を受けられるか否かはもとより、明治憲法や教育勅語の発布を背景とした国家主義の台頭など、イデオロギーへの対応にもあらわれていた。このような困難さは、時代が大正に入っても基本的には変わらない。むしろ日清・日露の二度の対外戦争を経ることで、戦争に伴う経済成長と産業構造・労働環境の変化、鉱毒問題なども含めた社会不安の拡大とそれと連動する労働争議の頻発、知識人を中心とした社会主義思想の活発化や普通選挙運動の盛り上がりなど、国内では様々な事案が問題として俎上に載せられる状況に伴い、国家や社会状況といった枠組みから完全に自由な私塾教育などはおよそ不可能でもある。なかでも一九一〇（明治四三）年の「大逆事件」前後の時期には、民心の引き締めを底意とする国民道徳論や家族国家観といった官製のイデオロギーも現れるが、およそこのような状況のなか、時代は大正を迎えていく。

第一次世界大戦前後の日本では、経済発展と並行して自由主義思想も広がり、市民の権利への関心が高まりをみせる。いわゆる「大正デモクラシー」の広がりだが、その流れは教育界においても「大正自由主義教育」または「大正新教育」（以下、「新教育」）の思潮として現れた。この「新教育」とは、国家主義的な強まりを見せる教育政策のもつ「画一主義、注入主義、暗記主義的な教育方法を批判し、子どもの個性、自発性の尊重を主張」[27]した教育思想と実践を指す[28]。このような特徴を持つ新教育の理念と国士舘の設立の動機には、教育目的とする地平は同じでないとしても、それが同じ時代の空気を背景として現れたという意味で、ある共通性が見受けられる。

国士舘の設立趣旨は「活学を講ず」の宣言に明らかだが、そこでは「物質文明の弊、日に甚だしく、人は唯科学智を重んじて、徳性の涵養を忘る」から始まる文言とともに、当時の教育について次のような認識を示している（なお「活学」については次節で検討する）。

> 一国の最高学府は未た天下に公開されざるなり、若し公開さるるとするも、ノート式の講義は畢竟死学のみ、其説く処高遠深邃なるが如きも、遂に之れ形式範疇のみ、何等の情熱なく、信念なし、人を化する力なし、形式、規則、規律、試験、之れ今日の所謂教育なるものなり。[29]

当時の高等教育を形式主義的なものと見なし、「形式、規則、規律、試験」といった内容では人を感化する

力は生れないとする認識自体は同時代の新教育とも通ずるが、国士舘の特色としては、「膝を交へて親しく活学を講ずるの道場を開設せん」[30]とする点に認められよう。

国士舘が目指す教育の姿は、「大正維新の大業を成就するの松陰塾に私淑せんとす」[31]のように、松下村塾的な私塾教育にある。一九一九年九月には麻布区笄町より現在の世田谷に移転するが、それに伴って柴田徳次郎らは新館に移り、「塾生諸子と心のまゝに起き臥しつ、或は語り或は談し、或は耕し」[32]と構内での生活を始めている。私塾時代の国士舘の大きな特徴は、このように教育する場が即ち生活の場でもあったことにある。それは「国士村」と呼ばれ当時の新聞雑誌にも取り上げられるが、国士村は学生内から村長・助役・収入役・雑役を、教職員も含めて村会議員を選挙で決める自治制度を敷いていたという[33]。この教育の場は、批判の対象であった当時の教育と教師のような一方的な教授ではなく、共に学び且つ生活する関係として構想され、実践されるものであった。世田谷に移って間もなく刊行された雑誌『大民』（第五巻第一号）の「是れ活学の大道場」と題した文中には次のようにある。

国士館は決して或る一種の限られた人間の養成所ではない、其講学の方法としては自修自発を旨とする、教師の口述を筆記する如き迂愚に倣はず、又妄りに不要の諳記を強要せず、詰込みにあらずして誘導にある。教師は命令者にあらずして相談相手である。同時に館生は自分の労力に依つて自活を期する、即ち学校附属三千坪の畑を耕すと共に別に或種の室内工業を営み、之に依て各自の生活費を弁ずるのである[34]。

右の言葉を、例えば新教育の旗手であり実践者であった玉川学園の小原國芳の次の発言と比べるとき、教育に対して基調音を同じくすることは容易に読み取れよう[35]。

成城以来、全人教育に個性尊重、自学自律に能率高き教育、学的根拠に自然の尊重、子弟間の温情に労作教育、生産教育に自給自足の教育［後略］

制度が整うに、四角四面の建物が出来て、先生は高く教壇に、生徒は低く冷い机や椅子に去勢され、一枚の辞令で任免がなされ、ドコの学校にどの先生が転任して、どの校長の下にどの学級にどの子供と師弟となるのやら、義務教育という名は美しいとして

1919年11月9日　国士舘落成式・開舘式（国士舘史資料室所蔵）

も、お役所風の空気の中に条令と叱責にまで堕落しては、到底ホントの教育が生まれようハズは無論ないと思います。

玉川学園（玉川塾）の教育もまた教師と塾生が寝食を共にし、生活の場それ自体の開拓を塾生と共に行う労作教育や、出版・印刷・植字といった事業も自ら行っていくなどの、国士舘とコンセプトを同じくする、言わば共同体志向を基調としていた[36]。

2　「大正生命主義」と新教育

国士舘の教育や新教育（の一部）にもみられた共同体志向を持った学びの場、実践の場は、それでは当時の教育界においてだけみられたのかと言えば決してそうとは言えない。学びと生活が相即するあり方は、学びの面が強く出れば私塾的な教育傾向が表れるものの、生活の面が強く出ればまた異なった表出の仕方をする。このような分け方もあくまで便宜的なものだが、後者の一例として、ここでは武者小路実篤（一八八五～一九七六年）と「新しき村」について簡単に触れておきたい[37]。

新しき村は一九一八（大正七）年一一月に宮崎県児湯郡木城村石河内の山あいに建設されたが、それは武者小

路の抱く理想の下、自由な個々人たちによる農本主義的な共同生活の場を立ち上げることを目的とする。組織としては、実際の共同生活を営む村内会員と、生活外から支援する村外会員とに分かれる。村内会員として入村した人々は、地元の篤農家に指導を受けながら水田稲作や耕地の開発などを行うほか、村外会員の中には池袋の郊外に出版社（「新しき村出版部曠野社」）を設立し、村と連携しながら雑誌や叢書、詩集などの出版事業に従事する者も現れた。また、村内では絵画、演劇、音楽、演説、朗読会などの表現活動が広く行われていたという。勿論、新しい生活の立ち上げは順風満帆ではなかったものの[38]、農本的な生活のなかで営まれる文化的な表現活動や学びの機会は、大部分が初等・中等教育修了者であった入村青年たちにとっては「〝私の大学〟であった[39]」と指摘される。この新しき村で注目したいコンセプトは、「村の精神及会則」の次の点にある。

一　全世界の人間が天命を全ふし、各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする。[40]

さらに戦後の発言ではあるが武者小路自身の言葉を借りれば、「新しき村の理想は簡単明瞭である。すべての人が天命を完うし、個性を生かすことが出来る世界」であり、それは「自分の生命を肯定する運動だ」とか、「新しき村の仕事にとつて一番大事なことは、自然の意志に従い、自己の生命を肯定できる道を歩くこと」、「ただ物質的に生きることではない。生命全体が素直に生きられることだ[41]」など、個々人が自らの「生命」を肯定し、自然と調和して生きる理想が繰り返し述べられる。そのため、鈴木貞美は新しき村を「国家や権力との葛藤を考えに入れないところに成り立つ。そういう意味でアナキスティックな農本主義共同体だった[42]」と指摘するが、ここで繰り返し登場する生命の言葉こそ、そのアナキスティックな農本主義共同体を支える根幹の理念でもあった。鈴木自身も位置づけるように、武者小路の理想ひいては新しき村の共同体的な生活を支える思想には、「大正生命主義」（以下、生命主義）と呼ばれる時代の思潮が控えている[43]。

ここで挙げる生命主義とは、「思想一般において、「生命」という概念を世界観の根本原理とするもので、一九世紀の実証主義に立つ目的論・機械論による自然征服観に対立する思想傾向[44]」をさしあたりは指すものとする。時間軸としては「日露戦争後から関東大震災に至る時代」、つまり大正という時代をほぼ含み、社会的には

「戦争や急速な重化学工業化の展開の中で「生命」の危機感が蔓延」する時代状況のなか、「物質文明批判と利益追求の自由＝生存競争の「近代」を超え、普遍性を求めようとする精神の営みを根幹で支えた思想」[45]とも整理される。

この生命主義は、文学や芸術、哲学、宗教といったおよそ文化的と呼べる領域に広く共有された思潮だが、その思潮と教育も無関係ではない。むしろ先に触れた大正新教育では、生命の語が様々に論じられるのである。[46]その点についてここで取り上げる余裕はないが、教育学や教育史の側からは、生命主義と新教育の関係については時代的な共時性は認めつつも、積極的に論じられているとは言い難い。[47]鈴木の整理する生命主義に対して、「文学、芸術、哲学、宗教など各分野における思潮の差異や特質による分類については曖昧である」[48]との指摘は確かにそうだが、その点については鈴木自身も「「生命」の観念が、まさにスーパー・コンセプトとして、一切の現象を呑み込むブラック・ホールのようなものとして働くことだけは心得ておこう」[49]と認めつつ、さらに次のように研究の方向性を示唆していた。

繰り返すが、「生命」に関する思想は、いつでも、どこにでも存在する。「生命」は人間のだれでもが実感しうるものだし、誰もが、何らかの生命観をもっている。その意味で「生命」という観念は普遍性をもっており、歴史や地域性を超えて思想を観察するための概念たりうる。「生命」を観察装置として用いるならば、言い換えると、それがどのような「生命」観に支えられているかという問いを基準に分析するならば、あらゆる思想について、それぞれの相互関連と特徴を明らかにすることができるはずだ。[50]

次節ではこの鈴木の言葉にも拠りつつ、生命という語と連綿とするかたちで主張される国士舘の「活学」について検討する。

三　「活学」と国士舘

1　「活学」と生命主義

国士舘の設立趣旨に「活学を講ず」の宣言があることは前節で触れたが、そこでは物質文明の弊害や当時の学校教育における形式主義的な傾向への批判が展開されていた。その文脈は、同時代に生起した新教育と通底する

ことを確認したが、新教育にみられた生命主義的な文脈をも国士舘は共有している。それを考える糸口が、設立趣旨でもある「活学」である。ここで改めて、どのような意味で活学なる言葉が用いられているのかを検討するため、何が活学ではないと認識されているかも含め、設立趣旨のなかで主張される論点を次のように整理しておく。

①物質文明の弊害と精神文明の欠落
②無批判的な西洋化（西洋の「猿真似」）
③教育制度・機関・教育者の形式主義

右の三点は互いに関わりあうが、他の文面でも度々繰り返される。[51] これを敷衍すれば、文明の機器を扱うべき「精神」ひいては「人間」が欠如しており、（その時点の）日本文化は西洋文化を直訳した猿真似にすぎず、そのため「人間（国士舘においては「国士」）」を育てるべき教育がみられない……およそこのようにまとめられる。それらが主張される『大民』の言葉をいくつか引いてみれば、

国家の最高学府たる帝国大学は骨抜きせる奴隷的の官吏養成所なり［中略］かくして智識の宝庫は天下に公開されざるなり。可し公開さるゝの日ありとするも、ノート式の講義は畢竟死学のみ、［中略］故に能く学ぶと称せらるる者も亦唯だ、所謂糞勉強するのみ、其漸く学校を終るや、一生の精力を消費し尽くして精神上のインポーテントとなり、［中略］かくして日本の教育は徹底せる舶来品にもあらず、純なる日本品にもあらざる、毒にも益にもならぬ間に合せ物となり、単なる死物となり終れり。[52]

今日の我が教育制度と教育機関と自称教育者とは凡て生命なき死物である、由来日本の文教は人民を権者の道具となさんが為めの機関であつた、[53]（いずれも傍線は引用者）

など、「死学」「インポーテント」「死物」「生命なき」といった生理的な表現も含め、当時の世相や教育を批判する点が見出せる。活学とは、それら「死学」「生命なき」ものに対して文字通りに「活きた学」「生命に満ちた」ものとして対置されていると言えよう。さらに、「死」や「生命」といった言葉からも明らかなように、ここには生命主義的な文脈も看取できるが、それは活学を媒介とした繋がりであることが判る。

2 「活学」の系譜

この活学は、その前身もしくは参照点としては少なくとも明治二〇年代終わり頃より散見しうる。ここでは明治・大正期に論じられる活学を概観し、特に井上円了（一八五八～一九一九年）の議論に注目するなかで、改めて国士舘の活学が含む文脈とそのオリジナリティについて考えてみたい。

国語辞典で活学の項目を確認しようとすると、明治期の『言海』（一八八二～一八八六年）、大正期の『大日本国語辞典』（一九一五～一九一九年）といった代表的な辞典類では確認できないものの、現代の『日本国語大辞典（第二版）』（二〇〇一年）では「活学問」[54]の項目においてわずかに認められる。しかしだからといって、明治・大正期において活学（または活学問）の語がまったく見られないかと言えばそうではない。活字で確認できる早い時期の例として、一八九六（明治二九）年五月の『穎才新誌』に三宅空々なる人物が寄せた「活学問」には、次のような一節がみられる。

> 儀式的ニ、束縛的ニ、只学力ノミヲ養フニ全脳ヲ奪ハレ、［中略］人間的ニ活眼的ニ、之ヲ施シ之ヲ行ヒ、虎ヲ広野ニ放ツヲ知ラサレハナリ、活学問夫レ何処ニアル、抑萬巻ノ書、億兆ノ冊、之ヲ学ヒ、之ヲ習フモ、而モ之ヲ用ユルノ術ヲ知ラスンハ、［中略］仮令幾多ノ学ニ通セサルモ、人ニ於テ、物ニ於テ、所謂、人間的ニ、活眼的ニ、之ヲ使用スルノ法全ケレハ、偉人タリ、傑士タルニ於テ、亦何ヲカ憂ン[55]、

これは、大望を抱いてもなぜそれが達成されないのかという文脈に出てくるものだが、大望を妨害するものとして「学力ノミヲ養フ」ことや、「万巻ノ書、億兆ノ冊」を学んでもそれを活かすことができない点が指摘される。十全に活かすためには「人間的ニ活眼的ニ」と述べられるが、ここで早くも「人間」が活学を論じる際のキーワードに現れている。

右の議論以降にも、書物や雑誌のなかに活学（活学問）は散見される。以下、目につくものに限るが、国士舘創立前後の時期までのものを挙げれば次頁の表のようになる。ここでそのすべてに触れることはできないが、基本的な論調はそれぞれがおおよそ通じている。すなわち、学校での書物上の勉強も大切だがそれだけではない実際社会に目を注いだ「活学活智」が大切だとするもの（表④）、学校で学問をしてもそれを活用する技量がなけ

表　「活学」「活学問」を扱った書物・雑誌

	記事見出し	著者（論者）／書名（号数）	発行所／発行年月
①	「活学問」	三宅空々／『穎才新誌』（977）	穎才新誌社／1896.5
②	「活学活書」	井上円了／『教育的世界観及人生観』	金港堂／1898.6
③	「活学者」	平田勝馬編／『五十名家語録』	鉄華書院／1898.10
④	「活学を修め活智を求むべし」	菅緑陰／『成功要録』	博文館／1899.12
⑤	「活学問」	鈴木芳太郎／『活精神』	文学同志会／1900.11
⑥	「死学を止めて活学を学べ」	SN 生／『中学文壇』第 9 年 22 集（222）	北上屋書店／1907.11
⑦	「近時世に云ふ活学問説は大間違ひ 活人物と死人物如何」	大隈重信／『商工世界太平洋』9（21）	博文館／1910.10
⑧	「死学活学」	遠藤隆吉／『弘道』（245）	日本弘道会事務所／1912.8
⑨	「活学と活書」	井上円了／『奮闘哲学』	東亜堂書房／1917.6
⑩	「活学問の愉快此に在り」	春花山人編／『修養叢書』第 2 編	立川文明堂／1918.2
⑪	「活学のこと」	田部井文吉編／『新運命開拓論』	東京美術画会／1919.3

ればただの奴隷であること（表⑤）、自然という良き教師が教育する学校で学び（例えば「郊外」で遊び）、そうではない死学をやめるべきこと（表⑥）、活学は書物によらず自らの体験によって身につけた学問であること、実際の業務のなかに学問もあること、知行合一であること（表⑧・⑩・⑪）、というように、学校もしくは書物だけでの勉強を批判し、それ以外の場所（自然環境や労働環境など）における経験知というべきものを重視する。表のうち、大隈重信（一八三八～一九二二年）による「活学問説は大間違ひ」との文言が見える論説（表⑦）は、一見すると活学批判のようだがそうではなく、学生の就職難・生活難にかこつけて主張される活学を批判するのであり、当世に主張される活学は「青年の勇気が足りない、熱心が足りない、意気を欠いて居ることの表白」[56]であるとの見方を示す。活学問云々ではなく、活きた人物か死んだ人物かの違いが問題だとの主張は、幕末維新の頃には尊皇派の志士として活動した大隈らしい叱咤とも言える。以上は大づかみではあるが、国語辞典の単語としては立項されずとも、明治の中後期頃より少なからぬ人々のあいだで活学（活学問）が口にされていた様子が浮かび上がってくるだろう。

さて時期が前後したが、一八九八年には井上円了が

『教育的世界観及人生観』（表②）と題した著作を刊行している。この著作は円了の「平素小学教育に従事せる者に対する意見」として、それ以前よりの講演などをまとめたもので、内容は当時の教育家の社会的地位の低さを遺憾とし、「教育の業務は実に天職にして天幸を享有[57]」することを主張したものとなる。円了は一八八七年には現在の東洋大学の前身となる私塾「哲学館」を創立したように自身が教育家だが、同書は教育家の地位と待遇、小学教育の重要性から始まり、自然科学や哲学などの知見をいかしながら教育および教育家を論じていく。そのなかに「活学活書」の節が設けられるが、ここでの議論は、先に概観してきた活学の議論をほぼ包括するためすこし詳しくみておこう。まず、円了の言葉をいくつかに分けて引用する[58]。

天地は我人の学校にして万物は我人の教師なることを開示せり、故に此天地此万物は自然に具備せる無限の学問、無限の書籍と謂ふべし、

諸君の従事せる学校は死物にして此自然の学校は活物なり、諸君の研究せる学問は死学にして此自然の学問は活学なり、諸君の愛読せる書籍は死書にして此自然の書籍は活書なり、斯る活学活書は活眼を有するものにあらざれば知るべからず読むべからず、

然るに諸君が自然の活学活書あるを知らざるは死学死書に心を奪はれたるに因るのみ、猶ほ維新以後我邦人が西洋の文物に心を奪はれたる為に自国の長所を忘れたるが如し、

若し諸君が其心を一転して人間的教育、人間的学校の外に別に教育学校を求めんと欲せば忽ち活学活書の存するを知るべし、

ここで述べられる自然は「日月星辰も山川草木も鳥獣魚虫も皆教育となりて[59]」とのように、人為の及ばない自然的環境のことを指すが、それとの対比において、人為としての教育（学校教育）や学問・書物は、死物や死学・死書と捉えられる。ただしその学校教育は否定されるものではなく、「唯之（自然―引用者註）を取捨し之を適用する丈は人為にして其他は皆自然なり、故に自然を離れて人為なしと謂ふて可なり」、「学校教育は自然的の教育を縮写して人間に示したるが如し」と認識され、そのなかで教育家は「自然教育の写真師若くは支店長と

称して可なり[60]」と位置づけられる。つまり、円了による「活」の字が冠せられる営みとは、常に自然的な環境との関係で把捉される限りにおいてであり、自然から離れた瞬間に「死」に至るものだと言えよう。そのため活眼とは、自然との関係を視野に入れたままに物事を捉える視線のことだと解釈できる。

このように「活」の字を盛んに用いる論者は、管見の限り円了に限られるとも思われるが[61]、その様子は晩年にまとめられた『奮闘哲学』（一九一七年・表⑨）のなかでも変わらない。その「活書と活学」の節では、学者が実際や実用を忘れて省みなくなるときは国の衰亡を招くこと、その予防の任は哲学者にあること、学者は実用に心を注ぐべきとし、時弊を矯正するためには活眼をもって活書を読み活学を修めよと、言わば「活」主義を掲げる。

> 活眼、活識、活書、活学、活用は皆連続せる関係を有し、一を挙ぐれば他は相伴うて起るから、今日の死眼死識死書死学死用を医治するは、活の一薬に限ると余は断言して居る、此方針を取りて活学問、活仏教、活教育を唱へ、之を教外別伝の哲学と名（なづ）けて置く、吾道一以貫之、曰活而已の主義である、国を富まし家を興すの道は此外にないと信ず[62]、

活学についてまとまった議論を展開した円了は、彼自身が「活学者」であったと後に追悼されるが[63]、そのロジックやレトリックも含めた活学の主張は、必ずしも直接的な関係にはないものの、後の国士舘にも共有されていると考えられる。先にみた『教育的世界観及人生観』のなかに、死学死書に心を奪われた状態を西洋の文物に心を奪われているとの喩えがみられたが、それが国士舘では喩えの域に留まらず、一つの動機として活学の主張に組み込まれていた点（西洋の猿真似を批判する点）は興味深い。その他にも、以下の諸点で彼我の主張・認識は同期する。すなわち、

①円了は教育を「天職」とも「天幸」とも述べていたが、国士舘同人においても「教育家諸君は、教育こそは天の人類に附与し得る最高の職務たるを知覚せざるか」、「諸君教育家は唯我独尊の地位にある者なり、天の美禄を食むもの也、人禄意とするに足らず、境遇憂ふるに足らず[64]」と、教育を天職という自然との関係でみなす論調。

②同時代の教育を「形式のみに走り器械的方法を以て児童の精神を抑圧せんとするものあり、是の如きは

決して精神的人物を養成する道にあらず」[65]と捉える円了と、国士舘同人による同時代教育の形式主義的傾向への批判。

③円了が人間教育の要点を「書籍の講釈や文字の説明のみを以てよくす可からず、必ず感化の力に依るを要するなり」として、その感化は「教師の心を以て生徒の心を動かす一種の以心伝心法なり」[66]とするのに対し、国士舘同人においても「活学の道場」のあり方は教え・学ぶものがともに膝を交えたもので、その関係は「心学なり、活学なり、信念の交感なり」[67]と表現されていたこと。

④円了の教育目標として、「児童の精神を感発して国民的人物を養成すること［中略］日本国民としては其教育の神髄たる忠孝二道を全うして永く国体を維持する赤心を発揮せしめざるべからず」[68]と、国家有用の人材ないしは国事に貢献する国民の教育が目指されていたのに対し、国士舘同人においても文字通りの「国士」の養成を目的としていたこと。[69]

の四点である。

右にみたように、同時代の教育や、教育とはどのようなものであるかといった認識と、その上でどのような教育が目指されるべきかといった諸点につき、円了と国士舘は相似形をなしている。これを世代論的にみれば、円了が教育家に養成を呼びかけた「国民的人物」や、「国体を維持する赤心を発揮せしめざるべからず」との期待をかけた子どもないしは若者世代に、柴田徳次郎（一八九〇～一九七三年）をはじめとする国士舘同人は位置している（例えば、円了の『教育的世界観及人生観』が刊行された年は、柴田が八歳の頃にあたる）。その世代差を考慮するとき、「円了の子ども」とすら呼びたくなるような象徴的な系譜ともいえる関係を、そこに見出すことができるだろうか。しかし仮に系譜関係を見出すにせよ、それでは国士舘の活学が円了の活学の引き写しかといえば、そうだとばかりは言えない。そこには国士舘（ひいてはその前身であり、一九一三年に結成された「青年大民団」）が活動した時代との関わりが抜きがたく存在する分だけ、円了の活学とは異なった表出の仕方をすることとなる。その表出を、本稿では生命主義的な文脈を含む、郊外地での学びと生活が相即した共同生活の実践というあり方に見出すのである。つまり私塾「国士館」における教育とは、明治期よりの活学の系譜と、大正生命主義的な時代思潮との交点に生起した実践であったと考えられよう。

まとめにかえて

本稿では、私塾「国士館」の設立が近代学校史・教育史の上でどのような文脈に位置するのかを考えるため、大きく三つの方向から検討してきた。一つは、明治期よりの学校制度のなかでの私塾の扱い、二つは、大正新教育と呼ばれる教育思潮や大正生命主義といった時代思潮との関係、そして三つめは、国士舘のグランド・コンセプトとでも言うべき活学と、その前史・系譜関係の考察との、以上の三点である。これらの考察は大づかみであるため、今後は個々の論点（特に第二・第三の点）につき、より精度を高めた検証を加える必要はあるが、ここで一応のまとめを試みよう。

私塾としての国士舘は、一九二五（大正一四）年には文部省令下の中学校（正則）として認可されていくことから、正確にはおよそ八年のあいだだけ存在したものではある。ただし、設立の理念として掲げる活学とは、ここまでみてきたように同時代の教育、具体的には文部省管轄の学校教育への批判を土台としていただけに、この理念を掲げる限りは文部省令下には属さない教育の形、すなわち私塾の形態を採ることは論理的にも必然であった。この活学とはある種の精神的な態度のことでもあったから、後々には正則中学や専門学校化するにせよ、その教育が活学の文脈に掉さす限りは、その私塾性、在野性が失われることはないとも言えよう。その精神を私塾経営に引きつけて言い換えれば、「私学を死学とさせないための活学」とさえ言いうる。一節でみてきたように時代を経るごとに国家と私塾の関係が抑圧さを増すなか、それでもあえて私塾を立ち上げていく上では、活学というコンセプトは、一方で常に現実批判を担保しうる概念という意味で、便利な、柔軟性に富むものであったとも考えられる。

三つの方向性のうち第二・第三の視点からは、国士舘をみていくうえでは明治期以来の活学の系譜が一つ、大正期の新教育または生命主義的な系譜が一つと、少なくともこの二点をあわせみることができるのではないか、という仮説を提出した。活学とは、この二点を繋ぐキーワードでもある。この点を違う角度から捉えれば、明治期からの活学の系譜に属する分だけ、主に欧米の哲学や教育思想との影響関係を軸とする大正新教育に関する研究領域では、国士舘のような実践が視野に収められることはなかったとも考えられよう。ただしその教育実践の理念や実際の運営、また同時代性を考慮するとき、新教

育と生命主義の関連や、その生命主義と活学の関連も視野に収めたうえでの、学びと生活が相即する大正期の教育実践という枠組みからのアプローチも必要かと思われる。そのパースペクティブより捉えたときは、生命主義の思潮を背景とした新しき村のような実践が、白樺派的な国家を超越したアナーキーな実践であったことの対極に、国家との結びつきの下で構想・実践された国士舘の人間教育（＝国士の養成）が位置づけられることも見えてくるだろう。このことは、同じく生命主義的な思潮を背景とする共同体志向の実践のなかでも、その先の方向性にはいくつかの経路があるということでもある。少なくとも大正期における私塾教育の形態をみる上では、同時代の新教育や玉川学園のような事例もあわせつつ、国士舘の営みを検証する意義は大きいと言えよう。

（付記）

本稿の成稿に際しましては、国士舘史資料室・熊本好宏氏のご推挽によります。記して感謝申し上げます。

また本稿は、二松学舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の成果を一部含むこともお断り致します。

註

（1）ここでの私塾とは、（後に本文でも触れるが）行政への届け出をしているのみで、文部省令下の正式な学校の要件を満たすものではない。以下、私塾の語はこの意味で用いる。

（2）玉川学園ではまず玉川中学校が設立認可を受け、一九三九（昭和一四）年には「玉川塾」も正式に認可される。ここでの認可も届け出の意味と考えられる。

（3）神立春樹「「二松學舍明治十年設立」の歴史的意義」（『三島中洲研究』三、二松学舎大学二一世紀ＣＯＥプログラム事務局、二〇〇八年三月）四頁。

（4）一八八三（明治一六）年に文部省による調査が全国各府県に通達され、その報告として一八九〇～九二年にかけて刊行された『日本教育史資料』には、各府県に存在した（する）寺子屋・私塾が掲載される。そのうち、例えば東京市内だけでも計六一一（私塾一二三、寺子屋四八八）が報告されている（巻八・上）。明治に入ってもなお経営を続けていた各機関の教授内容も、私塾では和・漢学、漢詩、筆道、珠算、和算、数学、漢医、西洋医学などが、寺子屋では読書、算術、漢学、詩歌など、

多様な教授が行われていたことがわかる。

(5)私塾と教育制度との関係については、吾妻重二「近代学制のなかの泊園書院」(吾妻重二編『文化交渉学のパースペクティブ』関西大学出版部、二〇一六年)が、大阪市内で長期間にわたり私塾教育を行った泊園書院と教育制度との関係を詳しく考察しており参考となる。なお、明治以降の教育制度の概要については、日本近代教育史事典編集委員会編『日本近代教育史事典』(平凡社、一九七一年)の各項目が詳しい。以下の記述は、吾妻論文および同事典に多くを依拠している。煩雑となるため直接の引用以外は参照頁数を省略した。

(6)『法令全書 明治三年』(内閣官報局、一八八七年)七〇九頁。また同じく一二月二四日付の「第九百八十八(府藩県)」では、「諸技芸師家私塾之儀ニ付、別紙両通之通リ御達相成候條、其旨相心得、今後管轄中ノ者共各地方師家へ入塾之節ハ、其為人ヲ糺シ添書可差遣候事。(別紙ハ第九百八十六第九百八十七ニ同シ)」との通達がみられる。一八七〇(明治三)年の太政官布告は、この三条がワンセットとなる。なお法令関係の原文に句読点はないが、引用に際しては旧字体は新字体に、また読みやすさを考慮して句読点を補った。以下の引用もこれに準ずる。

(7)『法令全書 明治五年』(内閣官報局、一八八九年)一一二四頁。なおこれ以降も三条の付則がみられるが、本論とは直接関わらないため省略する。但書きでは「府県学」以外はすべて私学とすること、しかし一家または二家までの子弟を教える場合は「家塾」として私学と区別することが記されるが、この「家塾」や「私塾」といった区別については「学制」においてさらに改訂されていく。この点については註(10)を参照。

(8)註(5)吾妻論文、二八二頁。

(9)文部省『学制百年史 資料編』(帝国地方行政学会、一九七二年)一五頁。

(10)また、学制は私学・私塾と家塾の違いをも区別する。第三二章では、「私宅ニアリテ中学ノ教科ヲ教ルモノ、教師タルヘキ証書ヲ得ルモノハ中学私塾ト称スヘシ、其免状ナキモノハ之ヲ家塾トス」(註(9)、一五頁)と、教師に免状がある場合は私塾とし、ない場合を家塾と規定する。

(11)註(9)、一四頁。

(12)正則中学は年齢によって下等と上等に分けられ、下

等中学では国語学や数学、習字、外国語学、修身学などの計一六科目が、上等中学では下等の教科と重複するもののほか、経済学や動植地質鉱山学などが加えられた計一五科目が必要とされた（註(9)、一四頁）。また後の「中学校令」（一八八六年四月）の二カ月後に公布された「尋常中学校ノ学科及其程度」では、第一条で尋常中学校の学科を一四（倫理、国語、漢文、第一・第二外国語、地理、歴史、数学など。選択を含めれば計一六）に定めている（註(9)、一二八頁）。

(13)この変則中学には洋学や医学のみではなく、当時の私塾で圧倒的多数を占めていた漢学塾も含まれる。現在まで存続する学校の一例として、一八七七（明治一〇）年創立の二松学舎が挙げられる。『二松学舎百年史』（二松学舎、一九七七年）を参照。

(14)註(9)、二九頁。

(15)註(9)、三一頁。

(16)『日本帝国文部省年報　第八』（文部省、一八八二年）二四頁。

(17)註(9)、一二六頁。

(18)註(9)、一二八頁。

(19)溝口貞彦「創立期の二松学舎と明治時代の教育制度」（戸川芳郎編『三島中洲の学芸とその生涯』雄山閣出版、一九九九年）三三〇～三三二頁参照。また同論文は、学校令前後までの教育制度の変遷が詳細に論じられており、参考となる。

(20)註(5)吾妻論文、二九二頁。

(21)註(9)、九三頁。

(22)註(5)吾妻論文、二九三頁。および、土方苑子編『各種学校の歴史的研究』（東京大学出版会、二〇〇八年）六一頁。

(23)註(9)、三五頁。なお、同訓令の正式名称は「一般ノ教育ヲシテ宗教外ニ特立セシムルノ件」。

(24)事例としてキリスト教関連のみをみると、立教学院は中学校令にもとづく立教中学校へ改組し、のちには専門学校令にもとづく私立大学となる。フェリス女学校や青山学院、東北学院などは各種学校を選ぶものの、のちにはそれぞれ専門学校令にもとづく正規の学校となる。各種学校を選択した各校は、上級学校への進学資格や懲役猶予の恩典などを受けられないこともあり、学生数の減少に見舞われた結果、それぞれが正規の学校となる傾向も認められる。

(25)教育令下における各種学校はその多くが漢学塾で

あったと指摘されるが、それら各種学校（私塾）の大半も、「近代学校が整備された一九一〇年代頃までにその施設・機能を終焉させたものと思われる」（神辺靖光「幕末維新期における漢学塾―漢学者の教育活動―」生馬寛信編『幕末維新期漢学塾の研究』渓水社、二〇〇三年、三二頁）と言われる。その動向は、註（4）に挙げた『日本教育史資料』に掲載された全国の私塾・寺子屋の閉鎖状況をみても容易にうかがうことができよう。

(26)例えば、一八八六（明治一九）年に創立されたキリスト教系の東北学院は、一九〇四年には専門学校として認可されている。また註(13)で触れた二松学舎は長らく各種学校の位置にあったが、一九二八年には専門学校令にもとづく正規の学校に改組された。いずれも、私塾（各種学校）から専門学校へと改組された事例である。

(27)橋本美保「大正新教育・再訪」（橋本美保・田中智志編『大正新教育の思想―生命の躍動―』東信堂、二〇一五年）一三頁。

(28)その動向を象徴するものとして、一九二一（大正一〇）年八月に東京高等師範学校の講堂で行われた「八大教育主張」の講演会がしばしば取り上げられる。小原國芳ほか『八大教育主張』（玉川大学出版部、一九七六年、復刻版）、および註(27)に所収の各論文などを参照。

(29)引用文は「宣言　活学を講ず」からではなく、それと同趣旨の記述がよりまとまった形で記載される「国士館設立趣旨」（一九一八年四月）からとした。なお引用は、『国士舘百年史　史料編上』（学校法人国士舘、二〇一五年）八七頁より。

(30)同前。

(31)「宣言　活学を講ず」（『大民』第二巻第一一号、一九一七年一一月）。前掲『国士舘百年史　史料編上』、八四頁所収。

(32)「新館に移りて」（『大民』第五巻第一号、一九一九年一〇月）。前掲『国士舘百年史　史料編上』、一四一頁所収。

(33)『中学世界』二三巻七号（一九二〇年七月）、『東京朝日新聞』朝刊（一九二一年四月一七日）。前掲『国士舘百年史　史料編上』、一八七～一九〇頁所収。

(34)「是れ活学の大道場」（『大民』第五巻第一号、一九一九年一〇月）。前掲『国士舘百年史　史料編上』、九六頁所収。

(35)以下の引用は、それぞれ、小原國芳『玉川塾の教育』(玉川大学出版部、一九七六年)二七、二九頁より。原著刊行は一九四七年。

(36)国士舘においても「文字と文章に関する業務は青年学生の活計法としては一番好適であらう」と、印刷・出版事業は重視されていた。「国士館附帯事業の計画」(『大民』第五巻第一号、一九一九年一〇月)。前掲『国士舘百年史 史料編上』、一四三頁所収。

(37)「新しき村」については、大津山国夫『武者小路実篤研究―実篤と新しき村―』(明治書院、一九九七年)、同『武者小路実篤、新しき村の生誕』(武蔵野書房、二〇〇八年)に詳しく、本稿の記述もこれらに依拠している。煩雑となるため直接の引用以外は参照頁数を省略した。なお、「新しき村」は一九三九(昭和一四)年に所在地に発電所が建設されるため埼玉県入間郡毛呂山町へと大部分が移転し、同地で現在も共同生活を続けている(宮崎の村も「日向新しき村」として継続)。

(38)入村して間もなくの内紛や、武者小路自身の離村(村外会員化)、さらに入植地における耕作収入の悪さなど、自活していく上では多くの困難があった。ようやく自活が達成されるのは、一九五八(昭和三三)年に養鶏収入を中心として利益を上げることができるようになってからだという。

(39)註(37)大津山『武者小路実篤研究』、八八頁。

(40)『新しき村』(一九二一年一月)、註(37)大津山『武者小路実篤、新しき村の生誕』、二二頁。

(41)武者小路実篤「新しき村の理想と現實」(『世界仏教』四巻六号、一九四九年六月)五~六頁。

(42)鈴木貞美『「生命」で読む日本近代―大正生命主義の誕生と展開―』(日本放送出版協会、一九九六年)一六一~一六二頁。

(43)「大正生命主義」については、註(42)のほか、鈴木貞美『大正生命主義と現代』(河出書房新社、一九九五年)がまとまった研究書として参照できる。本稿の記述もこれらに依拠するが、煩雑となるため直接の引用以外は参照頁数を省略した。

(44)註(43)、三頁。

(45)註(42)、三~一三頁。

(46)及川平治や千葉命吉といった「八大教育主張」の講演会登壇者たちの著作では、しばしば生命の語が用いられる。橋本美保「及川平治の動的教育論―生命と生活」、木下慎「千葉命吉の教育思想―「生

の哲学」の系譜」（ともに註(27)所収）を参照。

(47)「大正生命主義という概念はかなり大きな括りであり、その括りは基本的に生命を理念化しているように見える。たしかに大正新教育の論者の多くが「生命」を理念化している。［中略］しかし、彼らのいう「生命」は、規範としての理念だろうか、その「生命」は、理念として語られているが、すでに在るところの不可視の前提、いわば存在論的事実ではないだろうか」（田中智志「思想としての大正新教育へ―呼応し躍動するアガペー」、註(27)、五二九～五三〇頁）との指摘からは、少なくともそれが積極的に論じられるテーマではないことが見てとれよう。

(48)註(27)、二九頁。

(49)註(42)、三五頁。

(50)同前。

(51)「国家の大本は文教に在り」、「是れ活学の大道場」、「国士舘附帯事業の計画」（いずれも『大民』第五巻第一号、一九一九年一〇月）、「国士舘移設趣旨」（一九一八年八月）など。いずれも、前掲『国士舘百年史 史料編上』所収。

(52)註(31)、前掲『国士舘百年史 史料編上』、八三～八四頁所収。

(53)「国家の大本は文教に在り」（『大民』第五巻第一号、一九一九年一〇月）、前掲『国士舘百年史 史料編上』、九二頁所収。

(54)語釈は、「書物などによるものではなく、実際に見聞きしたり、観察したりして身につける学問」と記される。基本的な意味は本稿で扱う活学と重なるものの、ここには生命主義的な文脈は読み取れない。『日本国語大辞典（第二版）』第三巻（小学館、二〇〇一年）七八〇頁。

(55)三宅空々「活学問」（『穎才新誌』九七七号、一八九六年五月）三頁。

(56)大隈重信「近時世に云ふ活学問説は大間違ひ 活人物と死人物如何」（『商工世界太平洋』九巻二一号、一九一〇年一〇月）一三頁。

(57)井上円了『教育的世界観及人生観』（金港堂、一八九八年）一頁。

(58)以下の引用は、それぞれ、同前、三六～三七頁。

(59)同前、九頁。

(60)同前、三九～四〇頁。

(61)ちなみに、円了が「活」の字を用いた早い事例は『仏教活論序論』（哲学書院、一八八七年）かと思

われる。これは仏教新聞の『明教新誌』に連載されたものをまとめたものだが、活学の語はまだ見えていない。ただし、「余夙ニ仏教ノ世間ニ振ハサルヲ慨シ自ラ其再興ヲ任シテ独力実究スル」、「余カ仏教ヲ助ケテ耶蘇教ヲ排スルハ」（一～二頁）と述べるように、明治初年の神仏判然令も含め、西洋化のなかで社会的に抑圧されがちであった仏教の復権を企図した文脈をみれば、後年に主張される一連の「活」主義の嚆矢と言い得るだろう。また円了における「活」の意義は、彼が戊辰戦争時に旧幕方として敗戦の憂き目にあった長岡藩出身である点にも、来歴的な遠因がみられるかもしれない。

(62) 井上円了『奮闘哲学』（東亜堂書房、一九一七年）三五～三六頁。

(63) 佐崎重暉「活学者井上円了先生」（『東洋哲学』第二六篇第八号、一九一九年八月）。

(64) 花田大助「教育家の猛省を促す」（『大民』第二巻第六号、一九一七年六月）。前掲『国士舘百年史 史料編上』、一四～一五頁所収。

(65) 註(57)、六〇頁。

(66) 註(57)、六一～六二頁。

(67) 註(31)、前掲『国士舘百年史 史料編上』、八四～八五頁所収。

(68) 註(57)、六三頁。

(69) この「国士」の養成は、本文で取り上げた玉川学園においても共有される人間教育であった。玉川学園編『東久邇宮様をお迎へして』（玉川学園報国団、一九四一年）には、「玉川塾の教育目標」として以下が掲げられている。「労作を基底とする塾生活によりて明治以来の偏知教育よりして、利己主義と現実偏重に堕せし多くの弊を救ひ、人間本来の性にかなつた教育に建て直し、真の皇国臣民を錬成したいのが念願であります」。また「新国士の養成」として、「君国への没我的尽忠、全体的統制、社会的訓練、国際的理解等の国民的条件を体得し［中略］松陰先生の如く燃ゆる愛国心と広く世界に知識を求むる好学心とを兼備し、国家をかつぎ、アジアを背負ひ、世界文化に尽し得る新国士を養成したいものです」（以上、七七頁）。ここからは、明治以来の偏向教育の克服や、吉田松陰にモデルを求めるロジックなども含め、新教育の旗手でもあった小原の玉川学園においても、国士舘とおおよそ同じ地平での国士養成（人間教育）

が共有されていたことがわかる。本稿は新教育の研究史や玉川学園、小原國芳の教育について検証するものではないが、大正新教育という教育運動が孕んだ国家主義的なベクトルについても、引き続き検証する必要がある。参照できる研究として、西尾達雄・北海道大学『日本植民地・占領地教科書と「新教育」に関する総合的研究―学校教育と社会教育から』（科学研究費補助金〈基盤研究Ｂ・一般〉研究成果報告書、平成二二～二四年度、二〇一三年）が挙げられる。

国士舘史関係資料の翻刻ならびに補註　第九巻

凡例

1　ここには、国士舘史編纂のために調査収集した資料のうちから、翻刻・校訂と補註が終了し、重要度が高いものを順次紹介する。

2　資料名の下に（　）で原所蔵を略記した。

3　誤記については（　）で訂正した。

4　資料の翻刻・校訂は、国士舘史資料室収蔵の原本によった。

昭和三七年九月　国士舘大学工学部機械工学科・電気工学科設置認可申請書［抄］（総務部保管資料）

（表紙）

「昭和三十七年九月

国士舘大学工学部*機械工学科
電気工学科　設置認可申請書

学校法人　国　士　舘」

国士舘大学工学部　機械工学科
電気工学科　設置認可申請書

このたび国士舘大学工学部　機械工学科
電気工学科　を設置したいので、学校教育法第四条の規定により認可くださるよう別紙書類を添えて申請します。

昭和三十七年九月三十日

設置者

学校法人国士舘理事長　柴田徳次郎(徳)

文部大臣　荒木万寿夫殿

書類目次

一、設置要綱（項）……五
二、学則……一九
三、学部及び学科別学科目又は講座に関する書類……六七
四、履修方法及び卒業の要件に関する書類……七七
五、職員組織に関する書類……九一
六、校地等に関する書類（図面添付）……八八七
七、校舎等の建物に関する書類（図面添付）……八九一
八、設備概要に関する書類……九〇九
九、設置者に関する書類……九七一
十、経費及び維持方法を記載した書類……一、〇九五
十一、学校法人が現に設置している学校の現況について……一、三四七
十二、将来の計画を記載した書類……一、三九一

（内表紙）
「一、設置要項」

設置要項

事項	記入欄	備考
設置者	学校法人　国士舘理事長　柴田徳次郎㊞	
目的または事由	本学は、教育基本法及び学校教育法に則り、大学として広く知識を授けるとともに、工学に関する高等の理論とその応用を教授並に攻究し、社会人としての良識と工学専門技術に対する適正な理論と判断を有する健康にして人格高き国家社会の有用なる指導的人物を育成し、以って世界文化の進展と吾が産業界・実業界・教育界等に寄与貢献することを目的とする。	
名称	国士舘大学工学部　機械工学科 電気工学科	
位置	東京都世田谷区世田谷一丁目一、〇〇六番地	

事項	記入欄				備考
学部・学科等の名称ならびに修業年限・学士号等および学生定員	学部・学科等の名称	修業年限	学士号等	入学定員	収容定員	
	工学部 機械工学科 電気工学科	四年 四年	工学士 工学士	四〇 四〇	一六〇 一六〇	
	（既設）	〔略　以下既設学部〕				

授業科目の概要	学部・学科等の名称		授業科目	単位数 必修	単位数 選択	単位数 自由
	工学部	機械工学科	一般教育科目			
	〃	電気工学科	人文科学系			
			哲学		四	
			倫理学		四	
			歴史		四	
			地理		四	
			文学		四	
			社会科学系			
			法学（憲法を含む）	四		
			政治学		四	
			経済学		四	
			社会学		四	
			心理学		四	
			自然科学系			
			数学Ⅰ（代数・幾何）	四		
			数学Ⅱ（積分・微分）			

	物理学（講義・実験）	四	
	化学（〃）		四
	地学		四
	生物学		四
	統計学		四
	外国語科目		
	英語	八	
	独逸語	四	四
	保健体育科目		
	講義	二	
	実技	二	
機械工学科	専門教育科目		
	応用数学	八	
	材料力学	六	
	材料試験法		二
	塑性学		二
	工業熱力学	六	
	蒸気動力		四

内燃機関		四	
水力学	四		
水力機械		二	
流体力学		二	
機械製作法	八		塑性加工、鋳造、初削、熔接
工作機械		二	
機械力学	四		
機構学	四		
機械設計	六		
図学	二		
製図	四		
機械実験	四		
工作実習	二		
卒業計画及び論文	六		
金属材料学		八	
電気工学		四	
電気工学実験		一	
振動学		二	

			自動制御		二	
			空気機械		二	
			冷凍及び空気調和		二	
			車輌工学		二	
			自動車工学		二	
			繊維工学		二	
			生産工学		二	
			化学工学		四	
			ガスタービン及び航空原動機		二	
			工業計測		四	
		電気工学科	専門教育科目			
			数学	八		
			電気磁気学	四		
			電気物性		二	
			交流理論	四		
			過度現象論		二	
			電気計測	四		

自動制御		二	
発電工学	四		
送配電工学		四	
高電圧工学		二	
電気法規及び施設管理		二	
電気機械Ⅰ	四		
仝　右　Ⅱ	四		
図学	二		
製図	二		
電子工学		四	
通信工学		四	
真空管回路		四	
電気工学実験Ⅰ	四		
仝　右　Ⅱ	四		
仝　右　Ⅲ	一		
機械工学実験		二	
論文	六		

（工作実習を含む）

学部学科等の名称		
授業科目の種類		
職名	教授	専任
		兼任
	助教授	専任
		兼任
	講師	専任
		兼任
	計	専任
		兼任
	助手	

電気材料	四
機械工学	四
電気化学	二
原動機	四
照明工学	二
電熱工学	二
電気鉄道	二
電動機応用	二
電力応用	二
伝送回路	二
電波伝播及びアンテナ	二
有線通信機器	二
無線通信機器	二

教員組織の概要						
				一般教育科目		
専門教育科目	計	保健体育科目	外国語科目	自然科学系	社会科学系	人文科学系
16 (6)	(30)	(3)	(6)	(4)	(12)	(5)
( )	(5)	( )	( )	( )	( )	(5)
3 ( )	(5)	( )	(2)	( )	( )	(3)
( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
14 (11)	(14)	( )	(3)	(10)	(1)	( )
28 ( )	(7)	( )	(1)	(2)	(2)	(2)
( )	(8)	(3)	(11)	(14)	(13)	(8)
( )	(7)	( )	(1)	(2)	(2)	(7)
2 (8)	( )	( )	( )	( )	( )	( )

事項	記入欄			備考
	完成時		増設に伴う部分	
校地	専用	三三、六四〇坪三五	専用 三、〇四九坪	
	共用	七、九二三坪	共用 一、〇〇〇坪	
	計	三二、五六三坪三五	計 四、〇四九坪	

校舎等建物			
	専用	共用	計
完成時	五七七一坪〇八(二、四三五坪三〇)	一九二九坪一五(六六九坪六三)	七七〇〇坪二三(三、〇九四坪八三)
増設に伴う部分	二、四三五坪三〇(一、三四〇坪三〇)	六六九坪六三(三五四坪六三)	三、〇九四坪八三(一、六九四坪八三)

設備					
区分		図書	学術雑誌	機械器具	標本
専用	完成時	五七、一二五冊(九、四七三冊)	四一八種(　種)	点(　点)	二一九点(　点)
	増設に伴う部分	九、四七三冊(五、一三三冊)	一八〇種(六〇種)	点(　点)	五五点(二〇点)
共用	完成時	一八、五七一冊(一、三五三冊)	七〇種(　種)	点(　点)	七五五点(　点)
	増設に伴う部分	一、三五三冊(五七七冊)	種(　種)	点(　点)	六四点(　点)
計	完成時	七五、四一六冊(一〇、八二六冊)	四八八種(　種)	点(　点)	八七四点(　点)
	増設に伴う部分	一〇、八二六冊(五、七〇〇冊)	一八〇種(六〇種)	点(　点)	二一九点(二〇点)

附属施設の概要

一、附属図書館
二、体育館
三、水泳プール（五〇米九コース）
四、柔道場
五、剣道場
六、野球場
七、講　堂

維持経営の方法概要	本大学の授業料・入学金・入学検定料・諸証明手数料・体育館・プール・運動場使用料等の外、併設学校（短期大学・高等学校・中学校等）の諸収入金と、資産より生ずる果実及び維持員会の寄附金等を以って維持経営する。		
開設の時期	昭和三十八年四月一日		
開設年次	第一年次		
現に設置している学校の概要	一、国士舘大学政経学部　政治学科 経済学科 経営学科 二、国士舘大学体育学部　体育学科 三、国士舘短期大学　国文科 同　経済課（第二部） 四、国士舘高等学校　普通科 同　商業科（定時制） 五、国士舘中学校		

〔略　二、学則～十一、学校法人が現に設置している学校の現況について〕

（内表紙）

「十二、将来の計画を記載した書類」

将来の計画

一、学部および学科組織に関すること

(1) 国士館創立講(後)四十五周年の本年（昭和三十七年）より、五十五周年の昭和四十七年に至る十年計画記念事業の一端として茲に工学部を新設逐次学科増設したい。

(イ) 学問、技術と敬神愛国、愛業心と鉄骨の身体を涵養した大学、高校、中学の工業教員養成。

(ロ) 仝じく中堅的、模範的産業人養成。

(ハ) 昭和三十八年度開講予定学科（機械工学科、電気工学科）

(2) 将来施設の充実と共に政経学部第二部を増設し、勤労学徒に対し教育の充実徹底を期している。

(3) 将来、法学部（政治学科、法律学科等）増設し、占領法制改廃の法的研究、再興日本の教員養成を図りたい。

(4) 将来、文理学部、教育学部を増設し、現在の短期大学国文科を昇格して国語国文科とし、これに歴史、地理学科等を併置し、修身、歴史、地理、国語等の見識信念ある教師養成、更に理数関係学科を加えて斯界教員の育成を図りたい。

(5) 尚、農学部、科学的農業の研究、斯道の教員養成

(6) 薬学部、未知の新薬の科学的研究、教員養成　等々

(7) 更に将来、大学院を各学部に開設し、思想堅固な青年研究者を養成し、信念ある大学教授を世に送

り、学界に貢献せんことを期している。

二、学科目、教員等に関すること

既設の政経学部、体育学部共に現在の学科目は必要に応じ適宜拡充し、これに要する教員も逐次、補充増員して教育の万全を図りたい。

三、校地、校舎等に関すること

校地については将来隣接地を買収し、建物、敷地、運動場の拡張を図る予定である。更に郊外清浄の地、天与の地を数十万坪購入予定している。

四、図書、機械器具、標本等に関すること

これらについては毎年予算を計上し随時、補充と整備に努め、更に教育の完遂を期し、教材、実験、諸施設の充実を期している　等々。

＊　国士舘大学工学部　一九六三（昭和三八）年四月、国士舘大学初めての理系学部として工学部機械

工学科・電気工学科（入学定員各四〇人）が設置された。前年に打ち出されていた、文理を兼ね備えた一八教育機関からなる総合大学構想の一環として設置されたものであり、本資料の「将来の計画」からも総合大学化を目指していたことが分かる。

工学部には、一九六四年四月、土木工学科・建築学科（入学定員各四〇人）が増設された。

評伝

「泳道」
―初めて津軽海峡を泳いで渡った男・中島正一譚―

宇田 快（やすし）

1969年頃　中島正一
（『体育学部第10回卒業アルバム』1969年3月）

一　津軽海峡

はるかな昔から津軽海峡は、ひとたび怒ればすべてを呑み込み、人々の往来を阻む魔の潮流海域と呼ばれていた。津軽半島では天に巻き上がる飛沫の姿を、龍飛崎と名付けて怖れた。また北海道側では、白波蹴立てて荒れ狂う姿に神を見いだし、白神岬と呼んで畏れてきた。

いまここに、津軽海峡にかかわる二つの数字が並んでいる。「一〇分」と「一〇時間」という似て非なるこの数字に共通するキーワードは、海峡通過の所要時間である。

「一〇分」とは、青函トンネル津軽海峡部分の距離二三・三キロメートルを、最新鋭の新幹線が通過する時間である。ただ、トンネル区間の全長五三・八五キロメートルが一般路線との共用区間であるため、通過する列車の速度は約一四〇キロメートル／時に抑えられている。したがって海峡部分を通過する所要時間は、約一〇

分ということになっている。

一方の「一〇時間」というのは、一九六七（昭和四二）年八月二七日に海洋冒険者・中島正一が国士舘大学三年のときに、北海道の白神岬から青森県龍飛崎間の津軽海峡を泳いで横断した記録である。魔の海峡に真正面から立ち向かい、世界で初めて遠泳横断を成し遂げたこの所要時間こそが、中島の栄光の刻印だったのである。そしてそこには、幼いころから海峡横断を夢見ていた中島の、壮絶なドラマが刻み込まれていたのだった。

子供のころの中島にとって、唯一の遊び相手は海だった。北海道松前郡福島町の海は、いつも優しく少年を包んでくれていた。はるか沖に目をやると、海峡をはさんで望む青森県龍飛崎の陸影は、横臥する母龍のように優しく静かに中島少年を招き寄せていた。

> その町（福島町―引用者）からは、津軽海峡をへだてて青森の連山が見える。風がヤマセに変わる直前には、向こう岸の龍飛崎に家並みがはっきりと見えた。北海道の少年にとって、そこは憧れの「内地」である。[1]

そんな津軽半島に思いを馳せ、泳いでこの海峡を渡ることを、中島は子供のころから夢見ていたのである。

だが、福島町では油を敷いたように穏やかな海が、一皮むけば獰猛な牙を覆い隠していることも、少年は地元の漁師たちから言い聞かされていた。「ベタ凪で海面は穏やかそうだが、ここには一皮捲れば海流が暴れまわっているんだ。だから沖合に見える縞模様の筋までいっちゃならねえ。とくにあの黒い縞の筋には、恐ろしい龍が潜んでいる」と。

確かに、わずか一〇数キロの距離にある白神岬は、慣れ親しんだ海とはまるで異なる性格を見せていた。日本海から吹いてくる猛々しい北西の風に煽られた海面は、白い牙を剝き出しにして周囲を威嚇している。特に、この海の怖さを総身に擦り込まれてきたのは、江戸時代の松前藩の人々だった。

二〇一六年三月二六日、北海道福島町と青森県外ヶ浜町で津軽海峡を渡す「烽火（のろし）上げ」が、北海道新幹線の開業を記念して行われた。このイベントは江戸時代、松前藩の殿様が参勤交代の際に津軽海峡を渡る時の合図として烽火が使われたことに由来する。殿様を乗せた船が無事に津軽へ渡ると、烽火を焚いて松前側に報せ、海峡を挟んだ双方で君主の無事を祝ったのである。

当時の日本人にとって、津軽海峡を帆船で渡るのは非

常に困難なことであった。日本海側から猛烈に吹き込む偏東風を順風としたために、渡航が可能な日は年に数えるほどしかなかったからだ。渡航とは言っても、対岸の港を目指して航海するのでなく、帆船であることから行き先は文字どおりの風まかせ。複雑な潮の流れによって本土への渡航に失敗した船が、江差や亀田半島に逆戻りすることもあったようだ。津軽半島側も同様で、北海道側の何処かへ「漂着」できれば幸運な方で、渡航に失敗した船が東北地方に逆戻りしたり、運が悪ければ太平洋側に漂着したということもあったようである。したがって半島最北端の三厩（みんまや）港は、順風の日を待つ「風待ち」の旅人で賑わっていた。

結局、何の支障もなく順調な時でも、松前～江戸間の藩の参勤交代に要する日数は三〇日弱。海が時化（しけ）ていたり、春の降雨の多い時期ともなると、四〇日以上もかかったという。津軽海峡を渡るために順風を二週間も待ち、やっと出帆した記録もある[2]。この難所を乗り越えるべく、長い歳月をかけて、多くの「人間」と「自然」の戦いが見られたのである。

二　少年の夢

中島の生まれ育った地は、北海道松前郡福島町である。そう聞いて「あれっ」と思われた方は、かなりの相撲通に違いない。というのもこの町の出身として、第四一代横綱・千代の山雅信、第五八代横綱・千代の富士貢といった昭和の大横綱の名が連なっているのだ。

中島は、「私が小学生の頃、千代の山の全盛期であり、遊びも、楽しみも少なかった北海道の田舎町の少年にとって、千代の山は偉大で憧れの存在でした」と回想している[3]。

中島も中学・高校では相撲部に在籍し、相撲取りになろうと真剣に考えたひとりである。しかし彼の場合、相撲取りになるにはあまりにも体が小さく、角界の道を断念。同級生の岡部茂夫（千代の海）が出羽海部屋に入門するのを、指をくわえて見ているしかなかったという。

一方、中学生時代から運動神経が抜群だった千代の富士貢は、走り高跳び・三段跳びの陸上競技で、「オリンピック選手もいける」といわれるほどの活躍だった。中島は以下のように回想している。

大学に入った夏休み、先輩顔をして、中学校の相撲部に稽古に行ったら、今の千代の富士の秋元がいました。中学生と大学生である自分とでは、体力も技術も違いすぎ、文字通りち切っては投げでした。しかし、その中で千代の富士は少し違っていました。すぐに転ばずに足腰が柔かく、粘り強かったのです。[4]

体格が及ばずに相撲取りをあきらめた中島とは対照的に、素質にも、体格的にも恵まれていながら相撲が大嫌いだった千代の富士が、皮肉にも同郷の横綱・千代の山の九重部屋に入門することとなったのだ。

数年ぶりに二人が出会ったのは、浅草にある九重部屋に中島が同級生を訪ねた時のことだった。そこで稽古をしていた千代の富士の姿に、中島は驚いた。

「お前来ていたのか」

「はあ」

これがこの時、二人が交わした唯一の言葉だったという。

こうして改めて見ると、同じ町から親方と弟子の二代にわたって不世出の大横綱を輩出し、加えて中島という稀代の海の冒険家を誕生させた福島町（二〇一七年八月現在で人口四二二七人）という土地柄には、尋常ならざるものを感じる。やはり。この町には独特の気質があり、風土が備わっているように思えてならないのである。福島中学校の記念誌『確かな足あと』で、中島は次のような一文を寄せていた。

> 単に「忍耐」などで物事は前進せず、それを超えようとする撓まざる挑戦の精神こそが、大事を成し遂げるという〝福中魂〟の伝統をわれわれは体得していったのである。[5]

このような地域に繋がる精神性を感じさせるような言葉を発し、福島人気質、福島の風土の伝承を仄めかしていた。

こうして、幼き頃からの夢を抱きつつ、中島は上京して国士舘大学へ通うこととなる。当初大学では水泳部に所属せず、レスリング部に籍を置いた。同じ北海道出身で、一時は千代の山に弟子入りした縁をもつ、三歳年長のプロレスラー・グレート小鹿の影響も多分にあったように思われる。ただ、幼き頃の夢を抱いていたことから、中島はすぐに水泳に方向転換をする。

1967年頃　舘長訓話
（『体育学部第９回卒業アルバム』1968年３月）

私がこの海峡にチャレンジすることを決心したのは、国士舘大学にはいった一年生のときでした。今振り返ってみるならば、国士舘大学の建学精神と一週一度の館長先生の訓話が、私の心の奥深く響いていったのは言うまでもありません。

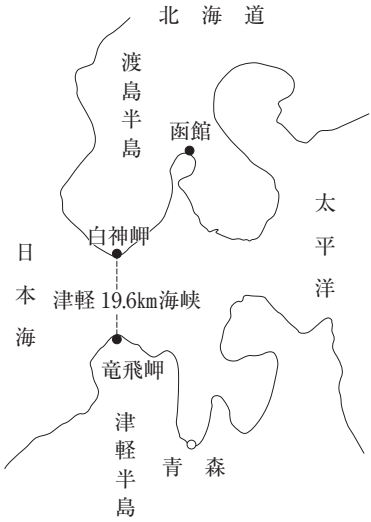
そしてその時から、津軽海峡の調査を始めました。恩師から青函トンネル工事の調査資料をもらったりして、潮流の最強時が八～九ノットあることが判明した。細々と三年かかって集めた資料は、決して充分ではなかったが、いよいよ大学三年の一九六七年八月に決行しようと決心した。[6]

中島にとって、夢が目標に変わった瞬間である。

三　挑戦

一九六七（昭和四二）年八月二七日、ついに津軽海峡横断を決行した。

北海道の南端、松前郡福島町白神岬灯台から約一キロ西の岩場の海岸を、午前七時にスタートする。南東二メートルの風、気温二四度、水温二一度とまずまずのコンディションであった。海峡の中央部までは、むしろハ



中島が卒業論文で作成した津軽海峡図
（『卒業論文抄録集』国士舘大学体育学部、1969 年、85 頁）

イピッチで進んでいたのだが、五時間も経つと海は想像していた以上の手荒い歓迎を用意していたのである。

私は海峡中央部を流れる千島海流にゆく手をはばまれ、流され始めたのだ。地元の漁師が「大潮」と呼んでいる時速一〇キロの強い北東流だ。話には聞いていたが、まるで激流だ。(7)

縞模様の潮目に入ったとき、中島はみるみる湾の中心部に流されていったのだった。二〇年間も遊び育った親戚みたいな海だったが、このときは頑固な親父のように厳しく突き放してきたのである。なお、引用した中島の文章にある「千島海流」は、「津軽海流」の誤記である。

日本海を北上してきた対馬海流は、津軽海峡の西口付近で流れを二分する。一方はそのまま北へ進んでいくのだが、大半は津軽海流となって東へと向きを変えて津軽海峡へ入り込んでいくのである。この流れが海峡の入口に殺到するので、日本海側の方が海面の高さが太平洋側より若干高くなる。それにより海水は太平洋側へ流れる傾向になっていく。これは傾斜流といって、海面に傾斜ができるとその高低差を均一にするために流れが生じるのである。通常の流速は一～三ノットで、冬季よりも夏季のほうが比較的強い流れとなっている（一ノットは、時速約一・八キロメートル）。ただこの流れは、時刻によって大きく変化してくる。潮の干満の影響である。津軽海峡をはさんで、潮位差の大きい太平洋の潮汐（ちょうせき）と、潮位差の少ない日本海の潮汐が大きく影響している。

特に津軽海峡が四つの半島に囲まれていることによって、潮の流れはより複雑になっていく。東の太平洋側には本州側の下北半島と北海道側の亀田半島、一方の西の日本海側では津軽半島と松前半島が向かい合っている。この内海型の地形状況が、潮の干満や気象条件によって海流を西へと反転させるのである。それが東進してきた

1967年8月　津軽海峡を横断する中島

対馬海流と激しくぶつかった時、潮は大きく渦を巻きはじめる。こうした複雑な動きが、古くから船舶の航行を妨げ、難航や遭難を引き起こしてきたのである。

さらに今、津軽海峡が横断者の中島を遮る要因の一つに、日本海を南下する寒流であるリマン海流の存在があった。日本海を北上してなだれ込む暖流の対馬海流と、ユーラシア大陸沿いに日本海を南下するリマン海流の温度差である。通常、水は四度で最大密度となる。したがって暖流と寒流がぶつかった場合、水温の低い海流が下へ潜っていく。ところが津軽海峡の場合、かつて陸続きだった頃の名残が、思わぬ悪戯を冒険者に仕掛けてきたのだった。津軽海峡の海底図を見ると、津軽半島から松前半島にかけて馬の背のような小高い尾根状の地形となっている。これが氷河期の当時陸地であった場所で、海峡中央部の海底には水が一気に堰を切って流れた「海釜」も見ることができる。つまり寒暖の二つの海流は、この尾根にぶつかって攪拌されながら、海峡になだれ込んできていたのだった。

その小高い尾根状の所を、現代人は青函トンネルで結んだのである。青函トンネルは津軽半島と松前半島の間を、約一万三〇〇〇年振りに陸続きにしたのだった。

津軽海峡ではいくつもの潮目が確認できるが、多くは

暖流と寒流の境であり、またそれぞれの潮の速度によるものである。寒流は海面で縞模様を描きながら、泳者に襲いかかる。潮の速度が作る激流との葛藤のほかに、この潮目は中島の体温も容赦なく奪っていった。中島によれば、「夏とは言いながらも、北の海は冷く、水温は低く、二時間もしたら体が冷えてきた。泳ぎ始めて三時間ぐらいで疲労が襲ってきた」という。[8] また、中島は次のようにも語っている。

泳いでも泳いでも前に進むどころか、流されていく。何としてもこの潮流を泳ぎ切らなければならない。だが、到達予定点はどんどん遠のいていく。このままでは横断は不可能になっていく。

とうとう、伴走船のスタッフが心配して、流された地点まで船で引っ張り戻すことになった。[9]

三度ほど大きく流され、漁船に引上げられて予定のコースに戻してもらったことについて、中島は次のように語った。

潮の流れがあまりに速すぎてこれに対応する泳ぎ方の研究が不足であったこと、ケイレンを起したこと、遠泳時間とエネルギーの関係の調査についてはやはり勉強が足らなかったことなど、いろいろ大きく反省させられることがあります。[10]

また、水温との戦いも熾烈を極めた。体温の低下と疲労で極度に弱り、途中、幾度も挫折しそうになったが、中島は決して音を上げなかった。子供のころから培ってきた、福島魂の本領発揮である。中島は、歯を食いしばって堪えぬいた。その彼の精神的支柱となっていたのが、「泳道」という言葉だった。中島は自らを「泳士」と名乗っていた。「武士道に通じる」が中島の好きな言葉だった。

「泳道」
花に華道、茶に茶道、泳ぎにも泳道があっていいと思う。続けてこそ道である。続けることの苦しさや辛さを乗り越えていく過程で、多くのことを学ぶ。それが泳ぎの「道」である。[11]

「泳道一如」
泳ぎの道をきわめるには　水と話し合い水の心を知らなければならない

1967年8月　龍飛漁港到達後、地元の出迎えを受ける中島

そこに人水一体の境地が生ずる　泳道一如とは　そんな境地ではないだろうか[12]

今、そんな中島の目指す「道」が、眼前の津軽海峡にこそあった。

もとの地点まで戻ると、再び大潮との戦いが始まった。何時間たったかわからない。私はふっと体が軽くなるのを感じた。大潮を泳ぎ切ったのだ。悲愴感が希望に変わった。私は最後の気力を振りしぼって、夕闇せまる竜飛岬の三厩港にゴールインした。[13]

結局、伴走船の助けを借りて三回ほどコースをリセットしたものの、中島は泳ぎ始めてから一〇時間二〇分後の同日午後五時二〇分、対岸の青森県東津軽郡外ヶ浜町（旧三厩村）龍飛崎に泳ぎ着いたのだった。日本初の偉業を成し遂げたのである。なお、表1（一二七頁参照）にあるように、中島は津軽海峡横断の所要時間を七時間と記しているが、これはコースのリセットに関わる時間を含めていないためと思われる。また、回想に「三厩港」とあるが正確には「龍飛漁港」である。中島は、

「港では地元の人びとが大勢出迎えてくれ、『北海道の白神岬から泳いで来たど偉い奴だ』と称えてくれ、もみくちゃにされた」と語っている。[14]

四　海洋冒険者

その後、日本人初の海洋冒険者となった中島は、海の泳ぎの普及と組織化という社会体育の分野に進む第一歩として、一九七一（昭和四六）年五月六日にスポーツクラブ「ユウェナリス・スポーツ・クラブ」を設立。第一回水泳教室を文京区総合体育館室内プールで開催した。参加者はわずかに女性五人と、取材の日刊スポーツ新聞社の加藤哲氏というささやかなスタートだった。

しかし、五月一一日の日刊スポーツ紙に紹介されるや、一気に一〇〇人を超す会員に膨れあがる。さらに日が経つにつれて小学生も入会がはじまり、会は次第に盛り上がりはじめていったのである。ちなみにクラブ名の「ユウェナリス」とは、ローマの詩人ユウェナリスの『風刺詩集』をもとにした「健全な精神は健全なる肉体に宿る」をモチーフにしている。ユウェナリスは、スポーツを通して心身の調和ある人間育成を提唱した人であり、いわゆる近代スポーツの根本理念を唱えた人名を日本的にアレンジしてスポーツクラブの名前にしたと中島は語っている。[15]

こうしてスタートしたユウェナリスは、「泳ぎを覚えて雄大な海に出よう」をスローガンにスタートした。無論、中島個人としてもさらに自身の可能性を探るべく、次々と単独遠泳に挑戦していった。世界の海峡を泳ぎ終えて、中島は言う。

> 海峡横断。それはたかだか海で泳ぐこと、単純な動作のくりかえし、――こういってしまえばそれまでだが、そこにはじつに多くの知識と経験と技術が必要とされる。人生は体験が豊かであればあるほどその人は幸せであるといえると思う。私が良かったと思うのは、たんに海峡横断を経験したというだけでなく、泳ぎを通して多くの人との出会いを体験したことである。言語や風俗は違っても共通の目的に向かって助けあい、励ましあい、感動を分かちあう喜びはなにものにも代えがたい。その喜びがあるかぎり、私の新たな挑戦へのエネルギーも尽きることはないと思っている。[16]

かくして中島は一九七六年七月一一日、次の考えを基

表１　中島の単独遠泳挑戦経歴

年	月日	経歴	場所	距離（km）	所要時間	記録
1967	8/27	津軽海峡横断	北海道福島町、白神岬～青森県三厩村	20	7時間	日本初
1969	8/17	伊豆下田～大島横断	伊豆下田～大島	42	8時間10分	
1970	8/8	ドーバー海峡横断	フランス、カレー、グリネ岬～イギリス、フォークストン、シェイクスピア海岸	34	10時間40分	日本人初
1971	3/31	ポーク海峡横断	スリランカ、セイロン島、タラマナール～インド、ダルシュコディ	35	11時間35分	世界新記録
1972	7/31	朝鮮海峡横断	長崎県上県町、対馬～韓国、南兄弟島	58	17時間20分	
1973	8/23	鳴門海峡横断	徳島県鳴門市、大毛島～兵庫県、淡路島	1.37	28分	日本新記録
〃	11/6	初島～熱海潜水横断	初島（静岡県）～熱海	12	6時間3分	日本初
1974	6/7	マラッカ海峡横断	インドネシア、ルパット島～マレーシア、ポート・ディクソン	48	21時間50分	世界初
〃	7/5	ジブラルタル海峡潜水横断	スペイン、タリファ～スペイン、セウタ（アフリカ大陸北部）	27	11時間19分	日本人初
1977	6/7	メッシーナ海峡横断	イタリア、レッジョ・ディ・カラブリア～シチリア、メッシーナ	4.5	59分30秒	日本人初
1979	12/14	初島～熱海潜水横断	初島（静岡県）～熱海	12	5時間36分	
1980	1/1	マゼラン海峡潜水横断	チリ、プンタ・アレーナス～フェゴ島	4.5	1時間35分	世界初
1981	9/17	太平洋マラソン遠泳	静岡県下田市須崎～千葉県館山市、北条海岸	100	23時間20分	

中島正一「私のスーパーアドベンチャー人生」（『知識』第44号、アートプロダクション・ノア「知識」出版部、1985年8月）201頁の表などより作成。

表２　中島の引率リレー遠泳挑戦経歴

年	月日	経歴	場所	距離（km）	所要時間	記録
1972	8/17	佐渡海峡小学生引率リレー	新潟県佐渡郡畑野町、松ヶ崎～同県西蒲原郡、越前浜	38	17時間58分	
1973	8/9	伊良湖水道小学生引率リレー	三重県鳥羽市、菅島～愛知県渥美郡、伊良湖岬	15	6時間18分	日本初
1975	8/15	沖縄海洋博記念小・中学生引率リレー	渡嘉敷島～沖縄本島海洋博会場（本部町）	100	27時間15分	日本初
1976	11/2	初島～熱海ママさん引率リレー	初島（静岡県）～熱海	12	4時間12分	
1978	3/31	マラッカ海峡小・中学生引率リレー	インドネシア、ルパット島～マレーシア、ポート・ディクソン	48	17時間5分	世界初
1979	8/15	豊予海峡小・中学生引率リレー	大分県佐賀関町～愛媛県三崎町	30	12時間30分	日本初
1980	9/2	津軽海峡小・中学生引率リレー	青森県小泊村～北海道福島町	40	13時間35分	
1982	8/27	ドーバー海峡引率リレー	イギリス、フォークストン、シェイクスピア海岸～フランス、カレー、グリネ岬	34	10時間40分	日本初

表1に同じ。

に「日本遠泳連盟」を設立した。

海は人間の生活に不可欠なものとして、重要な役割を果してきた。反面、毎年のように数千人にもおよぶ痛ましい海難事故を起こし、貴重な生命を奪ってきた。尊い生命保持を第一の目標に、自然の正しい知識や、生きた海での正しい泳ぎの普及をスローガンに、「だれもが参加でき、だれにも愛される」組織を作るために、一〇数年の準備期間を経て、「日本遠泳連盟」として発足した。[17]

会長には参議院議員・植木光教氏、副会長に財団法人修養団理事長・赤坂繁太氏が就任。そして理事長にユウェナリス・スポーツ・クラブを主宰する中島が就いた。連盟の主題である「自然の正しい知識」や「生きた海での正しい泳ぎ」の実践として、中島は小中学生や女性がリレー方式で行う遠泳の企画を立て、この指導と遠泳を引率する「引率リレー」を通して後進の育成にも尽力していった。

こうして海洋冒険家として順風満帆、まさに中島の活躍は子供や婦人層にも広く支持されていった。だがそんな中島の内部で、泳ぐことの興味の持ち方が少しずつ変化していった。そのきっかけとなったのが、一九八〇年一月に挑戦したマゼラン海峡の潜水横断であった。中島は、「海面の泳ぎに飽きたわけではないが、水面下の世界がどうなっているのかと言う興味が頭から離れなくなっていたということもあって、ボンベを背負っての潜水横断を選んだ」と語っている。[18] 一時間三五分の苦闘の末、横断に成功した中島だった。その後も二三時間二〇分の太平洋マラソン遠泳などを行うが、やはり年齢と体力からくる限界のせいだろうか、遠泳への挑戦が激減していったのである。中島は次のように語る。

それにしても遠泳は苦しいスポーツだ。世の中

表３　中島の遠泳以外の単独挑戦経歴

年	月日	経歴	場所	距離（km）	所要時間	記録
1983	7/2	伊豆新島～横須賀ボードセーリング	伊豆新島～横須賀	110	12 時間 45 分	日本初
1984	5/12	グアム～日本ボードセーリング	グアム島、アガニア湾～鎌倉、由比ヶ浜	2700	41 日	世界初
1985	4 月	韓国～日本ボードセーリング	釜山～福岡	200	20 時間 40 分	世界初

表１に同じ。

にこれほど条件の悪いスポーツがほかにあるだろうか。おおむね陸上のマラソンよりはるかに長い時間を必要とするわけだが、陸の上のようにまわりの景色が変わることはほとんどない。船上のスタッフ以外観衆がいるわけでもない。その中で同じ動作をひたすらくりかえすのだ。それはまさに自分との闘いである。[19]

そんな心境の変化が頭をもたげたころ出会ったのがセールボード、いわゆるウィンド・サーフィンだった。もとより人並みはずれた運動神経の持ち主。わずかなキッカケでコツをつかむと、たちまちセールを風にはらませてボードを疾走させたのである。

こうして中島は遠泳だけではなく、サイクリングやボードセーリングにも挑戦を開始した。だが、その新たな挑戦が、彼の思いすべてをも、文字通り「風とともに去りぬ」の結果を招いてしまうのだった。

五　次世代への伝承

一九九一（平成三）年二月一九日、思いもよらぬ一報が我々の耳に届いた。同日付けの『読売新聞』社会面の記事が、二月一八日午後一時一〇分ごろ、沖縄県・久米島北東岸の仲里村比屋定の海岸において、中島と木田嘉氏が乗り込み、沖縄～台湾間約七〇〇キロを伴走船なし・一〇日間で航海する予定で沖縄県・宜野湾マリーナを出港したボードセーリング用の「メントス号」が発見されたこと、また二人の姿はその近くに見当たらなかったことを報じたのである。[20]その後も今日に至るまで、中島に関する朗報はついぞ聞かれることはなかった。しかし、風とともに去ったはずの中島の意思は、彼の後継者によってしっかりとキャッチされ、今に繋がっている。

中島がドーバー海峡横断に挑んでから一〇年後の一九八二年七月三一日、大貫映子氏がドーバー海峡横断に挑戦。イギリスのフォークストンを出発し、フランスのカレー南西のグリネ岬に到着。日本人として初の九時間三二分の公認記録を刻んだ。

一九九四年八月六日、女性初の津軽海峡の遠泳横断に成功した尾迫千恵子氏は、そもそもがピアノ教師だった。彼女の場合、二七歳からスイミングスクールで習いはじめ、水泳に関しては「超」のつく遅咲き。しかし三〇歳で日本水泳連盟公認の第二種水泳指導員、三四歳で同第一種水泳指導員、四〇歳で日本体育協会B級水泳指導員、そして四九歳で同A級水泳指導員を取得。さら

1994 年 8 月
津軽海峡横断後の尾迫千恵子氏と筆者
（森征人氏撮影）

に日本体育協会上級水泳指導員（マスター称号）となり、東京都水泳協会指導者委員会に属している。現在も国分寺市など四市のプールで水泳の指導を行っている。

なお、一九九四年の尾迫氏の津軽海峡横断のサポートを務めたのが筆者であった。この時、私は海峡横断の事前準備や先導をしてくれる漁船の船長との信頼関係の構築など、地元との連携の重要性を痛感した。尾迫氏と私が横断後、北海道福島町の海岸に上陸した瞬間を撮影し、疲労困憊の極みにあった私達の介抱までしてくれた森征人氏と結ばれた深い縁は、現在も続いている。また、上陸後に飲み物とパンを差し入れてくれた前田勝広氏とは、本稿の取材のために福島町役場を訪れた時、二三年ぶりの再会を果たした。教育長である前田氏と私はお互いに手を取り合ったまま、しばらく言葉が出せなかった。さらに、後日、尾迫氏が北海道側から青森県側への津軽海峡横断といった、以前とは逆コースからの横断に挑戦した時、伴走船の船長を務めてくれた水嶋光弘氏からは、本稿で記した津軽海峡の潮目の解析について助言を受けるなど時を越えた友情が続いている。

さらに中島の意思を継ぐ人物として、石井晴幸氏の名は欠かすことはできない。彼自身も中島の思想・哲学に影響を受けたひとりで、一九九一年八月、ドーバー海峡の遠泳横断に挑戦。その後に、トラジオンスイミングクラブおよび海峡横断泳実行委員会を設立。自ら会長となって後進の道を開く活動を行っている。

> 魚の泳ぎはそれ自体に大きな意味はなく、きわめて当り前のことです。しかし、人間の泳ぎは泳ぐことによって多方面にわたって良い影響が生まれなければなりません。ここに、人間と魚の泳ぎの違いがあるものと思います。［中略］
> 生命を守る手段としての泳ぎ、泳ぎを通して身心

の調和のとれた健康な人間形成の手段としての泳ぎ、この目的のためにユウェナリスS・Cのポリシーが受け継がれ、指導者の存在価値があるものと信じております。[21]

郷里の海峡を泳いで渡ることから始まった中島の夢は、やがて海を包括する哲学を求めて世界を駆け巡っていった。それはいまや多くの人々の心に、コバルトブルーの彩りとなって深く染み渡りはじめている。中島は私たちに、海の優しさと、夢と、可能性を教えてくれた偉大な開拓者であった。

郷土の偉大な英雄として、身近に中島を見てきた地元の後輩である福島町議会元事務局長・谷藤悟氏は、胸を張って言い切った。

「中島正一は、いまでも私たちのヒーローです」

註

(1)中島正一「ロング・ディスタンスへの誘惑」(小島敦夫編『海―生きる、学ぶ、探る』大月書店、一九八七年)一七一頁。

(2)松前町史編集室編『松前町史　通説編　第一巻下』(松前町、一九八八年)四二〇～四五二頁。

(3)中島正一「子供たちの無限に伸びる可能性に賭けて―クラブ創立一五年を振り返って―」(『ユウェナリスS・C一五周年記念誌　海のマラソン』ユウェナリスS・C、一九八六年)一頁。

(4)同前。

(5)中島正一「福中魂」(『福島中学校校舎落成記念誌　確かな足あと』福島中学校校舎落成祝賀協賛会、一九八六年)一二頁。

(6)「〝明治祭記念〟「日本一の先輩」が講演」(『国士舘大学新聞』第一一三号、国士舘大学出版部、一九七一年一一月)三頁。

(7)中島正一「私のスーパーアドベンチャー人生」(『知識』第四四号、アートプロダクション・ノア「知識」出版部、一九八五年八月)一九七頁。

(8)註(6)、三頁。

(9)註(7)、一九七頁。

(10)「魔の津軽海峡を遠泳　本学体育学部中島君敢行」(『国士舘大学新聞』第六七号、国士舘大学出版部、一九六七年九月)三頁。

(11)「ユウェナリス・スポーツ・クラブ一〇年の歩み」(『中島正一とユウェナリスS・Cの一〇年』ユウェナリス・スポーツ・クラブ、一九八二年)五〇頁。

(12)「泳道一如」(前掲『中島正一とユウェナリスS・Cの一〇年』)二頁。
(13)註(7)、一九七頁。
(14)同前。
(15)中島正一「クラブ創立一〇周年をふり返って」(前掲『中島正一とユウェナリスS・Cの一〇年』)一九頁。
(16)註(1)、一七九～一八〇頁。
(17)註(11)、五八頁。
(18)註(1)、一七六頁。
(19)註(1)、一七七頁。
(20)「沖縄・台湾セーリングの中島さんの無人ボード漂着　冒険航海の遭難濃厚」(『読売新聞』・東京朝刊、一九九一年二月一九日)三一頁。
(21)註(3)、一頁。

国士舘を支えた人々

緒方　竹虎

菊池　義輝

1953年　緒方竹虎
（国士舘史資料室所蔵）

はじめに

「国士舘大講堂」（国登録有形文化財）には、三名の人物の写真が掲げられている。一人は国士舘の創立者である柴田徳次郎であり、他の二人は国士舘を支援した野田卯太郎と緒方竹虎である。野田は国士舘の草創期を、緒方は第二次大戦後における国士舘の再建を支えた中心人物であった。野田については、熊本好宏「国士舘を支えた人々　野田卯太郎（大塊）」（『国士舘史研究年報　楓原』第二号、二〇一〇年三月）において取り上げたので、ここでは戦災によって校舎のほとんどを失った国士舘の再建に大きな支援を与えた緒方を取り上げてみたい。

緒方は、朝日新聞社の記者・主筆を経て政治家となり、一九五五年一一月に自由民主党結党を成し遂げた後、次期の自民党総裁・首相と目されながら急死した人物として知られている。緒方の生涯をたどるための最も

基本的な文献は、緒方竹虎傳記刊行會編著『緒方竹虎』（朝日新聞社、一九六三年）であり、渡邊行男『緒方竹虎　リベラルを貫く』（弦書房、二〇〇六年）なども この伝記に多くを負っている。また、緒方の死の直後、彼と所縁が深い人物が寄稿した、桜井清編『回想の緒方竹虎』（東京と福岡社、一九五六年）には、緒方にまつわる様々なエピソードが記されている。学術研究の分野では、栗田直樹の詳細な研究がある。栗田は、戦前・戦後を通じて緒方が一貫した自由主義者であった点を強調する伝記などとは異なり、新聞社時代に培った情報管理の手法と人脈を武器にして戦時・戦後の政治の主宰者となっていく点に注目している（『緒方竹虎―情報組織の主宰者―』吉川弘文館、一九九六年、日本歴史学会編『緒方竹虎』吉川弘文館、二〇〇一年）。

緒方に関する基本的な情報については以上を参照しながら、以下では緒方と国士舘との関わりを探ることを通じて、国士舘創立一〇〇周年に至る歩みの一端を振り返ってみたい。

一　緒方の略歴

緒方竹虎は、一八八八（明治二一）年一月三〇日、山形県書記官を務める父・道平と母・久重の三男として山形市旅籠町に生まれた。緒方が四歳になった一八九二年、父親の福岡県書記官への異動に伴い、福岡市へ移住する。福岡師範学校附属小学校、福岡県立中学修猷館に学んだ後、中国相手の商売を行う志を抱いて、一九〇六年、東京高等商業学校（現一橋大学）に入学したが、一九〇八年七月に退学。この後、竹馬の友であった中野正剛のすすめにより、一九〇九年九月、早稲田大学専門部政治経済科第二学年に編入学した。卒業後の一九一一年一一月、朝日新聞社に勤務していた中野の紹介により大阪朝日新聞社に入社。イギリスへの留学期間を挟んで朝日新聞社での地歩を固めてゆき、一九二五年二月、三八歳の若さで東京朝日新聞の編集局長となり、一九三四年四月東京朝日新聞の主筆、一九三六年五月には一本化された大阪朝日新聞、東京朝日新聞の主筆に就任し、一九四三年一二月までその地位にあった。

一九四四年七月、朝日新聞社取締役・副社長を辞任した後に政界へ転じ、小磯国昭内閣の国務大臣兼情報局総裁、鈴木貫太郎内閣の内閣顧問となり、情報政策の強化や本土決戦に備えた国民義勇隊の組織化に尽力する。一九四五年八月、敗戦処理にあたった東久邇宮内閣では国務大臣兼内閣書記官長兼情報局総裁に就任し、内閣全

体の運営に手腕をふるった。この後、一九四六年八月に公職追放の指名を受け、一九五一年八月、追放を解除された。

一九五二年一〇月、すでに死去していた中野の地盤であった福岡第一区から衆議院議員選挙に出馬し、初当選を果たした。以後、第四次吉田茂内閣の国務大臣兼内閣官房長官（のち副総理専任）、第五次吉田内閣の国務大臣（副総理）となり、吉田の退陣後は自由党総裁に就任。内閣と政局の運営に手腕を発揮し、大物政治家としてその存在感を増していった。緒方の宿願であった保守政党の合同が紆余曲折を経て成り、自民党が結党されて同党総裁代行委員に就任した直後、一九五六年一月二八日、急性心臓衰弱により六八歳で急死した。

二　戦前の国士舘との関わり

緒方と国士舘との関わりは、国士舘の創立者である柴田徳次郎の学生時代に遡るようである。一九六六（昭和四一）年、国士舘創立四五周年の記念講演における柴田の発言によれば、一九一二年九月、早稲田大学専門部政治経済科に入学後、学内団体である「筑前学生会」の会合において朝日新聞の若手記者であった緒方と出会ったようだが、当時の史料によって確認することはできない。ただし、一九四二年時点の緒方の回想でも「今から三十年程前」、すなわち一九一二年頃に出会ったと述べていることから、柴田が早大生であった時分に出会ったことは間違いないようである。なお、両者の邂逅に福岡県出身者のネットワークが作用したことは推測できる。緒方は、早稲田大学専門部在学時から同郷の頭山満の厚い信頼を受けており、柴田も在学時より頭山の知遇を得ていた。同じく柴田が在学時に知遇を得、一九一七年一一月四日、国士舘の開校式において訓話を行うことになる中野と緒方とは竹馬の友であった。緒方と柴田との出会いは、同郷の頭山や中野を介したものであったと思われる。

国士舘に対する緒方の関与が史料的に確認できる最初は、学外者に対して教育の門戸を開いた国士舘夏季講習会の第一回・第二回の講師である。朝日新聞の政治部長であった緒方は、第一回目は「欧米の思想に就て」（一九二二年八月）、第二回目は「協調的国民主義」（一九二三年八月。当初予定は「露西亜我観」）と題する講習を行った。これらの内容については、残念ながら知ることができない。ただし、「協調的国民主義」については、『東京朝日新聞』における緒方の連載記事「華府（ワシントン）

会議を顧みて」（一）・（五）（一九二二年四月一一日・同月一九日）において、各国の「国民的自主」に基づく「国際協調」を「協調的国民主義」と捉え、「争覇的国民主義」から「協調的国民主義」へという世界の世論の「新思潮」が国際協調を謳ったワシントン会議成立の背景にあることを述べており、国士舘の講習会における「協調的国民主義」はこれと同趣旨の内容であったと考えられる。なお、第一回講習会の際に実施された朝日新聞社の見学は、緒方の協力によるものだろう。この時、国士舘の創立に貢献した徳富蘇峰が主宰する国民新聞社の見学も行われている。緒方は、東京朝日新聞社編集局長となった後、国士舘の教員による剣道・柔道の理論・実科と各界の名士などによる講演を組み合わせ、一九三一年七月に国士舘専門学校において開催するとした「第二回文武夏季大講習会」の講師にもなっており、国士舘が実施する教育の一端を担っていた。また、緒方は一九二五年四月に創設した国士舘中学校の校舎の新築に対する寄付を行っており、資金面でも国士舘に便宜を図っていた。

この後も、緒方の国士舘への関与は様々な機会においてみられた。例えば、一九二七年三月二二日に開催された、国士舘創立前からの支援者であった野田卯太郎の追悼会の発起人の一人になっている。また、一九三三年から一九四一年にかけて、国士舘では学生、教職員や財団法人理事が、柴田の理事辞職を求める行動を起こした。この最中、一九三七年一月に蘇峰が起草した「国士舘憲則」は、柴田を「主盟」として国士舘の同志的結束を図るとしたものであり、署名には頭山などとともに緒方も名を連ねている。さらに、一九四二年一一月四日、世田谷で開催された国士舘二五周年記念式典には衆議院議員であった中野とともに出席し、祝辞を述べている。そこでは柴田を「率先垂範」の教育者であると称揚している。

なお、中野は、一九四三年一〇月、東条英機内閣打倒を試みたことから警視庁に検束された後に憲兵隊の取り調べを受け、帰宅後に割腹自殺した。中野の葬儀委員長を務めた緒方は、柴田を介して、また書簡によって、蘇峰との間で中野の顕彰碑建立について相談をしている。緒方は、翌年一〇月二七日に行われた中野の一周忌法要において、蘇峰が寄せた追悼文を柴田が代読したこと、さらに翌日には蘇峰が撰文し、頭山の筆になる「魂」を冠した顕彰碑の除幕式が行われたことを書簡にて蘇峰に報告した。

以上のような緒方の国士舘への関与や葬儀に際しての

行動は、同郷者の人的ネットワークの中で行われたものであったといえる。ただし、その根底には、同郷者に対する親近感だけではなく、以下に述べるように反共産主義があった。

緒方は、日独防共協定に対する一般の認識を高めることを目的とした民間有志の集まりである「日独防共協定強化同志」の一人であった。反共主義の立場が鮮明であるこの団体の「宣言」（一九三七年九月三日、可決）を起草したのは蘇峰であり、頭山、中野、柴田なども名を連ねた。緒方、柴田などが参加した実行委員会は、協定締結一周年の祝賀会や記念講演会などを企画・開催した。イタリアが防共協定に加わった翌年の一九三八年二月には「日独伊防共協定強化同志」と改称し、同年一一月二四日には有田八郎外相のほか、駐日イタリア・ドイツ両大使、満州国大使、貴族院議員、陸・海軍人、官僚など三五〇余名参加のもと、防共協定締結の記念祝賀会を開催しており、緒方、柴田も出席している。日独伊三国同盟が締結された翌月、一九四〇年一〇月二一日に日比谷公会堂で開催された「大詔奉戴三国同盟推進大会」には、柴田、花田半助といった国士舘関係者らとともに緒方も参加し、緒方の発声によって「日独伊三国同盟の万歳」が三唱された。

緒方は、一九四〇年八月に開催された朝日新聞の方針を決定する編集会議において、国際政治におけるドイツ、イタリアの比重が重くなってきていることに加え、防共協定の関係から日独伊三国同盟に反対できない旨の発言をしている。緒方のこの発言の背景には、上述したように反共産主義を掲げる団体における具体的な行動があり、そこでの人脈は同郷者や国士舘のそれと重なっていた。

三　戦後の国士舘との関わり

第二次世界大戦後の一九五二（昭和二七）年五月一日、緒方は交詢社において国士舘再建のために開催された会議に出席した。略歴で確認したように、緒方の公職追放が解除されたのは一九五一年八月であり、解除によって学校法人（一九四六年一月、財団法人の名称を国士舘から至徳学園に改称、五一年三月に学校法人至徳学園となる）への関与が表だってできるようになったことが、会議へ出席した理由と思われる。この会議には、緒方や柴田のほか、元外相で緒方や柴田らとともに防共協定強化同志として活動した経験をもつ有田八郎など計八名が出席している。会議と同日の日付が記され、緒方の

起草とされている「国士舘再建趣意書」には、敗戦後の占領政策によって至徳学園と改称したが、国士舘の名称を復するとした宣言に続いて、以下の文章がある。

然らば、本当の人間とは何であるか。今の世においては何等特別の徳操ではない。常識である。平衡を得た人格である。狂人が走つても共に駆け出さない平常心の持主である。事は極めて平凡の様であるが、如何なる威武の下にも、如何なる誘惑の前にも能く平常心を失はず、判断を誤らないことは容易の如くにして決して容易でない。而してそれを能くすると否とは、殆ど繋つて常識を具足するか否かにあるのである。

イギリスに空前の総罷業が行はれ、そしてそれが腰砕けに終つた時、ボルドウィン首相は「これは英国民の常識の勝利だ」と叫んだ。正にそれは政府権力の勝利でなく、国民常識の勝利だつたのである。例をイギリスに求めるまでもない。古来国を危くするものは平衡の喪はれた心であり、国の根幹が常識によつて固められるならば、動乱の中に立つても国は危くない。国士舘の養成せんとするものは、この常識であり、如何なる誘惑の前にも平常心を喪はない人格である。

今日の教育について種々の批判を聞くなかに、最も大なる欠陥は、その教育の方針が国の常識と懸け離れて居ることである。学問の自由を叫ぶうちに教育の目的を忘れたところにある。役に立つ人を作る代りに役に立たない人を作りつゝあることである。国士舘は深く日本の将来を考へ、国の常識に基いて役に立つ人間を作りたい、それが念願である。

［後略］

緒方の起草とされているのは、新聞記者として、また東久邇宮内閣では首相の演説や放送などの原稿を、吉田内閣では首相の演説草稿の作成を行うなど健筆をふるった実績によるためだろう。また、イギリス政府・経営者が石炭産業の合理化を要求したことに対して、労働組合会議（労働組合のナショナルセンター）が一九二六年五月四日から一二日にかけて実施したゼネラル・ストライキを例示して述べている「国民常識」については、同様の表現が緒方の他の文章にみられる。一九五五年一一月の自民党結党直後、日本における二大政党制の今後のあり方を論じた「私の政治理念」において、緒方は「国民の常識」に規定された国策の「共通な広場」があるイギ

リスの二大政党制では円滑な政権移動が行われているが、日本では自民党と社会党との間に「国民の常識」に規定された「共通の広場」は無く、このため当分は「保守勢力が祖国再建に当るほかないと考えている」と述べている。ここには「再建趣意書」の文章と通底するものがあり、趣意書に緒方の考えが反映されていることが窺われる。緒方による二大政党制の基礎としても主張されることになる「国民の常識」、「再建趣意書」の表現では「如何なる誘惑の前にも平常心を喪はない人格」の「養成」に加えて、「国の常識に基いて役に立つ人間を作」ることなどが、対日平和条約が発効し日本が独立した直後の時期に、国士舘の教育方針として示されたのである。後にこの「再建趣意書」は政治家・財界人・文化人など二八五名の署名を得て、国士舘の募金活動に活用された。

一九五二年八月五日には、国士舘の発展を支え続けることになる「国士舘大学維持員会」が発足した。顧問総代の緒方や会長に就任した小坂順造（信越化学工業社長であり、戦前、防共協定強化同志として、緒方や柴田とともに活動）ら政界・財界などから五二名が会員となった。緒方ら維持員などからは寄付金が寄せられた。

また、緒方は幅広い人脈によって国士舘を支えた。緒方や柴田と同じ福岡県出身で文部官僚であった剱木亨弘の回想によれば、柴田は日曜・祭日を除く早朝、緒方家に日参し、緒方からの紹介状を持って有力者を訪ね、学園再建への協力を懇請したという。また、緒方は剱木を自邸に招き、柴田と引き合わせている。この後、柴田は緒方家訪問の帰りに剱木家を訪問するようになり、短期大学設立に関して相談をするなどしたとされる（剱木亨弘『戦後文教風雲録―続牛の歩み』小学館、一九七七年、一七七～一七九頁）。国士舘短期大学は一九五三年四月に創設され、同月二六日に開催された入学式および開学式には、蘇峰や緒方など維持員が臨席した。

緒方ら維持員など二一名が出席して、一九五五年五月一九日に開催された「国士舘再建感謝報告会」において、柴田が体育武道の教員養成を軸とする大学の創設に向けて支援を訴えたことが契機となり、翌年四月、短期大学に体育科が増設された。自民党結党の後、党総裁代行委員となった緒方は多忙を極めていたが、一九五五年一一月二五日、体育科の増設に伴って建設されることになった新体育館（後の「第一体育館」）の上棟式に訪れている。一九五六年一月二八日、緒方が急死したため、一九五七年一月二九日に行われた新体育館の落成式では「緒方竹虎先生一週（岡）年祭」を合わせて行い、緒方の遺徳

1955 年 5 月　国士舘再建感謝報告会
（国士舘史資料室所蔵）

を偲ぶ機会とした。緒方の妻、息子などが来賓として招待され、また体育館正面には記念として上棟式に訪れた際の緒方の写真が拡大して掲げられた。緒方などの支援によって創設された短期大学体育科は、一九五八年四月に創設される国士舘大学体育学部へと受け継がれることになる。

おわりに

これまで見てきたように、緒方と国士舘との関係は戦前からのものであり、広い人脈をもち、また政治家としての存在感が増した戦後の緒方は、政界・財界・官界の様々な人物の国士舘に対する支援を取り付ける上で重要な存在であった。

緒方は、一九五五（昭和三〇）年五月二七日、多忙な国会の合間を縫って母校である修猷館高校の創立七〇周年記念式に出席し、若者たちに対して日本の再建に必要不可欠であるのは「国民の独立の気魄」を取り戻すことであると訴えた。「気魄」は、柴田が掲げ、現在まで受け継がれている国士舘の教育理念を示す四徳目「誠意・勤労・見識・気魄」にも含まれている。緒方と柴田の二人の交流が継続された理由のひとつとして、「気魄」という言葉で象徴される価値観を共有していたことがあったのかも知れない。

国士舘を支えた人々

坂口　二郎

浪江　健雄

1921年　坂口二郎
（菊池知之編著『新聞人　坂口二郎　大正デモクラシー編』草文書林、1993年より）

はじめに

一九一三（大正二）年四月、福岡県出身の早稲田大学武道系学生などを中心に、「興国救人」「社会改良」「青年指導」をスローガンに掲げた社会教化啓蒙団体である「青年大民団」が結成された。この青年大民団こそが国士舘の母体と言われている。その理由は、国士舘が、一九一七年一一月四日、青年大民団本部事務所（東京市麻布区笄町一八二番地）内で夜学の私塾として創設されたためである。

その後、一九一六年五月二五日、「青年大民団」は、その主張を発信する機関誌の発刊披露会を日比谷・大松閣で開催し、同年六月一五日、月刊誌『大民』を創刊した。『大民』は、一時『大民新聞』、『生存同盟』と名称変更されるが、一九三九年二月一一日、日刊紙『大民』が発行されるまで継続して刊行された。

月刊誌『大民』の後をうけて発刊された日刊紙『大

日刊紙『大民』の題字

民』は、社長・柴田徳次郎、主筆・坂口二郎により発行された小型版日刊新聞である。「信条」としては「排共産主義　排反動主義　排独善主義」を謳っている。紙面はタブロイド版四頁からなる。創刊当時、柴田は国士舘を離れていたが、社長として経営に尽力し、一九四四年まで発刊を続けた。一方、主筆を務めた坂口は、明治末期から太平洋戦争頃まで、読売新聞・萬朝報・中央新聞・福岡日日新聞などでも活躍したジャーナリストである。

実のところ、この日刊紙『大民』こそが、国士舘にとって戦後の最も苦しい時期を支えてくれた人々との繋がりを作ったと言っても過言ではない。つまりは、戦前・戦中に日刊紙『大民』を通して築かれた絆が戦後も引き継がれたのである。そして、そのキーパーソンであったのが坂口である。そこで本稿では、坂口と柴田・国士舘との関係をみていくこととする。また、戦前からの支援者が戦後も引き続き支援に応じた理由、また、支援者たちが何を国士舘に期待したのかといった点についても考えてみたい。

一　日刊紙『大民』以前

まずは、坂口が『大民』の主筆となるまでのプロフィールを、菊池知之編著『新聞人　坂口二郎　明治編』（草文書林、一九九二年）所収の「略伝」「坂口二郎略年譜」に拠って紹介しよう。

坂口は、一八八〇（明治一三）年五月二四日、福岡県三池郡宮部村（現大牟田市）に生まれ、橘尋常小学校、銀水高等小学校を経て、一八九九年三月、中学伝習館を

卒業した。その後、同年九月には、京都の第三高等学校に入学したが神経衰弱のために中退し、一九〇〇年九月、早稲田大学の前身である東京専門学校国語漢文及び英文学科に入学、一九〇四年三月に卒業した。卒業試験は二席であり、平均点八三・四四の好成績であった。

翌一九〇五年一月、読売新聞社の前身である日就社に入社し、文芸欄を担当する。後には政治経済の編集主任なども歴任した。しかし、一九〇七年には退社している。これは、竹越与三郎（三叉）主筆の退社に殉じたと言われている。その後、同年一二月には萬朝報に入社。一九一四年の山本内閣倒閣運動では、黒岩涙香社主のもと編集主任を務め、一日数度の発売禁止も経験した。一九二〇年三月には、萬朝報で若手を起用するよう人事の刷新を建策したものの容れられなかったことから退社し、イギリス外遊の道を選んだ。同年七月七日、郵船阿波丸にて横浜を出帆。上海、香港、シンガポール、スエズを経由して、九月四日にロンドンに到着する。翌一九二一年五月には一カ月にわたり、イタリア、スイス、オーストリア、ドイツ、フランス等を巡り、同年八月にはスコットランドへも赴いている。そして、同年一〇月、ロンドンからアメリカ経由にて帰国の途につく。この外遊中には、福岡日日新聞に旅行記約一〇〇回、政治経済評論約一二〇回の連載をした。

帰国後、一九二二年一月、中央新聞社（政友会機関紙『中央新聞』を発行）に入社して編集局長に就任した。また、外遊中の成果として、同年二月『欧米三十五都』、同年三月『英国政界の煩悶』（ともに下出書店）を出版し、『中央新聞』夕刊には三月三〇日より五月一二日まで三五回にわたり「新政友会論」を執筆した。七月になると編集局長兼編集長に就任し、一二月には『新政友会論』（中央新聞代理部）を出版している。同書は、政友会の理論的指針として政友会総裁ならびに党員に献ぜられた。

一九二四年六月には中央新聞社を退社し、翌月、萬朝報編集局長に就任した。これは黒岩涙香社主が亡くなった後の萬朝報再建を託されたためであったが、不成功に終わったという。その後、一九二六年八月、福岡日日新聞在京客員（論説担当）に就任、一九三六年に同社顧問となるまで続いた。また、私生活では長い独身生活の後、一九三六年一〇月、五六歳の時に古賀春江（画家）の未亡人であるヨシエと結婚した。一九三八年三月には、かねてより企画していたタブロイド版日刊紙について柴田と相談している。また、同年八月には、新聞協会派遣独伊親善新聞使節団員としてドイツ・イタリアへ赴

いている。

二　国士舘関係者との交流と日刊紙『大民』

次に、坂口と『大民』、そして柴田や国士舘関係者との繋がりをみていこう。以下、菊池知之編著『新聞人坂口二郎　昭和編』（草文書林、一九九五年）所収の「日記・論説」（以下、「日記」と略す）などを中心に年次を追ってみていくことにする。

坂口と国士舘との交流は、『大民』発刊以前より見受けられる。坂口は、一九二九（昭和四）年一月三〇日より六回にわたり国士舘における政治学の講義を担当している。また、一九二九年七月二日の「日記」によれば、「柴田国士館長来訪。来年度から国士館に新聞科を置くに就いて相談があった」とあり、学校運営について相談するなど坂口と柴田は公私にわたって親しい関係であった。こうした関係が、後の日刊紙『大民』の発刊に繋がっていく。

すでに柴田は頭山満、徳富蘇峰らを中心とする国士舘維持委員会の歴々や、同郷の政財界の重鎮たちからも支援を受けていたが、昭和の初め頃よりは、坂口の関係筋からも多くの支援を得るようになっていったと考えられる。なかでも坂口は、戦後に内閣総理大臣となる鳩山一郎との関係が深く、戦前、鳩山が内閣書記官長や文部大臣といった政府の要職に就任すると、坂口は内閣嘱託や文部省嘱託に任命され、スピーチライターを務めた。

また、坂口は徳富蘇峰とも浅からぬ縁をもっていた。蘇峰は、一九二九年一月、資本主である根津嘉一郎との衝突により、自ら創業した国民新聞社からの退社を余儀なくされた。この件について、「国民退社慰労会」に出席した坂口は、現代新聞が資本に圧迫される一現象であるとの感想を述べている。また、同年一〇月、坂口は帰省の車中において、蘇峰の『日本帝国の一転機』（民友社、一九二九年）を読んでいる。その内容は、世界現時の要求は政党政治の常套を超越した人物政治であり、その模範はイタリアにおけるムッソリーニであるというものであり、以後、坂口の論説はムッソリーニに対して好意的論調となった。この読書経験が日刊紙『大民』の信条となる排共産主義の主張に繋がったと考えられる。蘇峰もまた坂口を評価しており、日刊紙『大民』発刊に際しては、緒方竹虎、小坂順造らとともに後援者となっている。そして、日刊紙『大民』は、蘇峰の機関紙的存在となる（以上、菊池知之「解説」、前掲『新聞人　坂口二郎　昭和編』）。

蘇峰の坂口に対する評価は、一九四一年六月二〇日に開かれた坂口の還暦祝（於東京・丸の内会館、会衆一八〇余名）における祝辞に端的に現われている。内藤力三「坂口二郎氏還暦祝」（前掲、菊池『新聞人　坂口二郎　昭和編』、二八五頁）には、蘇峰が以下の内容の祝辞を述べたと紹介している。

現代の新聞はそのことごとくが「商品」化され、新聞社は「営業」化され、新聞人は「職業」化されてゐるが、坂口君ひとり、その拠るところの「大民」が「商品」化されず、「営業」化されず、坂口君また「職業」化されずして、真個の新聞人としての真価を発揮されてゐることは喜ばしいことであり敬服にたへない

これこそ新聞人・坂口二郎の真骨頂を端的に言い表したものといえよう。

三　坂口がつないだ人脈と国士舘の再建

以上の経緯もあり、日刊紙『大民』創刊に際しては、柴田と坂口が共に知己となった人々からの支援を受けている。その様子のいくつかを「日記」からみてみたい。

正午から興津庵で、野田代議士の招待があった。頭山先生、徳富先生の外に、松野鶴平君、柴田徳次郎君と頭山先生令息出席、寛談して三時頃漸く連絡部へ出勤した。（一九三七年一〇月六日）

［前略］午前中、柴田徳次郎君来訪。かねて計画中の新聞創刊につき、徳富先生の勧告を受けて、鳩山一郎氏の出資を勧誘に行ったことを語る。［後略］（一九三八年四月九日）

午後三時半、柴田君と一緒に外務大臣有田氏を訪問して、帰朝の挨拶並に「大民」刷新につき応援を求め、午後六時から電通八階で大民クラブ同志のため、一時間の講演をやり、次いで芝浦の雅叙園で三池柳河先輩同志の歓迎宴を受けた。［後略］（一九三九年一月一四日）

丸ノ内会館で蘇峰先生、岩永同盟社長、小坂順造、緒方竹虎、柴田徳次郎君と午餐を共にしながら、「大民」の編集方針について語り、三時前中座

して、電通ビル八階で、新聞内報子十余名を相手に、「大民」の刷新計画を披露し、[後略]（一九三九年一月二一日）

注目すべきは、ここに登場する野田俊作、徳富蘇峰、松野鶴平、鳩山一郎、有田八郎、小坂順造、緒方竹虎らが、戦後に設けられた「国士舘大学維持員会」（一九五二年八月発足）のメンバーとなっていることである。すなわち、彼らは戦後においても柴田および国士舘の支援者となったのである。

おわりに

終戦後、ＧＨＱ／ＳＣＡＰ（連合国軍最高司令官総司令部）により軍国主義者とされた政界、財界、官界から言論界に至る各界指導者たちは公職を追われた。その中には、戦前より国士舘を支えてきた人々も少なからず含まれていた。また、柴田もその一人であった。

しかし、そうしたなかにあっても戦中期に根をもち、保守本流を形成する自由党系の幹部をＧＨＱが公職追放しても何ら影響を与えなかったという評価がある（伊藤隆『昭和期の政治』山川出版社、一九八三年）。例えば、アメリカ国務省の在外機関の政治顧問部（ＰＯＬＡＤ）は、一九四五（昭和二〇）年一〇月一一日の報告書で、「鳩山の党は自由党というよりも保守党と命名した方がはるかによかろう。彼は新しいまたは革命的な見地を全く代表していない」と述べている。この評価は、戦時体制の時から変わらない自由党系の保守的性格を言い得ているといわれている（雨宮昭一『占領と改革』岩波書店、二〇〇八年）。戦前の保守勢力は、戦後に受け継がれたということができる。

しかし、戦後、保守系の政治家たちは、それまでの思想的背景をもって活動を行うことは困難となった。また、持ち続けていたとしても、違った形をもって臨まねばならなかった。その一方、社会党系の躍進や欧米の自由主義、個人主義の流れもあり、戦前よりの日本的政治思想を重んじてきた保守系政治家や財界人の多くは、ある種の不安、すなわち、日本古来の伝統や道徳までもが失われてしまうのではなかろうか、といった想いを抱えていたであろうことは想像に難くない。

こうした時期に国士舘では、戦前より変わらず「国の役に立つ人間を育てる」ことを打ち出していた。保守系の政治家や財界人のなかには柴田と親交を持つ者も多く、先に述べた国士舘維持員会のメンバーなどから国士

舘は期待され、支援を得ていたと言えるのではないだろうか。

坂口は終戦後、蔵書を鳩山一郎に譲って郷里に帰り、一九四七（昭和二二）年に『人間労働史』、翌年には『二十世紀に於ける帝国主義の足跡』（ともに叡智社）を著した後、一九四九年一月、六九歳で亡くなった。終戦後間もなく坂口は没したが、坂口が主筆を務めた日刊紙『大民』を支援する人脈は、戦後における国士舘の再建支援の人脈へと受け継がれたのである。

資料提供のお願い

国士舘史資料室では、国士舘史に関する資料や情報提供をお願いしております。例えば、学生時代の日記や手帳、当時の写真、講義ノートや実習用具など、資料がございましたら当方着払いにてお寄せください。

郵送先

〒一五四―八五一五
東京都世田谷区世田谷四―二八―一　柴田会舘二階
学校法人 国士舘　国士舘史資料室
TEL ○三―三四一八―二六九一
FAX ○三―三四一八―二六九四
E-mail archives@kokushikan.ac.jp

平成29年度事業報告

1　国士舘百年史編纂委員会ならびに専門委員会

国士舘は、平成15年6月、創立１００周年に向けて年史編纂事業を企図して国士舘百年史編纂委員会を発足、同委員会の下に百年史編纂のための調査研究・執筆を担当する専門家組織として、平成21年6月に専門委員会が発足した。平成29年度の国士舘百年史編纂委員会並びに専門委員会の委員会名簿と各委員会の開催日程および審議事項は次の通りである。

(1)　国士舘百年史編纂委員会

国士舘百年史編纂委員会名簿

（任期：平成29年6月～平成31年5月）

顧　問	阿部　昭	元理事・元文学部教授・前委員長（平成21年6月～平成25年5月）
委員長	中島　徹	理事（年史編纂担当）・法学部教授
副委員長	南　克之	理事
副委員長	佐々　博雄	文学部教授・国士舘史資料室長
委　員	入澤　充	副学長（平成29年4月委嘱）・学長室長・法学部教授
委　員	古坂　正人	政経学部講師
委　員	朝倉　利夫	体育学部教授
委　員	山崎　貴	理工学部教授
委　員	髙野　敏春	法学部教授
委　員	原田　信男	21世紀アジア学部教授

委　員　白銀　良三　経営学部教授
委　員　平木　茂　高等学校定時制課程教頭
委　員　山田　愼吾　特別参与（平成29年6月委嘱）
委　員　福本　正幸　理事（平成29年6月委嘱）・法人事務局長
庶　務　国士舘史資料室事務長　福原　一成
　　国士舘史資料室　熊本　好宏
任期満了（平成29年5月31日）
佐藤　圭一　政経学部教授・学長
川口　直能　理工学部教授

平成29年度の編纂委員会開催と審議事項

第21回　平成29年6月10日（土）10時30分より
会場　国士舘大学世田谷キャンパス1号館3階
　　第1会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編の編纂について
　　ブックレット（普及教育版）実施計画（案）について

(2) 国士舘百年史編纂委員会　専門委員会

国士舘百年史編纂委員会　専門委員会名簿

（任期：平成29年6月～平成31年5月）

顧　問　阿部　昭　元理事・元文学部教授・前専門委員長（平成21年6月～平成25年5月）・副専門委員長（平成29年5月迄）
専門委員長　佐々　博雄　国士舘史資料室長・文学部教授
専門委員　湯川　次義　早稲田大学教育学部教授
専門委員　岩間　浩　元文学部教授
専門委員　前城　直子　元21世紀アジア学部教授
専門委員　原田　信男　21世紀アジア学部教授
専門委員　安西　博見　元理事
専門委員　枝村　亮一　元文学部教授
専門委員　漆畑真紀子　立川市歴史民俗資料館学芸員（平成29年6月

委嘱）
庶　務　国士舘史資料室事務長　福原　一成
国士舘史資料室　熊本　好宏
国士舘史資料室　浪江　健雄
国士舘史資料室　菊池　義輝
任期満了（平成29年5月31日）
山﨑　真之　東京国際大学人間社会学部講師

平成29年度の専門委員会開催と審議事項

第64回　平成29年1月21日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　通史編刊行スケジュールについて
『国士舘百年史』通史編原稿（第1部第3章第1節）について
『国士舘百年史』通史編原稿（第3部第1章第3節）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）について

第65回　平成29年2月18日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編原稿（第1部第3章第1節）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）について

第66回　平成29年3月17日（金）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編原稿（第3部第3章第4節）について
『国士舘百年史』通史編原稿（第2部第3章）について
『国士舘百年史』通史編原稿（第1部第3章第3節）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）

について

第67回　平成29年4月22日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編原稿（第3部第2章第2節）について
『国士舘百年史』通史編原稿（第2部第3章第1・2・3節）について
『国士舘百年史』通史編原稿（第2部第4章第2節・第3部第2章第1節・第3部第3章第1節）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）について
ブックレット実施計画（案）について

第68回　平成29年5月27日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編原稿（第2部第2章第1節）について
『国士舘百年史』通史編原稿（第2部第1章第1節）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）について
ブックレット実施計画（案）について

第69回　平成29年6月24日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編原稿（第3部第2章第2節）について
『国士舘百年史』通史編原稿（第3部第3章第4節）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）について

第70回　平成29年7月22日（土）15時00分より

会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編原稿（第3部第2章第2節）について
『国士舘百年史』通史編原稿（第3部第3章第4節）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）について

第71回　平成29年9月1日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編原稿（第2部第4章第2節）について
ブックレット原稿（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）について

第72回　平成29年9月30日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　ブックレットタイトル（案）
ブックレット目次（案）
ブックレット原稿（案）
『国士舘百年史』通史編（第1部第1章第1節）について
『国士舘百年史』通史編執筆要領（案）について
『国士舘百年史』通史編執筆分担（案）について

第73回　平成29年10月21日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　ブックレット原稿（案）
『国士舘百年史』通史編（第2部第3章第2節）について

第74回　平成29年11月18日（土）13時30分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会

議室

審議事項　『国士舘百年史』通史編（第2部第3章第2節）について
『国士舘百年史』通史編（学園通年の財務状況）について
今後のスケジュール（案）について

第75回　平成29年12月16日（土）15時00分より
会場　世田谷キャンパス柴田会舘1階　同窓会会議室
審議事項　『国士舘百年史』通史編（第2部第3章第2節）について
『国士舘百年史』通史編（第2部第3章第5節）について
『国士舘百年史』通史編（資料：校舎配置図）について

2　国士舘史資料室の活動

1　調査・収集

(1) 主たる資料調査

平成29年1月から12月までに実施した資料調査ならびに収集の主な活動は以下の通りである。

学外調査

(1) フォトサービス所蔵ネガ等写真資料調査（於個人宅）

日　時：平成29年1月6日

調査者：福原一成・漆畑真紀子

(2) オーラル調査

(1) アンケート調査

次の一名の関係者にアンケート調査を行った。

・五十嵐寛司氏（昭和35年体育学部卒）

(3) 主な寄贈資料

・『国士舘商業学校卒業アルバム』（昭和17年12月）ほか3点

寄贈者：叶谷恒久氏

・学生主事メッセージ入り色紙（複写）ほか一式

寄贈者：志村浩毅氏（昭和63年文学部卒）

・『昭和56年度政経学部二部卒業アルバム』ほか計60点

寄贈者：柏崎吉行氏（昭和57年政経学部二部卒）

・『陸軍士官学校名簿　第2巻（50期以降）』（陸軍

表　収蔵資料および目録化の進捗状況

名　　称	内　　容	H27 年度目録化済	H28 年度目録化済	H29 年度目録化済
法人記録史料	法人（教学を含む）組織が作成・発行したか、または外部機関より受領した文書	12,609	14,157	15,568
発行物	学内で刊行される出版物	7,462	7,903	8,261
写真・その他の映像・音声資料	国士舘に関わる写真その他の映像・音声資料	7,031	8,610	8,872
物品資料	国士舘に関わる物品資料	873	953	1049
調査収集資料	学外の関係資料所蔵機関への調査収集資料	5,404	5,555	5,555
参考図書	主に各関係機関が発行している出版物	1,643	1,736	1,814
合計		35,022	38,914	41,119

（平成 29 年 12 月 31 日現在）

士官学校名簿編纂会・昭和57年・非売品）1点
寄贈者：早瀬享氏
・地理学巡検関連資料ほか一式
寄贈者：菰田忠利氏（昭和46年文学部卒）
・橋本俊雄（昭和9年3月国士舘専門学校卒）個人写真帖1点
寄贈者：橋本圭司氏
・上杉盟一国士舘専門学校卒業証書（昭和16年3月）ほか計14点
寄贈者：上杉栄治氏（元学校法人国士舘職員）
・柴田徳次郎使用コートほか関連資料一式
寄贈者：柴田正徳氏
・映画『姿三四郎』パンフレット（昭和52年10月・東宝）1点
寄贈者：寺島正芳氏

2　整理・保存

(1)　資料目録作成状況

本年（平成29年12月31日現在）の国士舘史資料室の所蔵資料、調査収集資料、参考図書等の目録（データベース）作成状況は別表の通りである。

(2) 資料保存

本年は、主に以下の資料について修復および保存処置を専門業者に委託した。

・昭和17年12月商業学校卒業アルバム電子化
・昭和17年専門学校学生募集ポスター電子化
・卒業アルバム（大学各学部、高等学校全日制・定時制、中学校、短期大学、福祉専門学校）電子化
・渡辺写真館撮影ネガ資料（フォト・サービス資料）電子化
・今井家資料アルバム（高等部・鏡泊学園関連）電子化
・法人記録史料『大講堂復元保存図綴』電子化
・橋本俊雄（昭和９年３月国士舘専門学校卒）個人写真帖ほか電子化
・頭山満揮毫扁額「壮国泣鬼神」電子化・複製資料作成
・昭和30年代～平成期　学園祭パンフレット資料電子化

3 利用・公開

(1) 収蔵資料の公開（収蔵資料検索システム運用状況）

国士舘史資料室は、収蔵資料利用者へのサービス強化のため、平成23年4月に閲覧室を整備し、また同時に、資料室ホームページ上で収蔵資料検索システムのＷｅｂ公開を開始している。収蔵資料検索システムを利用後に、資料閲覧のために来室する利用者も増加傾向にある。

本年度は、平成28年10月3日に学内教職員向けに公開した「国士舘アーカイブズ」の更新を、国士舘史資料室の創立１００周年事業と位置づけて、本年11月1日に新規資料826点を追加・公開した。現在「国士舘アーカイブズ」の概要は、収蔵資料検索システム中の１４４２３件、基礎年表検索システム中の３０９８件、基礎データ集（略年表など）の内容で、学内限定で利用可能である。この収蔵資料検索システムを含む「国士舘アーカイブズ」は、学内運用の後に、学外への公開・運用を検討している。

なお、平成26年度より進めている多種ブラウザへの対応については、本年5月8日に資料室ホーム

ページ上で公開する収蔵資料検索システムを改善し、多様ブラウザへの対応を図った。但し、室内で運用する同システムは、引き続き改善等を進めている。

(2) ホームページ（平成29年更新）

［お知らせ］

・梅ヶ丘校舎で「国士舘の歴史」展を開催（3月1日）

・『国士舘史研究年報　楓原』第8号の刊行について（3月10日）

・収蔵資料検索システムの各種ブラウザ対応について（5月8日）

・梅ヶ丘校舎で「世田谷の今昔―国士舘ゆかりの地―」展を開催（6月1日）

・夏季の一時閉室について（7月8日）

・ブックレット『国士舘100年のあゆみ』刊行について（11月4日）

［刊行物］

・『国士舘史研究年報　楓原』第8号の全頁（電子ブック・PDF）掲載（4月）

・ブックレット『国士舘100年のあゆみ』の全頁（PDF）掲載（11月4日）

アドレス

http://www.kokushikan.ac.jp/research/archive/index.html

(3) 教育普及活動

(1) 常設展示

国士舘史資料室では、柴田会館4階に展示室を設け、国士舘の歩みを示す関係資料を一般公開している。国士舘の創立者柴田徳次郎にゆかりの資料や、創立以来の支援者、各時代の学生生活に関する貴重な資料などを展示している。

なお、「国士舘100年祭」に合わせ、平成29年10月28日から11月3日まで、創立100周年記念展「国士舘の歴史」展を開催した。

開室日時　月曜～土曜10：00～16：00

（日曜祝祭日、学園の定める休日等を除く）

※観覧無料

平成29年1月～12月の観覧者数は、以下の通りである。

・学内者数　399名

学生・生徒　330名

教職員　69名

・学外者数　385名
　卒業生　131名
　一般　254名
・総観覧者数　784名

（2）梅ヶ丘展示ルーム企画展（出張展示）

世田谷キャンパス34号館（梅ヶ丘校舎）1階の展示ルームにおいて、次の企画展を開催した。

・平成29年3月～5月「国士舘の歴史」展
・平成29年6月～10月「世田谷の今昔―国士舘ゆかりの地―」展

（3）イベント企画展（出張展示）

平成29年のオープンキャンパスおよび父母懇談会開催時に世田谷キャンパス大講堂において、写真パネルによる企画展示「国士舘の歴史」を開催した。「国士舘の歴史」を写真で紹介すると共に、「国士舘九十年の軌跡」（DVD）等を上映した。それぞれ実施日および入場者数は、次の通りである。

・3月26日（日）オープンキャンパス　74名
・5月21日（日）父母懇談会　185名
・6月11日（日）オープンキャンパス　142名
・7月16日（日）オープンキャンパス　118名
・7月30日（日）オープンキャンパス　154名
・8月27日（日）オープンキャンパス　333名
・10月8日（日）オープンキャンパス　98名

（4）創立１００周年記念「国士舘１００年祭」関連企画展

本年度は、国士舘創立１００周年の年にあたり、学園全体で10月27日～11月4日の期間中を「国士舘１００年祭」と位置づけて、全学を挙げて各イベントを実施した。「国士舘１００年祭」実施にあたっては、特に、国士舘創立１００周年記念事業推進課が主導した①パネル展「国士舘１００年の歩み」（2会場）および②パネル展「国士舘スポーツ歴史展」の作成に関わったほか、国士舘史資料室では③「大講堂の歴史」展および④「国士舘の歴史」展を担当した。期間中の入場（観覧）者数は、のべ３１６３名で、各5会場の入場（観覧）者への展示解説などの対応を行った。各企画展示の詳

細は、以下の通りである。

①パネル展「国士舘100年の歩み」（12月22日迄）

・「国士舘を知るための6テーマ展」（34号館1階エントランス）

「創立者柴田徳次郎」、「国士舘と松陰神社」、「国士舘を支えた人々」、「世田谷キャンパスの変遷」、「町田キャンパスの変遷」、「多摩キャンパスの変遷」の6テーマを設けパネルで展示。

・「国士舘の沿革」（34号館B棟2階廊下）

創立以来の沿革を年表形式で構成し、全長約38mのパネルで展示。

②パネル展「国士舘スポーツ歴史展」（メイプルセンチュリーホール2階）

柔道部、剣道部、陸上競技部、サッカー部、レスリング部の各クラブの歴史をパネルで展示。

③国登録有形文化財登録記念「大講堂の歴史」展（大講堂）

大講堂の歴史と現存の構造や、大講堂の完成時に掲げられていた頭山満書「浩気

「国士舘の沿革」パネル展

「国士舘の歴史」展ポスター

満宇宙」の掛軸資料を展示し、大正8年完成以来の大講堂の概要と国士舘にとっての意義を紹介した。なお、入場者は11月2日387名、同3日1233名であった（前年11月2日341名、同3日1294名）。

④「国士舘の歴史」展（資料展示室〈柴田会館4階〉）

資料展示室の常設展示とあわせて新収蔵資料を公開・展示した。

（5）レファレンス（含資料閲覧）

平成29年1月～12月のレファレンスは、学内・学外合わせて64件であった（「国士舘100年祭」の対応を除く）。また、学外からの資料閲覧者は9名であった。

また本年は、「国士舘100年祭」をはじめとする創立記念イベントの実施や記念品の作成などに際して、学内の各部課室等から資料や事実照会に関する多数の問い合わせに対応した。既述の企画展示を除いた「国士舘100年祭」に関する主なレファレンス対応については、以下の通りである。

・世田谷キャンパス：「舘歌の歌詞由来ツアー」、「バスで行こう！　世田谷・町田・多摩ぐるっと国士舘3キャンパスめぐり」、「学生と行く、国士舘大学キャンパスめぐりツアー」、「吉田松陰シンポジウム」、「若林歴史講演会」、「楓門祭スタンプラリー」、記念樹太宰府天満宮贈梅樹サインの制作、創立記念式典時使用の歴史紹介映像の制作ほか

・町田キャンパス：「学生寮公開（寮展示）」、「国士舘の歴史展示」ほか

・多摩キャンパス：「多摩キャンパス歴史展示」、「スポーツ展示」ほか

（6）講義等支援

平成21年4月の国士舘史資料室発足後、資料室を利用する講義支援等の依頼は、毎年増加傾向にある。特に、大学の政経学部や法学部で開講する初年次教育の関連ゼミでの支援依頼のほか、博物館学関連の講義支援についても、毎年恒例となってきた。本年度は特に、政経学部開講の「フレッシュマン・ゼミナール」の全22コマに自校史教育が統一導入され、同学部の1年

生全員を対象とした合同授業の講義支援を実施した。支援にあたっては、座学のみに終始しないように、資料展示室や松陰神社などの見学や実習体験などを通して、各テーマの理解が深まるよう努めている。

また、学外の諸団体等からの依頼もあり、適宜対応している。なお、講義支援に留まらず、新採用教職員研修への支援なども随時実施している。主な講義等の支援と担当者は、次の通りである。

・平成29年1月11日　文学部仁藤智子准教授「史料の保存と管理」講義支援（於資料展示室他、3・4年生10名）（福原一成・漆畑真紀子）

・1月19日　文学部郡司菜津美講師「神奈川養護教諭研修会」支援（10名）（福原一成）

・2月22日　リーダーズキャンプ講話対応（福原一成）

・3月4日　アーカイブズカレッジ終了報告会展示室見学対応（35名）（熊本好宏）

・4月4日　新採用教員大講堂見学対応（9名）（浪江健雄）

・4月5日　体育学部体育学科新入生自校史教育支援（於多摩キャンパス、1年生240名）（福原一成）

・4月5日　文学部史学地理学科東洋史学コース新入生自校史教育支援（於大講堂、1年生27名）（熊本好宏）

・4月6日　新採用職員研修支援（7名）（福原一成）

・4月8日　法学部新入生オリエンテーション支援（於資料展示室・大講堂、1年生ほか400名）（福原一成・浪江健雄）

・4月19日　政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生197名、複数ゼミ合同にて実施）（福原一成）

・4月19日　法学部福永清貴教授「プレゼミA」講義支援（於資料展示室、1年生25名）（浪江健雄）

・4月19日　政経学部松本利秋非常勤講師「基礎ゼミナール」講義支援（於松陰神社・資料展示室、2年生26名）（熊本好宏）

・4月20日　文学部堀井雅道准教授「教育学の基礎A」講義支援（於柴田会館、1年生78

名）（福原一成）

・4月20日　政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生171名、複数ゼミ合同にて実施）（福原一成）

・4月21日　政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生179名、複数ゼミ合同にて実施）（福原一成）

・4月24日　政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生53名、複数ゼミ合同にて実施）（福原一成）

・4月27日　文学部堀井雅道准教授「教育学の基礎A」講義支援（於大講堂・松陰神社・豪徳寺、1年生78名）（福原一成）

・6月6日　政経学部米山多佳志非常勤講師「基礎ゼミナール」講義支援（於資料展示室、2年生18名）（福原一成）

・6月8日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」講義支援（於資料展示室、3年生55名）（熊本好宏）

・6月22日　法学部本山雅弘教授「専門ゼミⅡ」講義支援（於資料展示室、3年生19名）（福原一成）

・10月4日　文学部大庭裕介非常勤講師「現代史料を読む2」講義支援（於資料展示室、2年生6名）（菊池義輝）

・10月5日　文学部大庭裕介非常勤講師「近代史料を読む1」講義支援（於資料展示室、2年生16名）（福原一成・菊池義輝）

・10月18日　政経学部小池亜子准教授「アカデミック日本語4B」講義支援（於資料展示室・松陰神社、交換留学生8名）（福原一成）

・11月22日　政経学部小池亜子准教授「アカデミック日本語4B」講義支援（於豪徳寺、交換留学生7名）（福原一成）

・11月27日　理工学部堀内正昭非常勤講師「特別講義　歴史的建築の見かたと保存活用（世田谷6大学連携授業）」講義支援（於大講堂、1・2年生60名）（熊本好宏）

・12月7日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」講義支援（於大講堂、3年生46名）（熊本好宏）

（7）中学生の職場体験学習の受け入れ

世田谷区内の中学校から生徒の職場体験学習

についての依頼があり、受け入れを行った。資料室では仕事の一環である「歴史を編む」ことの体験や展示体験を中心として課題に取り組んでもらった。

・9月13日（水）～15日（金）
　世田谷区立松沢中学校2年生3名
・9月26日（火）～28日（木）
　世田谷区立梅丘中学校2年生2名

4　室の構成

(1) 職員（平成29年度）

室　　長　佐々　博雄（文学部教授）
事 務 長　福原　一成
職　　員　熊本　好宏
準 職 員　菊池　義輝
　　浪江　健雄（平成29年10月迄）
パート職員　稲葉　彩香
アルバイト学生
　高橋真生　　近藤奈央　　千葉圭太
　永見雄基　　吉野将生　　斎藤大悟
　林わかな　　福島紗羽　　冨　恵美

(2) 施設の概要

所在地　〒154-0023　東京都世田谷区若林4-31-10
名　称　柴田会舘
構　造　鉄骨鉄筋コンクリート造、地下2階、地上4階
資料室施設面積
2階：舘史事務室21.1㎡、舘史研究室36.8㎡、第1史料収蔵庫63.8㎡、第2史料収蔵庫18.5㎡（平成23年3月設置）、第3史料収蔵庫16.2㎡（平成28年8月設置）、第4史料収蔵庫21.1㎡（平成28年8月設置）
4階：室長室13.7㎡、閲覧室13.7㎡、展示室119㎡

5　活動日誌

（平成29年1月～12月）

【1月】

6日　フォトサービス所蔵ネガ等写真資料調査（於個人宅）（福原一成・漆畑真紀子）
　平成期各学部等卒業アルバム（21世紀アジア学部）電子化委託（ドキュメントステーション）

11日　文学部仁藤智子准教授「史料の保存と管理」講義支援（於資料展示室ほか、3・4年生10名）（福原一成・漆畑真紀子）
19日　文学部郡司菜津美講師「神奈川養護教諭研修会」支援（10名）（福原一成）
21日　第64回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催

【2月】
3日　昭和17年12月商業学校卒業アルバム撮影委託（堀内カラー）
9日　昭和17年専門学校学生募集ポスター撮影および複製資料納品（堀内カラー）
16日　平成期各学部等卒業アルバム（21世紀アジア学部）電子化納品、平成期各学部等卒業アルバム（体育学部・工学部・福祉専門学校）電子化委託（ドキュメントステーション）
18日　第65回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催
22日　リーダーズキャンプ講話対応（福原一成）

【3月】
1日～5月31日　世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎展示コーナー「国士舘の歴史」展開催
1日　ホームページ更新（「お知らせ」梅ヶ丘校舎で「国士舘の歴史」展開催）
4日　アーカイブズカレッジ終了報告会展示室見学対応（35名）（熊本好宏）
17日　第66回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催
22日　平成期各学部等卒業アルバム（体育学部・工学部）電子化納品、平成期各学部等卒業アルバム（政経学部二部・法学部）電子化委託（ドキュメントステーション）
24日　昭和17年12月商業学校卒業アルバム撮影納品（堀内カラー）
26日　平成28年度オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者74名）
31日　漆畑真紀子（準職員）退職

【4月】
1日　菊池義輝（準職員）着任
3日　渡辺写真館撮影ネガ資料電子化委託（堀内カラー）
4日　卒業アルバム（短期大学）電子化委託（関東インフォメーションマイクロ）

新採用教員大講堂見学対応（9名）（浪江健雄）

5日　体育学部体育学科新入生自校史教育支援（於多摩キャンパス、1年生240名）（福原一成）

文学部史学地理学科東洋史学コース新入生自校史教育支援（於大講堂、1年生27名）（熊本好宏）

6日　新採用職員研修支援（7名）（福原一成）

8日　平成期各学部等卒業アルバム（福祉専門学校）電子化納品（ドキュメントステーション）

法学部新入生オリエンテーション支援（於資料展示室・大講堂、1年生ほか400名）（福原一成・浪江健雄）

19日　政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生197名、複数ゼミ合同にて実施）（福原一成）

法学部福永清貴教授「プレゼミA」講義支援（於資料展示室、1年生25名）（浪江健雄）

政経学部松本利秋非常勤講師「基礎ゼミナール」講義支援（於松陰神社・資料展示室、2年生26名）（熊本好宏）

20日　卒業アルバム（短期大学）電子化納品、卒業アルバム（体育学部・工学部）電子化委託（関東インフォメーションマイクロ）

文学部堀井雅道准教授「教育学の基礎A」講義支援（於柴田会舘、1年生78名）（福原一成）

政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生171名、複数ゼミ合同にて実施）（福原一成）

21日　政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生179名、複数ゼミ合同にて実施）（福原一成）

22日　第67回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催

23日　日本アーカイブズ学会2017年度大会参加（於学習院大学）（浪江健雄）

24日　政経学部「フレッシュマン・ゼミナール」講義支援（1年生53名、複数ゼミ合同にて実施）（福原一成）

27日　文学部堀井雅道准教授「教育学の基礎A」講義支援（於大講堂・松陰神社・豪徳寺、1年生78名）（福原一成）

【5月】

6日　体育学部15期生資料展示室見学対応（16名）（福原一成）

8日　平成期各学部等卒業アルバム（高等学校・中学校）電子化委託（ドキュメントステーション）

資料室ホームページの収蔵資料検索システムを更新（マルチブラウザ対応バージョンの公開）

13日　東京都日本拳法連盟役員会資料展示室・大講堂見学対応（16名）（福原一成）

21日　平成29年度父母懇談会にて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者185名）

25日　卒業アルバム（体育学部・工学部）電子化納品、卒業アルバム（法学部・政経学部二部・福祉専門学校）電子化委託（関東インフォメーションマイクロ）

27日　第68回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催

【6月】

1日～9月30日　世田谷キャンパス梅ヶ丘校舎展示コーナー「世田谷の今昔―国士舘ゆかりの地―」展開催

1日　平成期各学部等卒業アルバム（法学部）電子化納品（ドキュメントステーション）

ホームページ更新（「お知らせ」梅ヶ丘校舎で「世田谷の今昔―国士舘ゆかりの地―」展を開催）

6日　政経学部米山多佳志非常勤講師「基礎ゼミナール」講義支援（於資料展示室、2年生18名）（福原一成）

8日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」講義支援（於資料展示室、3年生55名）（熊本好宏）

全国大学史資料協議会東日本部会２０１７年度総会参加（於淑徳大学千葉キャンパス）（菊池義輝）

10日　第21回国士舘百年史編纂員会開催

11日　平成29年度オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者142名）

16日　卒業アルバム（法学部・政経学部二部・福祉専門学校）電子化納品（関東インフォメー

ションマイクロ）

22日　立正大学史料編纂室職員来室
卒業アルバム（高等学校全日制・高等学校定時制・中学校）および今井家資料アルバム電子化委託（関東インフォメーションマイクロ）
法学部本山雅弘教授「専門ゼミⅡ」講義支援（於資料展示室、3年生19名）（福原一成）

24日　第69回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催

27日　頭山満揮毫扁額「壮国泣鬼神」電子化・複製資料作成委託（堀内カラー）

【7月】

6日　平成期各学部等卒業アルバム（政経学部二部）電子化納品（ドキュメントステーション）

14日　卒業アルバム（高等学校全日制・高等学校定時制・中学校）および今井家資料アルバム電子化納品、法人記録史料（「昭和57年大講堂復元保存図綴」ほか）電子化委託（関東インフォメーションマイクロ）

16日　平成29年度オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者118名）

21日　文化審議会が「国士舘大講堂」を国登録有形文化財への登録を答申と文化庁発表
平成期各学部等卒業アルバム（高等学校・中学校）電子化納品（ドキュメントステーション）

22日　第70回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催

30日　平成29年度オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者154名）

【8月】

3日　学園祭パンフレット資料電子化委託（ドキュメントステーション）

4日　渡辺写真館撮影ネガ資料電子化納品（堀内カラー）

5日　橋本俊雄（昭和9年3月国士舘専門学校卒）個人写真帖ほか電子化委託（堀内カラー）

27日　平成29年度オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者333名）

30日　法人記録史料（「昭和57年大講堂復元保存図綴」ほか）電子化納品（関東インフォメーションマイクロ）

【9月】

1日　第71回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催

5日　橋本俊雄（昭和9年3月国士舘専門学校卒）個人写真帖ほか電子化納品（堀内カラー）

13～15日　世田谷区立松沢中学校2年生（3名）職場体験学習対応（菊池義輝）

26～28日　世田谷区立梅丘中学校2年生（2名）職場体験学習対応（菊池義輝）

26日　学園祭パンフレット資料電子化納品（ドキュメントステーション）

27日　頭山満揮毫扁額「壮国泣鬼神」電子化・複製資料納品（堀内カラー）

30日　第72回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催

【10月】

4日　文学部大庭裕介非常勤講師「現代史料を読む2」講義支援（於資料展示室、2年生6名）（菊池義輝）

5日　文学部大庭裕介非常勤講師「近代史料を読む1」講義支援（於資料展示室、2年生16名）（福原一成・菊池義輝）

8日　平成29年度オープンキャンパスにて「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者98名）

11～12日　全国大学史資料協議会２０１７年度総会ならびに全国研究会参加（於愛知大学豊橋キャンパス）（菊池義輝）

18日　政経学部小池亜子准教授「アカデミック日本語４Ｂ」講義支援（於資料展示室・松陰神社、交換留学生8名）（福原一成）

21日　第73回国士舘百年史編纂委員会専門委員会開催

27日　「国士舘大講堂」が国登録有形文化財（建造物）に登録（「官報」号外235号掲載）

27日～11月4日　「国士舘１００年祭」開催

国士舘１００年祭「国士舘を知るための6テーマ展」監修（於世田谷キャンパス34号館1階エントランス、入場者348名）

国士舘１００年祭「国士舘の沿革」展監修（於世田谷キャンパス34号館2階廊下、入場

者832名）

27日～11月3日　国士舘１００年祭・国登録有形文化財登録記念「大講堂の歴史」展開催（於世田谷キャンパス大講堂、入場者１９２２名）

創立１００周年記念「国士舘の歴史」展開催（於世田谷キャンパス柴田会舘４階資料展示室、入場者61名）

28～29日　国士舘１００年祭教務部企画「学生と行くキャンパス巡りツアー（世田谷）」対応（於34号館・大講堂）

29日　国士舘１００年祭教務部企画「舘歌ツアー」対応（於資料展示室・大講堂、入場者４名）（福原一成）

第９回若林歴史講演会にて室長佐々博雄講演

31日　浪江健雄（準職員）退職

【11月】

1日　教職員向け「国士舘アーカイブズ」サイト更新

2日　ブックレット『国士舘１００年のあゆみ』納品（２５００部）

4日　創立１００周年記念式典・祝賀会挙行（於ホテルニューオータニ）

13日　政経学部５期生資料展示室・大講堂見学対応（５名）（福原一成）

22日　政経学部小池亜子准教授「アカデミック日本語４Ｂ」講義支援（於豪徳寺、交換留学生７名）（福原一成）

24日　体育学部１期生大講堂・34号館・メイプルセンチュリーホール見学対応（16名）（福原一成）

27日　理工学部堀内正昭非常勤講師「特別講義　歴史的建築の見かたと保存活用（世田谷６大学連携授業）」講義支援（於大講堂、１・２年生60名）（熊本好宏）

30日　世田谷６大学合同ＳＤ研修会大講堂・松陰神社見学対応（36名）（福原一成）

【12月】

7日　文学部井上尚明非常勤講師「博物館教育論」講義支援（於大講堂、３年生46名）（熊本好宏）

関係法規

国士舘百年史編纂委員会要綱

（趣旨）

第1条　学校法人国士舘（以下「本法人」という。）に、国士舘創設以来の歴史を記録する国士舘百年史（以下「百年史」という。）を編纂するため、国士舘百年史編纂委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（委員会の構成）

第2条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

(1)　理事のうちから、理事長の指名する者　若干人

(2)　国士舘大学専任教員のうちから、学長の指名する者　若干人

(3)　中学校・高等学校教員から、校長の指名する者　若干人

(4)　法人事務局長、国士舘史資料室長

(5)　学識経験者で、理事長が指名する者　若干人

2　委員は、理事長が委嘱する。

3　第1項第1号、第2号、第3号及び第5号の委員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。第4号の委員は、職務在任期間とする。

（委員長及び副委員長）

第3条　委員会に、委員長及び副委員長を置く。

2　委員長及び副委員長は、理事長が指名する。

3　委員長は、委員会を統括する。

4　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるときは、その職務を代行する。

（顧問）

第4条　委員会に顧問を置くことができる。

2　顧問は、理事長が委嘱する。

3　顧問は、必要に応じ委員会に出席するものとする。

4　顧問の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

（委員会の任務）

第5条　委員会は、次の各号の事項を行う。

(1)　百年史の編纂方針に関すること

(2)　百年史の刊行に関すること

(3)　その他、百年史編纂に関すること

（委員会の運営）

第6条　委員長は、委員会を招集し、議長となる。

2　委員会は、委員の過半数の出席をもって成立する。

3　委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決する。可否同数の場合は、委員長が決する。

4　委員会は、必要に応じ、委員以外の者を出席させることができる。

（専門委員会の設置）

第7条　委員会に、専門委員会を置く。

（専門委員）

第8条　専門委員は、委員長の推薦により理事長が委嘱する。

2　専門委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

（専門委員長及び副専門委員長）

第9条　専門委員会に、専門委員長及び副専門委員長を置く。

2　専門委員長は、委員会委員のうちから理事長が指名する。副専門委員長は、委員会委員のうちから専門委員長が指名する。

3　専門委員長は、専門委員会を統括し、代表する。

4　副専門委員長は、専門委員長を補佐する。

（専門委員会の任務）

第10条　専門委員会の任務は、次の各号のとおりとする。

(1)　百年史の刊行計画案の作成

(2)　百年史の執筆・編集・校訂

(3)　資料の調査収集、その他百年史編纂に関すること

（専門委員会の運営）

第11条　専門委員長は、専門委員会を招集し、議長となる。

2　専門委員会は、必要に応じ、専門委員以外の者を出席させることができる。

（経費）

第12条　委員会及び専門委員会の経費は、国士舘史資料室の予算を充てる。

（委員会及び専門委員会の庶務）

第13条　委員会及び専門委員会の庶務は、国士舘史資料室が担当する。

（改廃手続）

第14条　この要綱の改廃は、理事長が決定する。

附　則

この要綱は、平成21年5月27日から施行する。

国士舘史資料室規程

（趣旨）

第1条　この規程は、国士舘史資料室（以下「資料室」という。）の組織及び運営について定める。

（目的）

第2条　資料室は、国士舘の歴史に関わる文献、文書及び物品等（以下「資料」という。）を収集・整理・保管し、将来に継承して、建学の精神の高揚と学園及びその教育・研究の進展等に資することを目的とする。

（資料室長）

第3条　資料室長は、理事会の議を経て理事長が委嘱する。

2　資料室長の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

（職員）

第4条　資料室に、必要な職員を置く。

（学術調査員）

第5条　資料室に、学術調査員を置くことができる。

2　学術調査員は、本学園の教職員のうちから資料室長が推薦し、理事長が委嘱する。

3　学術調査員の任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。

4　学術調査員は、資料室長の指示を受け、次の調査研究等に従事する。

(1)　本学の理念及び本学史に関すること

(2) 資料の収集・整理・保管等に関すること
(3) 年史・資料集等に関すること
(4) その他資料室に関わる学術的事項

(専門員)

第6条 資料室に、専門員を置くことができる。

2 専門員は、資料室長の指示を受け、次の業務に従事する。
(1) 資料の収集・整理・保管・展示及び情報収集
(2) 年史・資料集等の企画及び編纂
(3) その他資料室に関わる専門的事項

3 専門員の任用期間は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

(収集資料)

第7条 資料室は、次の資料を収集する。
(1) 国士舘の建学の精神に関する資料
(2) 国士舘の発展の経緯に関する資料
(3) 国士舘が設置する諸学校に関する資料
(4) 国士舘の創立者及び先人に関する資料
(5) その他国士舘に関する資料

(所蔵資料の開放)

第8条 資料室は、学園内外の希望者に所蔵資料を開放し、教育研究に資するとともに学園の歴史の紹介に努めるものとする。

2 資料室の開室及び所蔵資料の閲覧等の細部は、別に定める。

(資料の貸出し)

第9条 資料室の所蔵資料は、貸出しをしないものとする。ただし、教育研究及び学園の広報に役立つ等、特に必要性が認められた場合は、所定の手続を経て貸出しをすることができる。

(資料の管理)

第10条 資料室の資料及び物品の物品管理責任者は、資料室長とする。

附　則

この規程は、平成21年4月1日から施行する。

編集後記

本誌は「国士舘創立１００周年記念」号として、従来よりカラーページを増やすとともに、田中昭之氏・木川正也氏、平崎真右氏、宇田快氏からの玉稿を掲載いたしました。お忙しいなか、ご寄稿いただいた皆様には深く感謝いたします。

国士舘史資料室は、国士舘が育んできた豊かな歴史と学園運営に関する資料などを次世代に継承し、時代に応じた円滑な学園運営の一助となるよう活動を継続していく所存です。先ずは『国士舘百年史　通史編』の刊行に向けて、資料室一同、気を引き締めて業務に取り組んでまいります。

（菊池義輝）

執筆者紹介（掲載順）

田中　昭之　株式会社　建文
木川　正也　株式会社　建文
平崎　真右　二松学舎大学ＳＲＦ研究助手
宇田　　快　遠泳監督
菊池　義輝　国士舘史資料室室員
浪江　健雄　立川市史編集委員

国士舘史研究年報　楓原　二〇一七　第九号

平成30年3月13日発行
編集　国士舘百年史編纂委員会専門委員会
　　国士舘史資料室
発行　学校法人国士舘
〒一五四―八五一五
東京都世田谷区世田谷四―二八―一
TEL ○三―三四一八―二六九一
Fax ○三―三四一八―二六九四
E-mail　archives@kokushikan.ac.jp
印刷　藤原印刷株式会社

ISSN 1884-9334